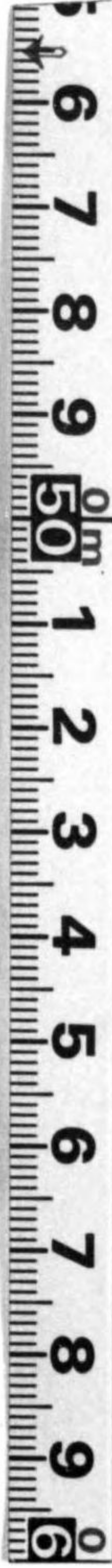


495.9-Ki46-(1)ウ



1200800302176

495.9
Ki 46
(1)㊦



始



コ-3843

56-25

495.9
K2 46
U)

東京帝國大學
醫科大學教授
醫學博士木下正中著

產波女學講義 上

明治四十四年發行

第五版



自序

産婆學ノ教科書世ニ行ハル、モノ甚多ク著譯相尋ク
此間ニ於テ産婆學講義ヲ刊行ス洵ニ蛇足ニ似タリ況
ンヤ講學多忙ノ餘暇著述ノ事ニ從フ杜撰ナキヲ保シ
難シト雖モ學術ノ進歩ハ瞬時モ止ムコトナク殊ニ防
腐消毒ノ方法ハ益完全ノ域ニ近ツキ治療ノ方法昔日
ノ如クナラス從テ助産ノ道モ亦其面目ヲ一新セント
ス此時ニ當リ産科ノ學術ヲ講究スル者豈默シテ止ム
ヘケンヤ故ニ聊カ懷抱スル所以ノモノヲ披ク以テ世



ノ產婆學ニ志アルモノ、爲ニ小補トナルアラハ幸甚
明治三十五年三月

木下正中識

第二版自序

授業ニ際シ或ハ産床ニ臨ミテ補刪ノ必要ヲ感シ或ハ
誤脱ヲ見出シタルモノヲ訂正シテ爰ニ第二版ヲ發行
ス斯學進歩ノ小補トナルヲ得ハ望足レリ

明治三十七年十月

醫學博士 木下正中識

第三版自序

産婆執ルトコロノ職務ハ母兒生命ノ安危ニ關ス其責任重且大ナリト謂フベシ然ルニ多數ノ産婆カ産床産褥等ニ於テ介助ヲ與フルトコロノモノヲ見ルニ寒心スヘキモノ一二ニ止マラス之レ一ハ學術ノ眞意ヲ理會スルノ困難ナルニ因ルモノナルベシ故ニ務メテ難解ノ字句ヲ去リ重複ヲ厭フコトナク迂遠ヲ嫌フコトナク再三同一事項ヲ記述シ且誤解ヲ避ケ誤謬ヲ正シ爲ニ一二ノ刪補ヲナシ以テ此困難ヲ排スルノ一助トナサントセリ

明治三十九年九月

醫學博士 木下正中識

第四版序

誤謬ヲ正シ實用ニ便ナランコトヲ期シテ刪補ヲ行ヒ爰ニ第四版ヲ發行ス

明治四十一年九月

醫學博士 木下正中識

第五版序

本書既ニ版ヲ重ヌルコト屢ナリト雖モ猶魯魚ノ謬ヲ免レズ勉メテ之ヲ正シ且補遺ヲナシ爰ニ第五版ヲ刊行セシム

明治四十三年十一月

著者識

例言

一 此書は主として理會し易きことを務めたれども専門の學問に關係あることなれば已むことを得ざる場合ありて學問上に用うる言語などを用ゐたるところあれば其心して講讀せられたし

一 此書説くところは實際に應用し易きことを主としたれば消毒の方法その他の取扱法救急の處置等は成るべく簡單にして行ひ易き方法を述べたり

一 産婆は屢々醫師の介助をなさざるべからざることあり故に麻醉を行ふとき及び産科手術を行ふときに要する介助に就て注意を講述せり

一 學術上の用語等にて理會し難きものは成るべく兩側に振假

名を施し一側は音讀又は訓讀を附し他側には解釋を以てせり
 一此書挿むところの圖書は概ね左の諸書より引用せり然れども亦問々自ら摸寫せるものをも用ゐるたり

- 濱田氏著 産婆學
- 榊氏纂譯 産婆學
- 佐伯氏著 普通産婆學
- 普漏西王國産婆學教科書
- 「シユルツ」氏著 産婆學教科書
- 「レオポルド」氏及「ツイフェル」氏合著 産婆學教科書
- 「フランク」氏著 産婆學教科書
- 「ウーケル」氏纂 産科學全書

「ミユレル」氏編纂 産科學全書
 「アールフルド」氏著 産科學
 「ルンゲ」氏著 産科學
 「ツワイフェル」氏著 産科學
 「ブナム」氏著 産科學
 「スクッチ」氏著 産科手術學
 「ハイツマン」氏摸圖 解剖圖譜
 其他一二の外科學教科書及び器械圖譜
 一此書は匆卒の際筆を起し爾來公私の用務繁劇を極め屢々稿を次ぐこと能はざりしを以て改版の際勉めて訂正を加へしも猶全編の一致を缺くことなしとせず讀者乞ふ之を恕せよ

明治四十三年十一月

産婆學講義上卷目次

緒論

第一節	産婆學の主意	一頁
第二節	産婆の職務	一
第三節	産婆の性質及其心得	四

第一編

第一章	産婆に必要な數量	九
第四節	尺度	九
第五節	重量と液量	〇
第六節	時間	一三

第七節	其他必要なる數學上の關係	一四
第八節	温度の比較	一五

第二章

人身の構造及其作用の概略

第九節	身體の構造	二一
第十節	骨	二一
第十一節	皮膚	二二
第十二節	筋肉	二三
第十三節	脈管	二四
第十四節	神經	二五
第十五節	内臓	二六
第十六節	五官器	二六

第十七節	血液及淋巴液	二七
第十八節	腺	二八
第十九節	身體の區分	二八
第二十節	頭部	二八
第二十一節	軀幹	三一
第二十二節	四肢	四〇
第二十三節	全身器官の作用の大略	四二
第二十四節	婦人固有の體格	四八
第二十五節	婦人の骨盤	四八
第二十六節	薦骨	四九
第二十七節	尾骶骨	五一
第二十八節	髖骨	五一

第二十九節	骨盤の關節	五五
第三十節	骨盤の區別	五六
第三十一節	大骨盤	五七
第三十二節	小骨盤	六〇
第三十三節	骨盤上口	六一
第三十四節	骨盤腔	六三
第三十五節	骨盤下口	六五
第三十六節	骨盤の壁	六六
第三十七節	骨盤の傾斜	六七
第三十八節	骨盤軸	六八
第三十九節	骨盤内に在る器官	六九
第四十節	婦人生殖器	七〇

第四十一節	乳房	七〇
第四十二節	外陰部	七二
第四十三節	内生殖器	七六
第四十四節	腔	七六
第四十五節	子宮	七八
第四十六節	輸卵管	八三
第四十七節	卵巢	八四
第四十八節	排卵の機能と月經	八六
第四十九節	膀胱及尿道	八九
第五十節	直腸	九〇

第三章 消毒清潔法

第五十一節	消毒清潔法の必要	九二
第五十二節	手指の消毒清潔法	九六
第五十三節	妊婦産婦褥婦の生殖器の消毒清潔法	一〇二
第五十四節	器械の消毒法	一〇四
第五十五節	繃帶材料の消毒法	一〇七
第五十六節	衣類の消毒清潔法	一一三

第二編 正規妊娠の経過及妊婦の取扱法

第五十七節	妊娠の意義	一一五
第五十八節	妊娠中に於ける卵子の變化	一一八
第五十九節	卵膜	一二二
第六十節	胎盤	一二三

第六十一節	臍帶	一二五
第六十二節	羊水	一二七
第六十三節	胎兒	一二九
第六十四節	成熟胎兒	一三三
第六十五節	早熟胎兒	一四〇
第六十六節	胎兒の位置	一四一
第六十七節	妊娠の爲に起る婦人生殖器の變化	一四四
第六十八節	子宮の膨大に因りて起る妊婦身體の變化	一五六
第六十九節	妊婦の全身に起る變化	一六〇
第七十節	妊娠の診断	一六三
第七十一節	妊娠の徴候	一六五

第七十二節	妊娠並に分娩の時期を算する方法……………	一七〇
第七十三節	妊婦の診察法……………	一七四
第七十四節	外診法……………	一七六
第七十五節	骨盤外計測法……………	一八七
第七十六節	内診法……………	一九三
第七十七節	初妊と經産との鑑別……………	二〇〇
第七十八節	複胎妊娠の診斷……………	二〇五
第七十九節	妊婦の攝生法……………	二〇七

第三編 正規分娩の經過及産婦の取扱法

第八十節	分娩の種類……………	二一七
第八十一節	娩出力……………	二一九

第八十二節	分娩經過の時期……………	二二三
第八十三節	正規分娩の經過……………	二二四
第八十四節	分娩時に於ける胎兒の位置……………	二三四
第八十五節	第一後頭位に於ける兒頭の産道經過の方法即ち分娩機轉……………	二四〇
第八十六節	産婦の診察法……………	二四八
第八十七節	後頭位の診斷及其分娩經過……………	二六〇
第八十八節	分娩經過の時間……………	二六七
第八十九節	分娩の際に於ける産婆の處置……………	二六八
第九十節	會陰保護の方法……………	二八三
第九十一節	初生兒臍帶の剪斷……………	二九二
第九十二節	後産期に於ける産婆の處置……………	二九五

第九十三節	分娩後の取扱法	三〇一
第九十四節	後頭位分娩の違例	三〇四
第九十五節	顔面位	三〇九
第九十六節	顔面位の診断	三一二
第九十七節	第一顔面位分娩の経過	三一六
第九十八節	前額位	三一九
第九十九節	骨盤端位	三二一
第一百節	骨盤端位の分類	三二三
第一百一節	骨盤端位の診断及分娩経過	三二四
第一百二節	骨盤端位分娩に於ける處置	三三〇
第一百三節	正規分娩と異常分娩	三三八

第四編 正規産褥の経過及褥婦並に初生兒の取扱法

第一百四節	正規産褥	三四一
第一百五節	褥婦の處置並に看護	三四七
第一百六節	經産の鑑定	三五四
第一百七節	初生兒の看護	三五六
第一百八節	初生兒の榮養	三五七
第一百九節	小兒の沐浴	三六五
第一百十節	小兒の衣服	三六九
第一百一節	小兒の健否	三七一
第一百二節	乳母の撰擇	三七七
第一百三節	初生兒の人工榮養	三七九

產婆學講義上卷

東京帝國大學 醫學博士 木下正中 著

緒論

第一節 產婆學の主意

產婆學は產婆に必要なる學術を講述するものにして妊娠分娩及產褥の普通なる經過と異常なる經過と其等の取扱法を示すものなり

第二節 產婆の職務

產婆は平産を取扱ひ産婦及初生兒の看護と處置をな

し養生の法を守らしめ且之を誨ゆるを以て務となす
ものなれば先づ之に關する學術に通ずることを要す故に
一定の學科を修め且學習をなしたるものにして一定の試験
を経たる後にあらざれば之に従事する事を得ざるは勿論な
り
正規の妊娠分娩産褥は健康なる壯年の婦人に起る變化なれ
ども病氣にはあらず故に造化の妙機に由りて危険なく経過
するを常とするものなれども此時には僅なる妨によりても
難産となり爲に妊婦産婦褥婦又は初生兒の健康を害し或は
生命を失はしむるに至る事あれば平産と雖も注意して疾病
を起さざる様障害の起り來らざる様に攝生を守らしめ又は
取扱ふべき事はいふまでもなく猶其等の異常あるか又は其

徴候ありたる時は速に醫師の治療を受けしめ決して其時機
を失ふべからず然れども平産にして何等の異常をも來さず
る時は自ら學び得たる學術を應用して適當なる處置をなす
べく異常なる状態あるごきにては醫師の來るまでは許され
たる限りに於て必要あらば之に應ずるの處置をなすべし故
に凡て此等の點に就きては今より述ぶる處の取扱法を應用
して過なきことを務むべしかくの如く産婆の職務は母兒
の健康と生命とに關するものにして甚だ重大なるもの
なり而して母兒の健康を害し或は生命を失はしむること
は啻に一家の不幸なるのみならず延きて一國の盛衰にも關
係あるものなれば宜しく學と術とを修むるに怠ることなく
殊に政府の試験に及第したる後にても猶之を研究すること

を忘れず實際に就ても觀察を綿密にして經驗を重ね又時々教科書を繙き又は師に就きて一般學術の進歩に後れざらんことを謀るべし

第三節 産婆の性質及其心得

産婆は女子に最も適當したる職分の一にして上に述たるがごとく平産の時には母親と初生児との生命に關することを引受け異常なる事柄の起らざる様に豫防をなし又は異常なる事柄の起りたる時早く之を認め醫師の治療を受くるの時期を誤らざらしむることを務むべきものなり而して其職分を盡す爲には晝夜の差別なく業を執らざるべからざるが故に身體は強壯なることを要す且其五官の機能殊に耳目及び

手指の作用と感覺とは鋭敏ならざれば診察をなし又は取扱をなす時に敏活にして確實なることを得ず而して其技術をを用うる場合には熟練を要することは勿論にして猶其他綿密なる注意を以て判断をなし且取扱につきては沈着にして順序を誤らず危険に對しても自己の力にて爲し得る限り之を防ぐといふ勇氣を要す其外博愛の事業を職分とするものなれば常に徳義を守りて正直親切廉潔忍耐謙遜の心を失はず攝生に心を用る清潔を重んずべし正直なるものにあらざれば世間に立ちて信用を受け充分に職分を盡し得ざるべく親切の心なくば夜間の看侍又は難産の世話なごも充分に届き難し又廉潔なる心なくば僅かなる利慾の爲に尊き職分にあるまじきことをなし又は貧富によりて取扱を異にする

が如きことありて世人の信用を失ひ遂に顧るものなきに至るべし

産婆は上に述べたる如く晝夜の別ちなく業を執り時として徹夜して數日を過すことさへあり勝なれば常に自ら食物、睡眠、便通等に注意し暇あれば身體と精神との休養をなすことを務べし殊に月經時などには攝生に注意すべし、清潔を重ざることこの必要は後に至りて消毒の事を説く時にも知り得べけれど兎も角身體を清潔に保つは己の攝生の上より云ひても大切なることなり又自ら清潔に保つ人は産婦、初生兒を取扱ふにも亦清潔を守るべきを以て誰しも不潔なる人を産婆として迎へんよりは清潔に其身を保てる人を迎へんことを望むべきは自然の理なり

以上述ぶるが如き性質は産婆となるには必要なるものなれば身體の虚弱なるもの即ち慢性の全身諸病に罹れるもの又は疾病の爲に屢業を執ること能はざるもの並に傳染性の疾病假令は結核、梅毒、癩病、疥癬等の如きものを患るもの、癩癧、ヒステリ―の如き性質の病あるものは此業を執るに不適當なり

不具者の如きは固より云ふ迄もなし

其他業務上の事に就ては秘密を守り何處の何誰に斯ることありたりなご業務に依りて知り得たる事柄にして其人の名譽に關することを洩すことなきやう慎むべし此事柄は裁判所に定れる位にて甚だ大切なることなり又醫師或は同業者等のことを善惡に關らず喋々しく話すは宜しからず自慢

話などは勿論なすべからず
而して政府より免状を受け其業務を執るに至りても猶益々知識と技術との進まんことを心懸け既に前にも述べたるが如く日々業務の上にて見たること取扱ひたることを成べく細かに書き留め其爲したることの正しかりしか過ちなかりしかを考へ疑はしきことあれば書籍に就き又は先輩醫師等に就きて之を明にすべし且學問の進歩に従ひて取扱法なごにも種々の變更を生ずることあれば此等の新しき事柄を學ぶことも亦忽にすべからず
凡そ上に述べたることを謹みて服膺せば庶幾くは産婆の職分を全くするここを得べくして産婆の品位次第に高まり世人の尊敬と信用とを得るに至るべきこと疑を容れず

第一編

第一章 産婆に必要な數量

第四節 尺度

産婆に必要な數量は尺度重量液量時間等なり其内にて尺度は我邦の尺度特に曲尺及び萬國共通の「メートル」尺度を用ひ而して「メートル」尺度は「メートル」通常一米を單位とし

- 一米の十分の一を 一「デシメートル」通常一粉を書す
- 一粉の十分の一を 一「センチメートル」通常一糶又は一仙米を書す
- 一糶の十分の一を 一「ミリメートル」通常一耗又は一密米

と書す)

こいふ一米より大なる数は必要なること少なき故に略す今之を我邦の曲尺に比較するに次の如し

- 一米は 曲尺三尺三寸に當り
- 一粉は 曲尺三寸三分に當り
- 一糶は 曲尺三分三厘に當り
- 一耗は 曲尺三厘三毛に當る

第五節 重量と液量

重量は我邦にて通常用うる貫匁量と萬國共通の「グラム」量と
 となり「グラム」量も亦「グラム」通常一瓦と書すを單位となし
 一瓦の十分の一を 一「デシグラム」通常一瓊

一瓊の十分の一を 一「センチグラム」通常一瓊
 一瓊の十分の一を 一「ミリグラム」通常一瓊と云ふ
 又一瓦の十倍を 一「デカグラム」通常一瓊
 一瓊の十倍を 一「ヘクトグラム」通常一瓊
 一瓊の十倍を 一「キログラム」通常一瓊又は一基
 といふ而して通例瓦より大なるものにては瓊に至る迄は瓦を用ゐる瓊等を用ゐず瓊よりも大なるときは幾十瓊又は幾百基を用ゐるなり假令は三千瓦或は三基といひ三萬七千瓦或は三十七基と云ひ得るが如し
 重量の比較は先づ「グラム」量に於ては
 一瓦は 我邦重量の二分六厘六毛餘に
 一瓊は 同上 二百六十六分餘に當る故に

一珽は 我邦重量の二分六厘六毛の千分の一に當る
次に本邦重量は

一匁は 「グラム」量の三五七〇七五五十六珽餘に當り
一分は 同上 三釐七十六珽弱に當り
一貫は 同上 三千七百五十六瓦餘又は三基七

百五十六瓦餘に當る

故に體重等を比較する時は大凡四瓦を一匁と考へ大凡四珽を
一貫目と考へて換算すれば便利なり然れども藥品等の重量
は精密に量ることを要す

液體の量を計るにも「グラム」を用う我邦に於ては石斗升合、
勺等の數を用う之を比較するに

一珽又は一「リートル」は 我邦液量五合五勺四撮餘に

一石は 百八十「リートル」餘に
一升は 二「リートル」〇八百〇三瓦即ち大凡二「リートル」に
當る 其中間の數は推て知るべし

第六節 時間

時間は時、分、秒を用ゐる六十秒は一分、六十分は一時にして二十
四時を一日とすことなご既に一般に知れる處にしてこの
一日の二十四時を午前と午後とに分ち夜半より日中迄を午
前とし日中より夜半迄を午後とす故に夜半を以て午前零時
とし日中即ち正午を以て午後零時とす而して其間を十二時
に分つものなり然るに午前十二時午後十二時なる言葉を
用ゐることは普通の場合には多き爲に間違を起し易き故に他人

に話すべき又は書き示す場合には成べく零時と云ふ方を用うべし然るときは晝の十二時又は夜の十二時と云ふよりも明に之を知り得べし即ち何月何日夜十二時と云ふときは其いひ現したる日は來らんとする日なるか既に過去りたる日を示すかを知り難きことあれば午前零時と云ふ言葉を用うるを宜しとす然るときは今より始まるべき日を以てすることを容易に知り得べし

第七節 其他必要なる數學上の關係

其外に通常用うる「プロセント」(％なる記號を用うることあり)といへる言葉あり假令は五「プロセント」の石炭酸水といへば溶液百瓦の内に石炭酸五瓦を含める割合なることを表はす

ものにして二十倍の石炭酸水と云ふに等し又五「プロセント」の「ザリチール」酸澱粉といへば調劑したるもの百瓦の内に「ザリチール」酸五瓦澱粉九十五瓦を含むの割合なることを示すものなり故に前に例したる石炭酸水に於ても溶解したる石炭酸五瓦を水百瓦に溶したるものにあらずして水九十五瓦に溶したるものなりと知べし
此書用うる處の數量はなるべく萬國普通の「メートル」又は「グラム」等の數を用る之に我邦固有の數量を附記し直に對照するに便利ならしむることを勉む

第八節 温度の比較

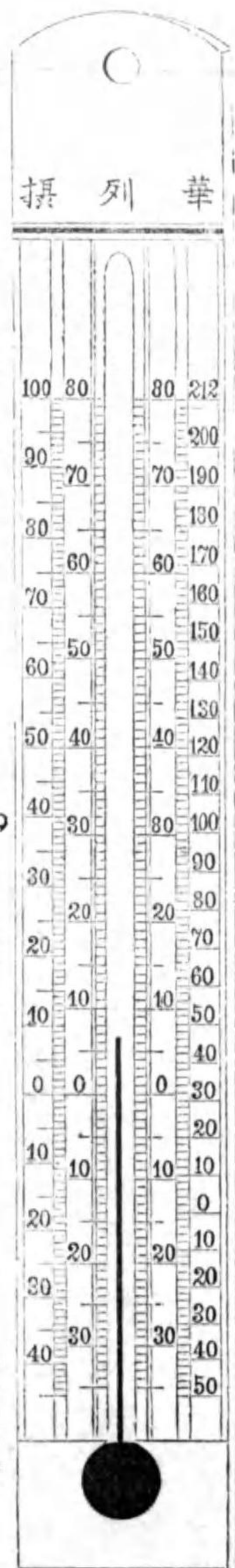
我邦には古來温度を測る標準なし故に歐米に用ゐらるるもの

を用うれども其測定に用ゐらるる寒暖計又は檢温器には三種ありて一を「セルジウス」氏（通常攝氏と云ふ）、一を「ファレンハイト」氏（華氏）、一を「レオミュール」氏（列氏）の寒暖計と云ふ體温を計るには普通攝氏の寒暖計を用う而して此講義中單に何度と云ふときは常に攝氏寒暖計の度を示すなり又俗間氣温を計りて暑中には九十度を越えたりなご稱するは攝氏又は列氏の寒暖計にてはあり得べからざることなれば華氏の度なり華氏の寒暖計は多く英國に用ゐられ英人は體温を示すにも華氏の度を用うることあり斯る場合には百度内外の數を用うることあり列氏の寒暖計は獨逸國などにて俗間に多く用ゐらる。

今三氏の寒暖計の異なる點を擧て之を理解せしむべし通常寒

暖計には氷點又は結氷點及び沸騰點なる二點を定む氷點とは水の氷結する温度にして常に變りなく沸騰點は水の熱を加へられて沸騰する温度にして之れ亦常に變りなきものにして此二點は何れの場合に於ても一定せり而して攝氏及列氏は氷點を以て零度と定め華氏は氷點を三十二度と定め氷點と沸騰點との間は攝氏に於ては百度、列氏に於ては八十度、華氏に於ては百八十度なることは左圖に示すが如し

第一圖 三氏の寒暖計を比較したる圖



故に若し攝氏寒暖計にて測りたる温度を他の二氏の寒暖計に

て測りたるときは其何度に當るやを知らんと欲し又は反對に他の二氏の寒暖計にて測りたる度数を攝氏の度に換算せんとするときは次に述ぶるが如くになすべし

(一) 攝氏の寒暖計にて測りたる度数を華氏の度を以て示さんとする時は

攝氏の度を五にて除し之に九を乗じ更に三十二度を加ふべし即ち

$$\frac{\text{攝氏の度} \times 9}{5} + 32 = \text{華氏の度}$$

(二) 攝氏の度を列氏の度に換算するには攝氏の度を五にて除し之に四を乗ずべし即ち

$$\frac{\text{攝氏の度} \times 4}{5} = \text{列氏の度}$$

(三) 列氏の度を華氏の度に換算するには

列氏の度を四にて除し之に九を乗じ更に三十二度を加ふべし即ち

$$\frac{\text{列氏の度} \times 9}{4} + 32 = \text{華氏の度}$$

(四) 列氏の度を攝氏の度に換算するには

列氏の度を四にて除し之に五を乗ずべし即ち

$$\frac{\text{列氏の度} \times 5}{4} = \text{攝氏の度}$$

(五) 華氏の度を攝氏の度に換算するには

華氏の度より三十二度を減じ之を九にて除し更に五を乗ずべし即ち

$$\frac{(\text{華氏の度} - 32) \times 5}{9} = \text{攝氏の度}$$

(六) 華氏の度を列氏の度に換算するには
華氏の度より三十二度を減じ之を九にて除し更に四を乗
すべし即ち

$$\frac{\text{華氏の度} - 32}{9} \times 4 = \text{列氏の度}$$

産婆の検温器を用うるは産婦及び嬰兒の體温を測
り或は浴湯の温度を測り又は室内の温度を知ら
んと欲する場合等なり
検温器を用ゐて體温を測るの法は後篇に於て詳かに述べし

第二章 人身の構造及其作用の概畧

第九節 身體の構造

人の身體は骨の如き硬き部分と皮膚、筋肉、脈管、神經、内臓等
の如き軟らかき部分と血液、淋巴液の如き流動體とより成
る

第十節 骨

骨には扁平なるもの、長きもの、短きものなごありて互に相集り
相連りて人身の骨格を作り筋肉之に附着して運動を營ま
しめ皮膚は之を被ひて外表を作る而して其内には種々の内
臓を容れて之を保護す而して骨は互に靱帶といへる白く

して強靱なる線條に依りて結合せらる其結合せらるる處を關節といふ其關節の内にて動くものを可動性關節といひ四肢の關節の如し動かざるものを不動性關節といふ後に詳しく述ぶる腰部にある兩側の耻骨の相關節するが如し又頭部の諸骨の如く扁平なるものゝ關節を縫合縫隙又は銜縫といふ軟骨は骨と殆ど同じきものなれども骨よりも軟かきものなり

第十一節 皮膚

皮膚は全身の外面を被ひ其上には殆ど處として毛を生ぜざるどころなし但し手掌足蹠及び爪ある處には之を見ず爪も亦皮膚に附屬するものなり皮膚の直下には脂肪組織ありて

俗に脂肪肉といふ黄色を呈す此組織は處によりて多き處と少き處とあり皮膚は口鼻肛門腔の如き部分に於て粘膜に連る其他猶皮脂腺及汗腺と名くるもの皮膚の内において皮脂と汗とを分泌す

第十二節 筋肉

筋肉は脂肪組織の下に在り俗に肉といふ其色赤くして少しく暗褐色を帯ぶる纖維にして骨より骨に附着し纖維の伸縮に依りて骨を動かす作用あり其骨に附着する部分は多くは硬くして白く光澤ある纖維をなす之を腱と云ふ又心臓胃腸子宮其他の内臓にあるものは恰も護謨製の囊の伸縮をなし得る如く伸縮して血液食物又は胎兒などを送り出し又膀胱の

口、肛門の周圍などに在るものは其内容の絶えず流れ出ざる爲に囊の口を緊め括りたる如き作用をなす此等の筋肉の伸縮を營むは神経の作用に依る
筋肉の外部には筋膜ありて之を包む

第十三節 脈管

脈管は血管及淋巴管を云ひ血液及淋巴液其内を流る、血管には二種ありて動脈管及靜脈管と云ふ動脈管は動脈血を心臟より受て之を全身に配り無數の極めて細き血管即ち毛細管に依りて血液を全身に送り人身を構造する總ての部分に養ひ其間に於て變化を受けたる血液即ち靜脈血は細き靜脈管に入り漸く相合して太き靜脈管に入り心臟に還流する

作用をなす爪、毛等の外全身に脈管の分佈せざる處なし
淋巴管は血液中の水の如き成分の一部分が身體諸部を養ひたる後に靜脈血の靜脈管に集る如くに相集りて漸次に大なる淋巴管に集り終に靜脈管に合するものなり

第十四節 神經

神經は白き纖維にして腦髓と脊髓とより出でて全身至る處に分佈し運動を起すことと知覺を傳ふることを司る故に痛痒を覺え寒熱を感じ目、耳、口、鼻に於ける視、聽、味、嗅の作用を營むは皆神經に由るものなり

第十五節 内臓

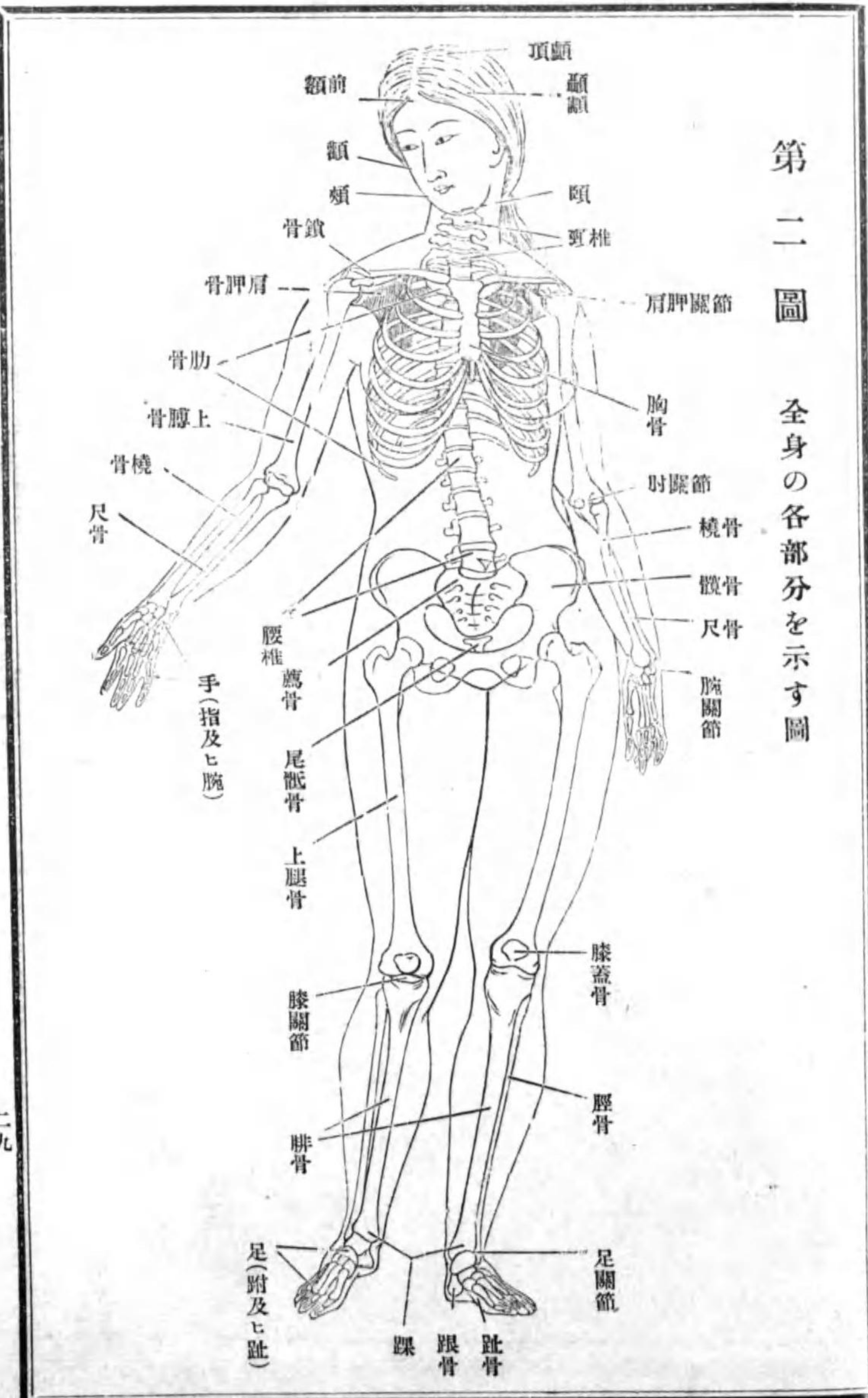
内臓は脳髓、脊髓、心臟、肺臟、肝臟、脾臟、胃、腸、膀胱、其他生殖器等を云ふ或は運動及知覺の源となり或は血液分佈の中心となり或は呼吸を司り或は食物を取りて之を消化し或は排泄物を體外に捨るの作用をなし或は生殖の事を主るものなり

第十六節 五官器

五官器は目、耳、鼻、舌の如き視、聽、嗅、味の事を主る器官の他主として皮膚にありて痛を覺え痒を感じ寒熱を分ち物に觸れて之を感じる觸器をいふ而して神經分佈の状態は此器官に於て最も巧妙なるものなり

第十七節 血液及淋巴液

血液は赤色の液體にして血管と心臟とに充ち心臟の作用によりて體内を殘る限なく循環して人身の諸器官を養ふの用をなす之を動脈血及靜脈血の二種に分つ動脈血は營養の成分に富み鮮紅色なり而して動脈血の全身を養ひたる後は其色暗紅色となりて營養をなす成分を含むこと少し之を靜脈血と云ふ而して靜脈血は次に述ぶるところの淋巴液及乳糜と合したる後心臟を経て肺臟に入り呼吸の作用に由りて再び動脈血となり全身に分佈す
淋巴液は無色透明の液にして身體の諸器官に分配せられたる血液の一部分より變化して湧き出で淋巴管に集りて遂に



第二圖 全身の各部分を示す圖

靜脈血に合す又消化したる飲食物より生ずる處の乳糜と稱する乳汁の如き白色の液も亦之に屬し同じく靜脈血に合す

第十八節 腺

其他に腺と名くるものありて種々の液を造る假令は唾腺は唾液を造り汗腺は汗を造るが如きものなり

第十九節 身體の區分

人身體は上に述べたる如く種々の器官より成る之を分ちて三大部分となす頭部、軀幹及四肢これなり

第二十節 頭部

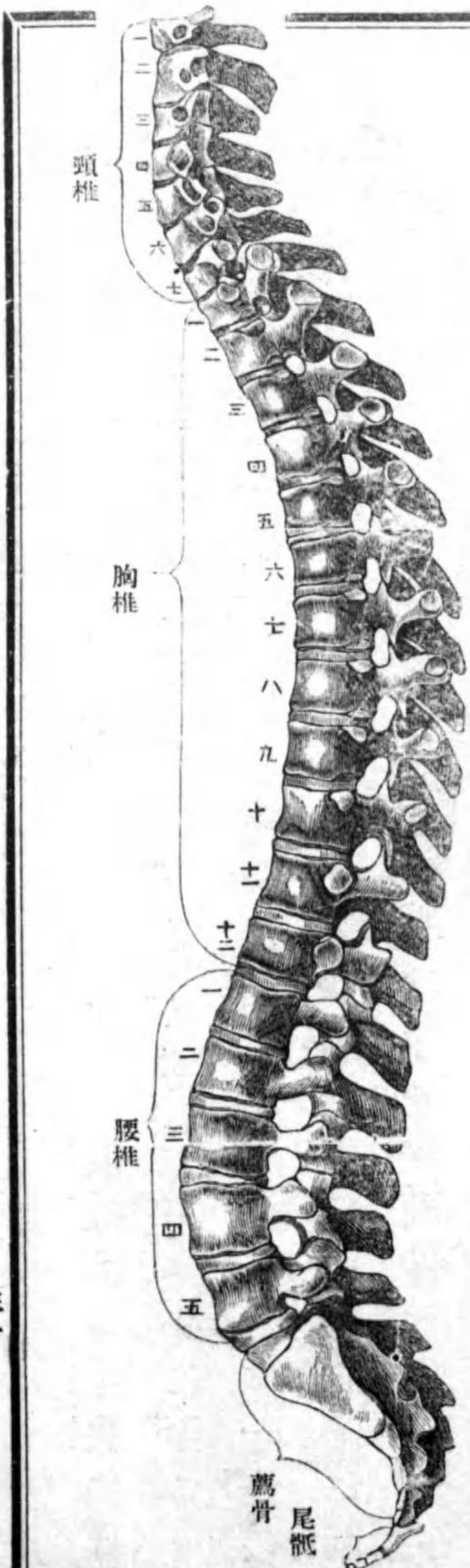
頭部は最も上部にありて頭蓋と顔面との二に分つ頭蓋は六個の扁平なる骨即ち一個の前額骨、後頭骨、及左右各一個の顛頂骨、顛顛骨より成り之に依りて頭蓋腔を作り其内には知覺、運動及精神の中樞なる腦髓を容る其骨の關節は恰も犬の牙の如くに互に交錯し運動を營むことなく所謂縫合を成す而して頭蓋の頂を顛頂部といひ前方を前頭部後方を後頭部耳の上方を顛顛部といふ初生兒の前額骨は左右二個の骨より成り後に癒合して一個の骨となるものなり故に初生兒の頭蓋は七個の骨より成るものなり、顔面は頭蓋よりも多數にして且複雑なる形狀を有する骨より成り下顎骨の外は皆不動性に接合す顔面を眼、鼻、頰、上顎、下顎、上唇、下唇、口、頤、耳等の小部分に區別す五官器は主と

して顔面の内に其感覺を受くる器を有し之に受けたる感覺を腦髓に傳ふ而して鼻、口の如き呼吸、消化等を營む器官の出入口も亦此部に在り

第二十一節 軀幹

第三圖

脊柱骨を示す圖

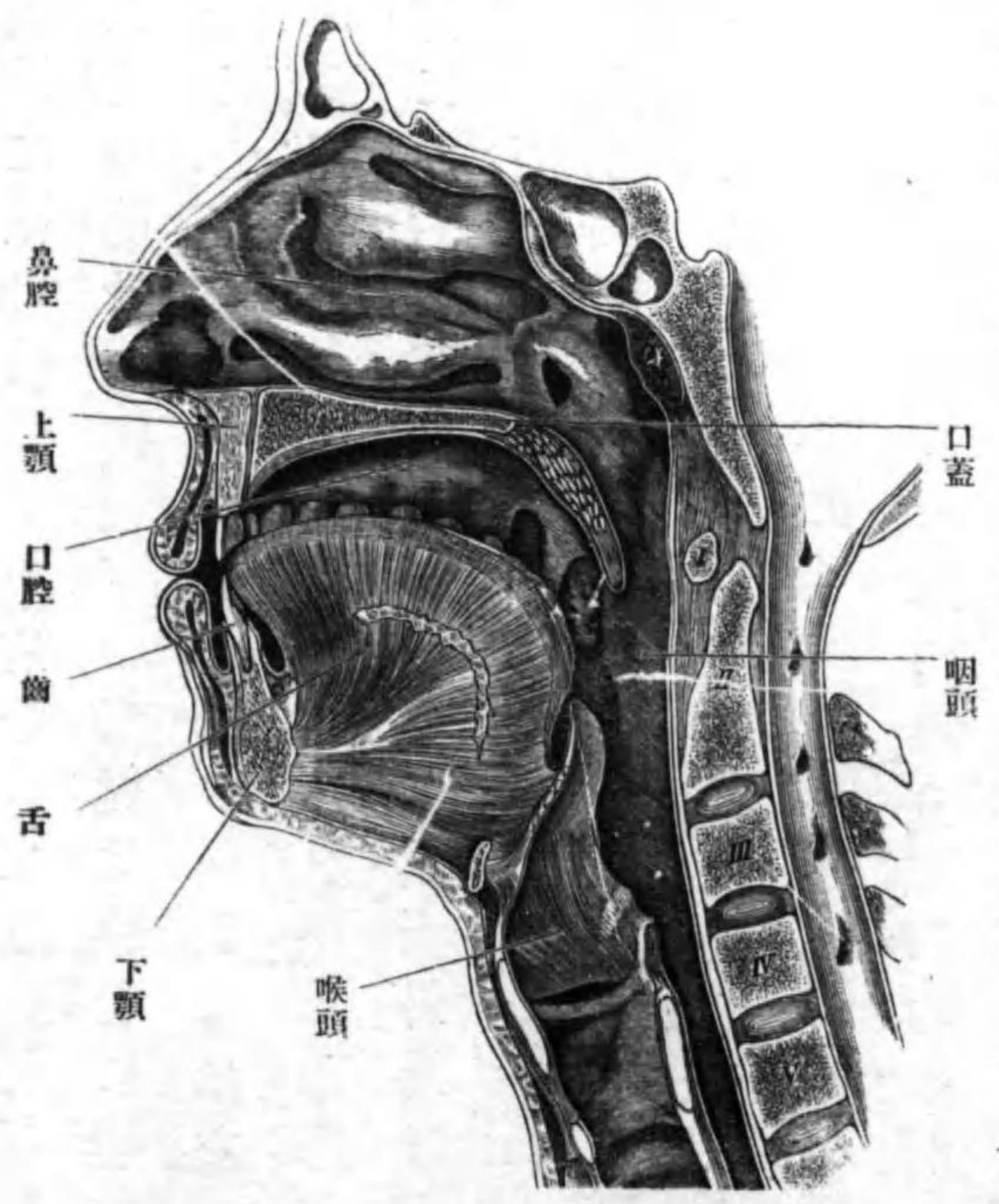


之に屬するものは頸、胸廓、腹及骨盤にして其後面の中央には脊柱(又は脊椎)ありて項部(項窩)より始まり尾骶部に至るまで多數の輪狀を爲せる短骨重疊連結して成る其内は一條の長き骨管をなして脊髓を容る此管は頭蓋腔に連り脊髓は腦髓に連る而して脊柱をなせる短骨は之を脊椎骨と名づけ最上部に在る七個を頸椎又は項椎と云ひ之に次ぐ十二個を胸椎又は背椎と云ひ次の五個を腰椎と云ふ之に次ぐものは薦骨及尾骶骨なり薦骨は元來五個の脊椎骨よりして一の骨と成りたるもの尾骶骨は四個の小なる脊椎骨の一個と成りたるものなり又之を尾閭骨とも云ふ各の脊椎骨には中央及兩側に突起あり其中央にありて著しく突隆せるものを棘狀突起と云ふ胸椎の左右には十二對の肋骨ありて其

前端には肋軟骨あり之を以て胸骨に連結し胸廓を作る十二對の肋骨の内最下の二對は胸骨に達することなく極めて短くして遊離す胸廓上部の前面には左右に鎖骨ありて胸骨と肩胛骨とを連結す肩胛骨は三角形にして胸廓後面の上部に左右各一個づゝ在りて其上外端は上肢と連る薦骨の兩側には各一個の髌骨或は無名骨あり薦骨の下端には尾骶骨ありて骨盤を構成す髌骨の兩側に髌臼と名くる陷凹せる部分ありて下肢との關節を成す頸部は前面を咽喉と云ひ咽喉は咽頭及喉頭に分たる咽頭は口腔、鼻腔及食道、喉頭に連る頸部の前面に於て突起を成せる部分には喉頭にして發聲器官の主要なる部分なり其下方は氣管にして氣管枝に連る呼吸のとき空氣の出入する路なり

氣管の後部には食道ありて胃に連る食道と咽喉との關係は
 圖に示したる如く食物は口よりして食道に入り吸入せる空

圖 四 第



圖す示を部上道食び及管氣

氣は鼻より咽喉を経て氣管に入り呼出せる空氣は之に反して氣管より咽喉を経て鼻に出づべし而して飲食に際しては口蓋の一部は喉頭の一部分は喉

頭の入口を塞ぎて食物の氣道に入るを防ぐ

頸部の後方を項部といひ其最上部の陥凹せる處を項窩と云ふ

頸部の兩側には大なる動脈、靜脈あり故に頸部の側方を強く

長時間壓迫する時は頭蓋腔に分佈する血液の不足なる爲に

腦髓の作用などに一時の變化を來すことあり甚たしき時は

永久の變化を起し或は死に至ることあり

胸廓の前面を胸部といひ後面を背部と云ふ胸部の中央には

胸骨あり其部分を胸骨部と名く其兩側に左右の乳房あり

男子に在りては甚小なるも女子に在りては成年なるに従

ひて膨隆し著しく突出す故に婦人にありては兩乳房の間の

凹なる部即ち胸骨部に相當するところを乳間溝と云ふ胸部

の下方肋骨の最下端を肋骨弓部或は季肋部と云ふ胸廓

の側面にして上膊の下に在る凹みたる部分を腋窩といひ其上部に當り上膊の附着部の圓く膨隆せる處を肩胛部と云ひ腋窩の下部を側胸部又は脇胸部と云ふ背部の中央には胸椎あり其上部の左右には各一個の扁平にして三角形をなせる肩胛骨あり

胸廓の内部は大なる腔をなす之を胸腔といひ其左右に肺臓を容る兩側の肺臓の間に夾まりて心臓あり肺臓は、氣管、喉頭と連り呼吸を營み之によりて血液の身體を養ひ終りたるものより不要なる成分を捨て必要なる成分を取るの作用をなす心臓は肺臓に於て新鮮にせられたる營養成分に富む處の血液を全身に輸送し全身を養ひたる後再び之を受て更に新鮮ならしむる爲に肺に送る處の作用を營む

食道は胸廓の後方脊柱の前にあり

腹部前面の上方にして胸骨部の下方に位し肋骨弓によりて三角形を成せる部を心窩部又は胃窩部と云ひ其兩側は季肋部なり臍の周圍を臍部と云ひ其下方を小腹部又は下腹部と云ひ小腹部の左右を鼠蹊部と云ふ

腹部の後面を腰部と云ひ其中央に腰椎あり側面を側腰部と云ふ

腹壁は主として皮膚及筋肉より成り其内部は腔を成し之を腹腔と名づく腹腔の上方は横隔膜を以て胸腔と界す肝臓は

横隔膜の直下に在りて腹腔の右上方にあり其左には恰も心窩部に相當する處に胃あり其左には脾臓あり胃の後下方

には脾臓あり腎臓は左右各一個ありて腰椎上部の兩側にあ

には脾臓あり腎臓は左右各一個ありて腰椎上部の兩側にあ

には脾臓あり腎臓は左右各一個ありて腰椎上部の兩側にあ

には脾臓あり腎臓は左右各一個ありて腰椎上部の兩側にあ

には脾臓あり腎臓は左右各一個ありて腰椎上部の兩側にあ

には脾臓あり腎臓は左右各一個ありて腰椎上部の兩側にあ

には脾臓あり腎臓は左右各一個ありて腰椎上部の兩側にあ

て血液中の不要なる成分を體外に排出する作用の一部分を
營む

肝臟、脾臟も亦食物の消化に必要な液を分泌す

腹腔の下方は骨盤腔に連り其内面及諸内臟は腹膜と云へる菲
薄なる膜を以て掩はる

骨盤及其内に在る内臟は産婆學を學ぶものには最大切なるも
のなれば後に至りて詳く之を説くべし

第二十二節 四肢

四肢は上肢、下肢の二つに分ち軀幹に連り共に多數の長骨及
短骨より成り之に數多の筋肉附着して自在に運動を營むこ
こを得るものなり

上肢は上膊、前膊及手の三部に分ち上膊は上膊骨を以て上
方は肩胛關節によりて肩胛骨に連り下方は肘關節により
て前膊に連る前膊は尺骨及橈骨の二より成り下方は手腕
關節(或は單に腕關節)によりて手に連る手は多くの小骨よ
り成り之を腕と指とに分つ腕の内面は手掌と云ひ外面は
手背と云ふ指は拇指、示指、中指、環指又は無名指及小指の
五より成る下肢は上腿(又は大腿)下腿及足の三部に分ち
上腿は上腿骨(又は大腿骨)を以て上方股關節(又は髌臼關節)
によりて骨盤に連り下方は膝關節によりて下腿に連る膝
關節の前面には移動し得べき栗實の如き形を成せる膝蓋骨
あり下腿は二個の長骨即ち腓骨及脛骨より成り下方は足
關節によりて足に連る膝關節の後面陷凹せる處を膝臑と

云ひ下腿の後側肥豊せる部分を腓(又は腓腸)と云ひ足關節の兩側の隆起せる部分を踝と云ふ足も亦手の如く數多の骨より成り之を足跗と足趾とに分つ足跗の上面は之を足背と云ひ下面を足蹠と云ひ其後部を踵と云ふ足趾は通常内側より外側に向ひ順次第一趾第二趾と稱す

第二十三節 全身器官の作用の大略

上に述べたる身體を構成する各部分は血液の分佈に依りて新鮮なる養分を受け之によりて各其作用を營み其爲に生じたる廢物は之を體外に棄つ其新しき養分は食物を消化して取たる成分並に呼吸によりて得たる空氣の成分なり故に食物及び空氣は蒸氣器械に於ける石炭の如きものなり

食物は齒によりて咀嚼せられて細かになり唾液と混じて咽頭食道を経て胃に入り再び胃液を受けて胃の作用にて消化して粥の如き物となり腸に送らる茲にて胆汁、膵液、腸液等を混じて猶充分に消化して全く乳汁の如き液となる之を乳糜と云ひ胃腸の壁に分佈する淋巴管に吸収せられて靜脈血中に混じて心臟に入り夫より全身に分佈して身體を養ふべき主要なる成分となる其消化せざる残りの部分は糞便となりて直腸を経て肛門より排出せらる

唾液、胃液、胆汁、膵液、腸液は皆之を消化液と云ひ各其作用を異にし食物中の種々なる成分を消化す

呼吸は空氣の鼻、喉頭、氣管を経て肺に入出入するを云ふ其出るを呼氣と云ひ其入るを吸氣と云ふ而して吸氣に由りて肺

に入りたる空気中の必要なる成分即ち酸素は血液を新鮮にし之を鮮紅色なる動脈血に變ず而して呼氣に由りて肺より出たる空気の内には靜脈血の内より出たる有害なる瓦斯即ち炭酸と水蒸氣とを混ぜ故に多人数密閉したる室内に長く止まる時は此有害なる瓦斯室内に充滿するを以て種々の不快を來す若し之に加ふるに火鉢に炭を多く熾す如きことあれば炭の熾るごき生ずる炭酸と共に其害一層甚しく時として死に至ることあり而して血液の循環は心臓の左室に在る鮮紅色の動脈血は心臓の收縮によりて射出せられて大動脈より漸次に小き動脈管に分岐して全身に分佈し其終りは多數の毛細管に分れて全身の諸器官を養ひ然る後又次第に小き靜脈管に合し終に大なる靜脈管に集まる又全身を

養ひたる血液の一部分は形を變じて透明なる淋巴液となり淋巴管よりして靜脈管にある靜脈血に合す其外胃腸の壁より吸收したる乳糜も淋巴管に依りて靜脈血に合す而して淋巴液と乳糜とを混じたる靜脈血は心臓の右室に入り更に肺動脈を経て肺臓に入りて漸次に分岐して無數の毛細管の内に入り吸氣に依りて必要なる成分を取り呼氣に依りて不要なる成分を體外に排出し新鮮なる動脈血となりて再び大なる血管即ち肺靜脈に集まりて心臓の左室に還り心臓の收縮に由りて大動脈に送らる

呼吸は心臓の收縮とは腦髓の支配するところにして健康體に於ては絶えず規則正しく行はれ睡眠せる間も止むことなし

心臓の收縮に因りて心臓に搏動を來す之を心動心悸又は心尖搏動と云ひ通常左乳房の少しく内下方に觸れ或は見るここを得るものなり而して此搏動は大なる動脈管にも傳はりて觸知することを得るものなり通常は橈骨動脈と稱する動脈の通過する處殊に手の屈曲する方面に於て腕關節上部の拇指側に於て容易く之を觸知することを得るものなり若し之を觸れ得ざる時は頸部腋窩鼠蹊部足關節内側の踝の傍ら等に於ても容易く之を觸知し得べし

血液中靜脈血となりて心臓に還るものと淋巴液として靜脈血に合するものゝ外猶變化を受けたる後に消化液となりて分泌せられ食物を消化する作用を有するものあり又尿と汗との如きも血液より變りて体内の不要成分を體外に排出する

作用を營むものなり汗は皮膚にある汗腺より分泌せられ尿は左右の腎臓に於て作られ輸尿管によりて膀胱に入り一定度まで溜溜したる後尿道より排出せらるゝものなり

神經の作用は既に述べたる如く腦髓より一部は直ちに、一部は脊髓を通りて全身に分佈して筋肉を動かし觸覺を主たり味嗅視聽の官能を營む故に全身の器官に於ける運動知覺の源は實に腦髓にあり

故に口、食道、胃、腸を消化器と云ひ、鼻、喉頭、氣管、肺を呼吸器と云ひ、心臓及血管を血行器又は循環器と云ひ、腎臓、輸尿管、膀胱、尿道を泌尿器といふ其他に生殖器と云ふものあり其作用は後に至りて述べし

第二十四節 婦人固有の體格

以上述ぶる處の諸部分は男女の間に差別なきも一般に女子は男子よりも體格嫩にして小なり女子の骨は男子よりも小さく細きを通常とす筋肉も亦男子の如く丈夫に發育せず隨て力量も亦弱し其他著しき差異は肩狭くしていからず胸腔狭く腹腔及腰は廣く全身の皮膚の下には多くの脂肪組織を有し軀幹及四肢は膨滿して圓く且軟かなり然れども其區別の著しき部分は骨盤及生殖器なりとす

第二十五節 婦人の骨盤

骨盤は軀幹の最下部にありて薦骨、尾骶骨及兩側の髖骨より

成る骨管にして婦人に在りては生殖器の要部を容れ之を保護するのみならず分娩につきては大なる關係あるものなり而して骨盤内に在る生殖器は卵巢、輸卵管、子宮、腔等なり若し骨盤の大小或は形狀に異常ある時は例令胎兒及陣痛に異常なきも分娩に妨を來すことあるものなり故に普通の大きな骨盤を有する婦人に於て始て平易なる分娩を營むことを得べし

第二十六節 薦骨

薦骨は殆ど三角形にして骨盤の後壁をなす其上端は廣くして第五腰椎に接して不動性の關節をなし其關節をなせる部分は強く前方に突出す之を薦骨岬と名く薦骨の下端は狭く尖

圖 八 第



圖の面内骨薦

りて尾骶骨に連り可動性の薦骨尾骶骨關節をなす薦骨の前面は平滑にして彎凹をなし後面は之に應じて凸隆し中央に五個の著しき棘状突起を其兩側に僅かに高き突起を見其兩側面には耳状を成せる粗縷なる面ありて髌骨の一部なる腸骨に接し薦腸關節なる不動性の關節を作る薦骨は小兒の時は五個に別れたる脊椎骨にして後に癒着して一個の骨となりたるものなり故に其前面に見る處の四條の低き横線と其兩端にある

耳状面

圖 九 第



圖の骨骶尾

第二十七節 尾骶骨

四對の孔は嘗て五個の骨より成たる殘痕なりとす此四對の孔は後面にも存し中央にある五個の棘状突起及兩側にある小突起も亦其成立を知るに足る痕跡なりとす

尾骶骨は又尾閭骨とも云ひ四個の小骨より成り其の形三角形をなし其尖端は下方に向ひ上端は薦骨の下端に關節して前方より壓すれば少しく後方に運動することを得るものにして分娩のとき胎兒の通過する時にも亦後方に壓排せらるゝものなり

第二十八節 髌骨

腕骨は無名骨とも云ひ骨盤の左右の側壁及前壁を成し後方に於ては薦骨の耳状面に接して薦腸關節を作り前方に於ては左右の腕骨互に相接して耻骨縫合を作る

此骨はもと腸骨、坐骨及耻骨なる三骨より成り後に癒着して一個の骨と成りたる者なり其三骨湊合せる處の外面に關節面ありて之を髌臼と云ひ上腿骨と腕骨との關節する處にして其關節を髌臼關節又は股關節と云ふ

腸骨は髌臼の上方に在り之を體と翼との二部に分つ體は下方にある厚き部分にして翼は上方に在る薄く平なる部分なり翼の上縁は一帶に隆起す之を腸骨櫛と云ふ其前端的突出せる處を前上棘と云ひ後端を後上棘と云ふ腸骨の内面に於て體と翼との境は彎曲せる一線をなす之を無名線又

第十圖



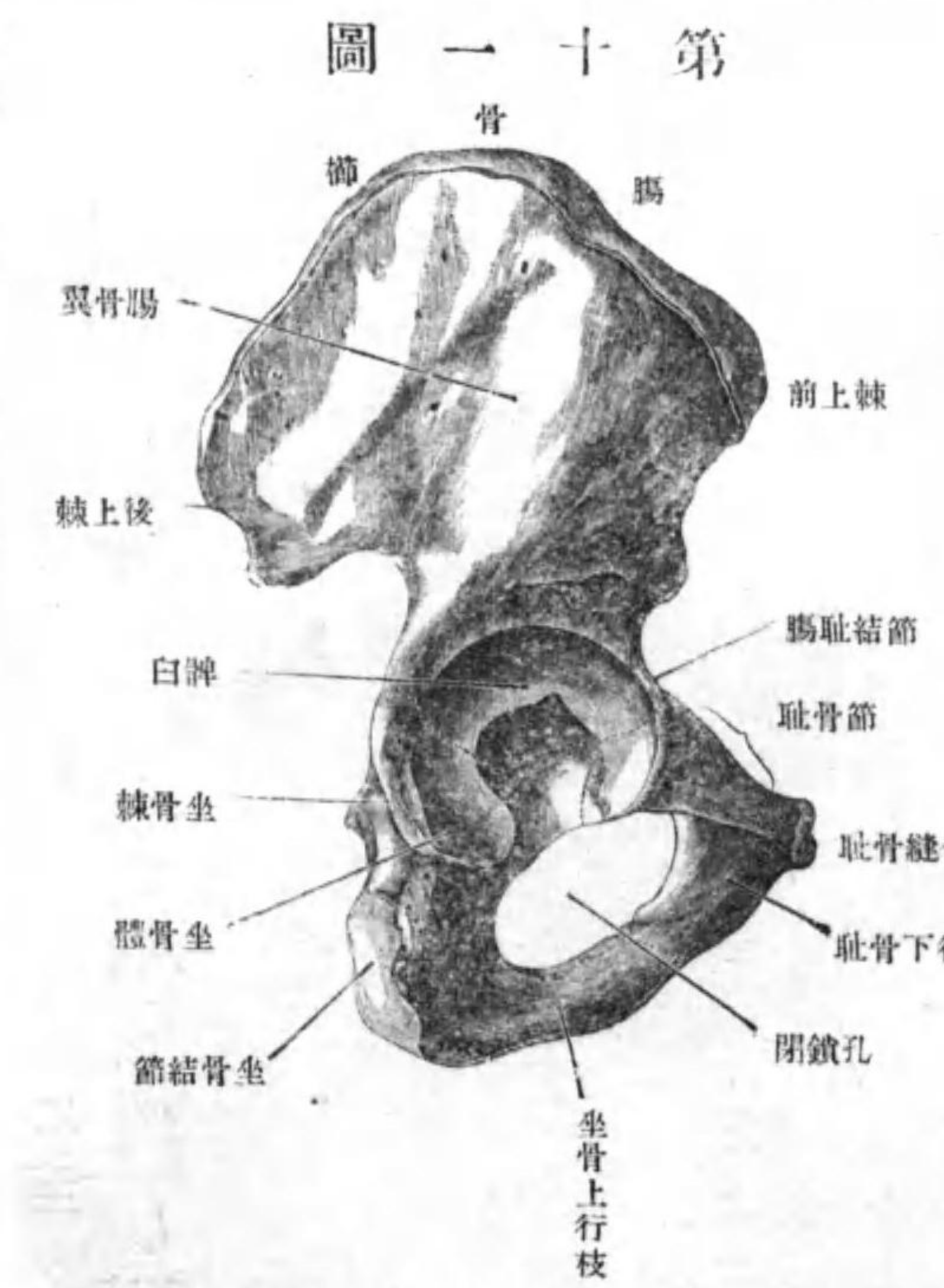
は弓状線と云ふ而して其後方に至りて終る處に粗糙なる耳状面ありて薦骨の耳状面に關節し薦腸關節を成す

坐骨は髌臼の下方に在りて體及び枝に分つ後方にあるを下行枝と云ひ前方にあるを上行枝と云ふ下行枝の後縁に突起あり之を坐骨棘と云ふ下行枝の下端骨質の厚き部分を坐骨結節

坐骨は髌臼の下方に在りて體及び枝に分つ後方にあるを下行枝と云ひ前方にあるを上行枝と云ふ下行枝の後縁に突起あり之を坐骨棘と云ふ下行枝の下端骨質の厚き部分を坐骨結節

ご云ふ上行枝は此部より上方に向ひ耻骨の下行枝に接す
耻骨は髌臼の前方にありて地平枝と下行枝とに分つ地平

髌骨を外より見たる圖



枝の上縁は鋭くして
耻骨櫛と名く其後方
は腸骨の無名線に連
る其腸骨と相接する
部分に極めて僅かな
る隆起あり之を腸耻
結節と云ふ左右耻骨
の地平枝は前方に於
て軟骨と靱帯とによ
りて互に接合し耻骨

第十圖

縫合を形成し骨盤の前壁を作る耻骨縫合より起りて下外方
に向ふものを下行枝と云ひ坐骨の上行枝と接す而して兩側
の耻骨下行枝相依りて所謂耻骨弓を作る其弓の上隅を耻
骨弓頂と云ふ
耻骨と坐骨との中間には閉鎖孔と名付くる橢圓形の孔あり
て腱様の膜を以て閉す

第二十九節 骨盤の關節

上に述ぶる如く薦骨尾骶骨髌骨は四個の關節即ち薦骨尾骶
骨關節と耻骨縫合と左右の薦腸關節とに依りて連結
せられ一の骨管を構成す
四個の關節の内薦骨尾骶骨關節は最も動き易くして分娩の時

には尾骶骨は後方に壓排せらるゝここを得るものなれども
兩側の薦腸關節は軟骨及靱帯にて固く連結せられ殆ど運動
せず耻骨縫合も亦軟骨と靱帯とに依りて關節をなし最も固
く連結せられ殆ど運動をなさず殊に初産婦にありて然りこ
す然れども經産婦殊に多産婦にありては極めて稀に其連結
の極めて僅かに弛み得ることあり其他坐骨棘と坐骨結節と
より出で、薦骨及尾骶骨の側縁に附着する靱帯あり之れを
坐骨薦骨靱帯と云ひ薦骨と髌骨との結合を鞏固になし且
薦骨及尾骶骨より成る骨盤後壁の缺けたる處を補ふ

第三十節 骨盤の區別

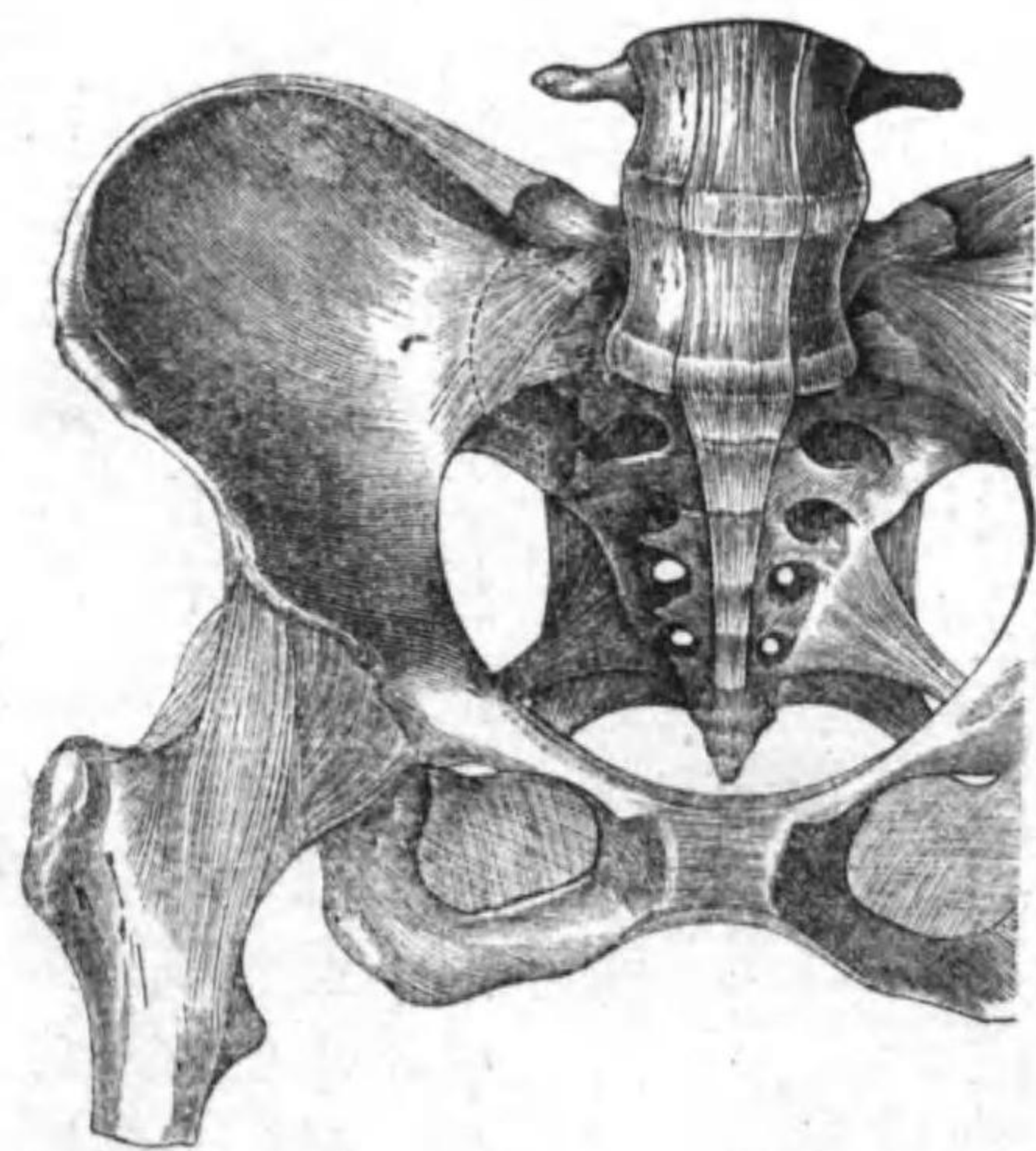
骨盤は上に述たる如く一の骨管にして之を構成する骨の形状

不正なる爲に其管の各部の廣狹は一樣ならず殊に其上半部
は廣けれども下半部は狭く且四面骨を以て包まる其上半部
を大骨盤と云ひ下半部を小骨盤と云ふ其境界は後方は薦骨
岬、兩側は無名線、前方は耻骨楯に依りて成れる一の輪を以て
す

第三十一節 大骨盤

大骨盤は其後壁は第四第五の腰椎、其側壁は腸骨翼、其前壁
は前腹壁の下部より成り其形漏斗状を成し上方は廣く下方
は狭し而して前腹壁は主として筋肉、脂肪組織、及皮膚より成
り柔軟なるが故に前方に擴張することを得るを以て妊娠の
後半期となれば子宮の膨大に伴ひて前方に膨隆す妊娠せざ

圖二十第



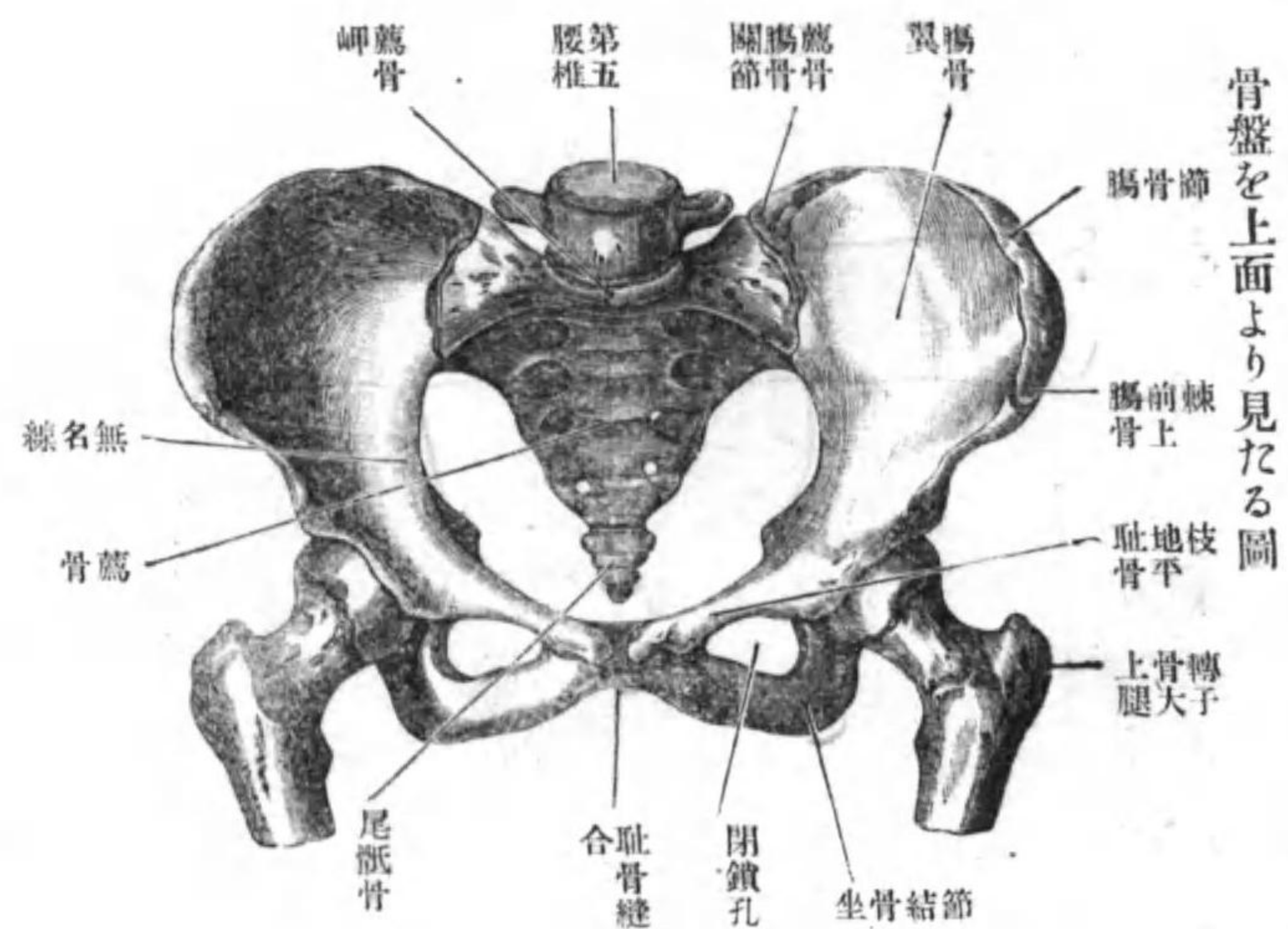
骨盤の圖 靱帯の附着せるまゝなり
名稱は次の第十三圖と引合すべし

る時は大骨盤は腸管によりて充たされば膨大せる子宮は小骨盤より大骨盤内に昇り猶漸次に膨大すれば下腹部を占め終に殆ど全く腹腔を充すが如き觀を呈するに至るものなり

大骨盤は分娩に就て大なる關係なしと雖も其廣狹は分娩に最大なる關係を有する

るここの小骨盤の廣狹を知るの標準となすここを得るものなれば之を測るの法を知る時は豫め小骨盤の大小を推知するここを得べし

圖三十第



骨盤を上面より見たる圖

即ち之を測るには先づ左右腸骨の前上棘の距離を左右腸骨櫛の最大距離を測るにあり其長き兩側腸骨前上棘の距離は我邦婦人に於ては凡二十三仙迷凡七寸五分兩側腸骨櫛の最大距離は凡二十六仙迷凡八寸五分にして之に依りて骨盤上口の横徑の大小を推知するここを得るものなりその他

圖 四 十 第



圖るた見りよ方下を盤骨

第三十二節 小骨盤

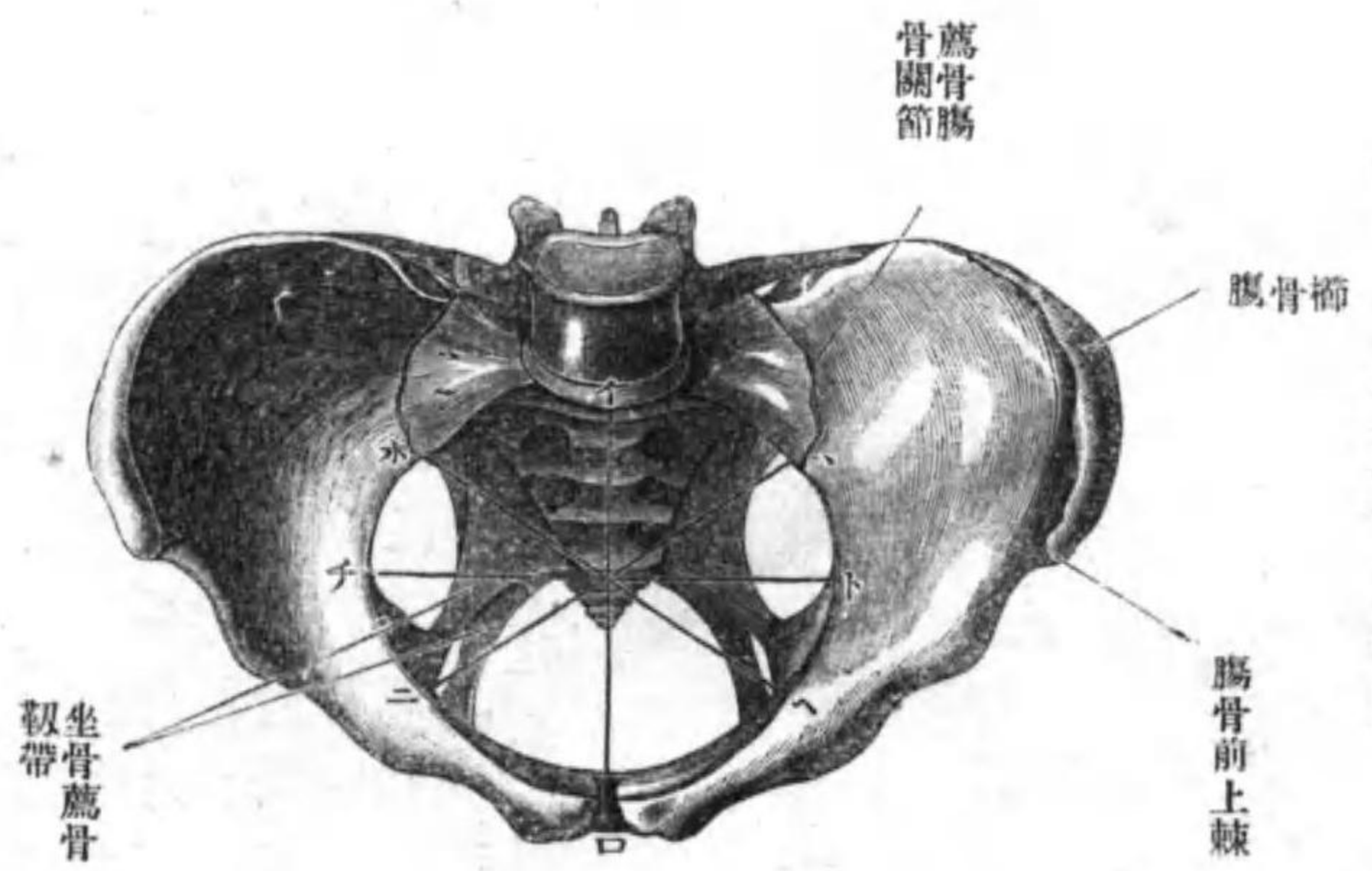
外結合線又は外直徑線と稱するものは第五腰椎の棘状突起の尖端より耻骨縫合の上縁に至る距離を云ひその長さ凡十九仙迷(凡六寸三分)なり此外結合線は骨盤上の直徑線の大小を知るの標準となるものなり猶ほ後節に至りて再び之れを述べ

小骨盤は分娩には大なる關係を有するものなり之より後單に骨盤と云ふときは小骨盤を指すこと知るべし其四壁は薦骨、尾骶骨、坐骨、耻骨、腸骨體及坐骨、薦骨、靱帶より成り互に固く結合し極めて僅に擴張し得べく其の廣狹形狀は上下均一ならず故に之れを骨盤上口、骨盤腔及び骨盤下口の三部に分

第三十三節 骨盤上口

骨盤上口は骨盤入口とも云ひ後方は薦骨岬、兩側は腸骨の無名線、前方は耻骨楯より圍まれ薦骨岬の處は前方に突出し耻骨縫合の處も亦少く尖る故に恰も葵の葉の如し此部分は大骨盤と小骨盤との境にして此部分の形狀と廣狹とによ

圖 五 十 第



骨盤上口の徑線を示す圖

- (イ) 薦骨岬
- (ロ) 耻骨結合
- (三及ハ) 腸耻結合
- (イロ) 縦徑又は直徑即ち眞結合線
- (ハニ) 左斜徑
- (ホハ) 右斜徑
- (トチ) 横徑

りて略小骨盤全部の
 廣狹形狀を推察し得
 べし
 之に四個の徑線を設け
 其大小を知るに便に
 す縦徑線、横徑線及
 左右の斜徑線是な
 り縦徑(又は直徑)は
 薦骨岬の中央より耻
 骨縫合の上縁に至る
 ものにて又之を眞結
 合線と云ふ其長さ凡

十一仙迷(凡三寸六分強)なり次に其横徑線は左右腸骨無名線の最大距離にして其長さ十二仙迷(凡四寸)なり斜徑線は右側の薦腸關節部より左側の耻骨腸骨の癒着點即ち腸耻結合に至るものを右斜徑線又は第一斜徑線と云ひ左側の薦腸關節部より右側の腸耻結合に至るものを左斜徑線又は第二斜徑線と云ひ其長さ共に十二仙迷(凡四寸)なり

第三十四節 骨盤腔

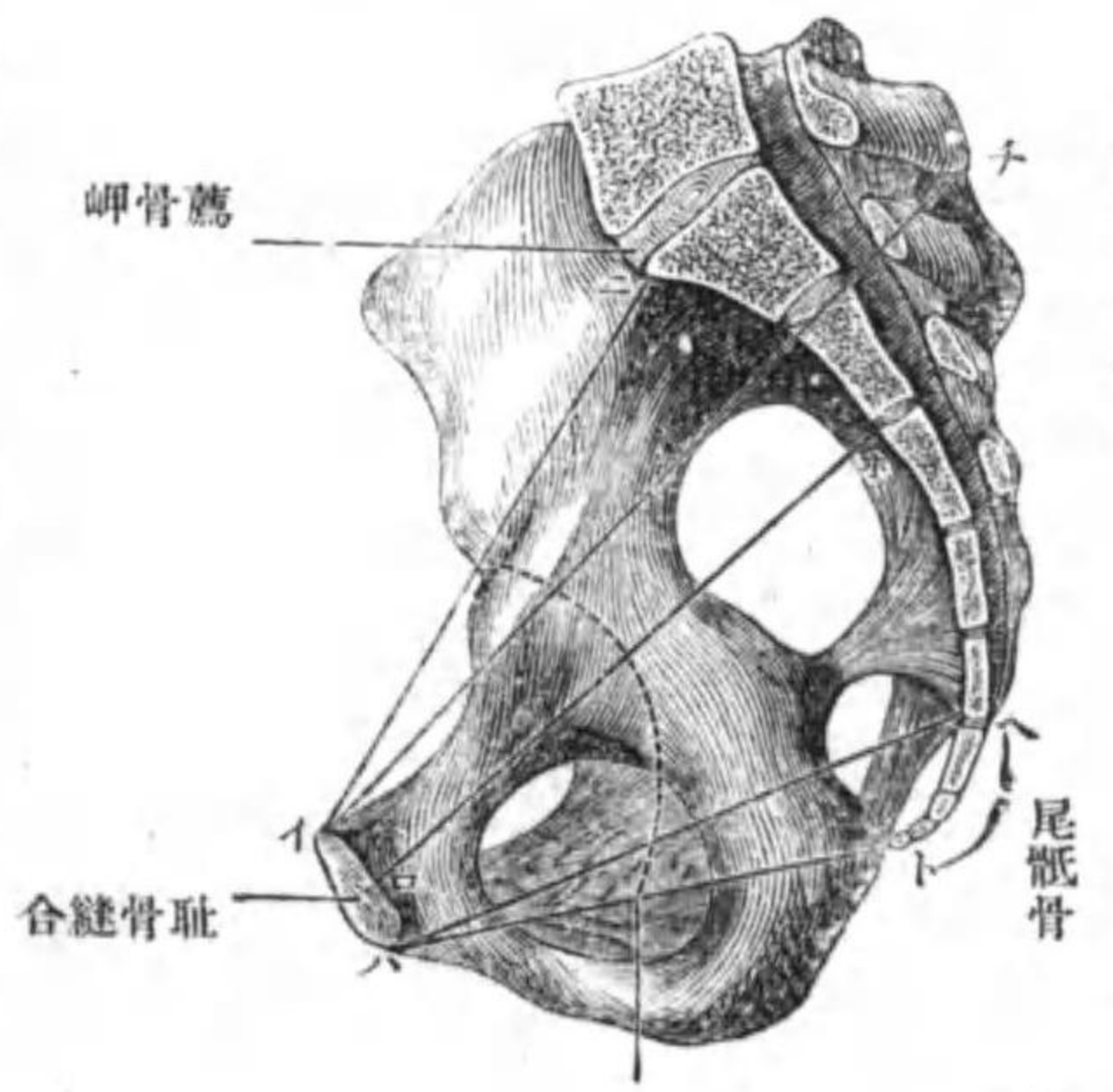
骨盤腔は骨盤上口と骨盤下口との間にある腔を云ひ其廣さは一様ならずして上部の廣き部分を骨盤潤と云ひ下部の狭き部分を骨盤峽と云ふ其廣狹を定むる爲に徑線を設け骨盤潤に於ては第二薦骨椎と第三薦骨椎との癒着部の中央より耻

骨縫合後面の中央に至るものを縦徑とす其長十一仙迷凡三寸六分強なり又左右

骨盤腔を横斷したる圖

分塊に際しては(ヘト)なる尾骶骨は後方に壓し退けらるゝなり

圖六十第



- (イニ) 骨盤上口の縦徑 即ち眞結合線
- (ロホ) 骨盤潤の縦徑
- (ハヘ) 骨盤峽の縦徑
- (ハト) 骨盤下口の縦徑
- (イチ) 骨盤外結合線

徑線よりも長きものなり骨盤峽に於ては其縦徑線は薦骨の尖端即ち薦骨尾骶骨關節の部分より耻骨縫合の下縁即ち

離を以て横徑となし其長十仙迷半凡三寸三分なり骨盤潤に於ては其斜徑線は其兩端軟部より成るが故に一定の測定數を得難きも常に縦横兩

耻骨弓頂の内側に至る者なり其長さ十一仙迷凡三寸六分強なり横徑線は兩側坐骨棘の距離にして其長さ十仙迷凡三寸三分なり斜徑線は骨盤潤に於けるが如くにして一定し難し此部分は骨盤管の中にて最も狭き部分なり

第三十五節 骨盤下口

骨盤下口又は骨盤出口は後方は尾骶骨の尖端兩側は坐骨關節前方は耻骨弓より圍繞せられ縦徑は尾骶骨の尖端より耻骨縫合の下縁即ち耻骨弓頂に至るものにして其長さ九仙迷(凡三寸)なれども分娩に際し尾骶骨が後方に壓し退けらるゝ時は二乃至三仙迷凡七分乃至一寸或は其以上も延長するこゝを得るものなり横徑は兩側の坐骨關節の距離にして其長

さ十一仙迷半(大凡三寸七分)なり斜徑は骨盤腔に於けると同
じく一定の長さを測定し難しとす

以上述ぶる處の小骨盤各部に於ける諸徑線の内骨盤上口に於
ては横徑線骨盤濶に於ては斜徑線骨盤峽に於ては縦徑線骨
盤下口に於ても亦縦徑線を以て各其最大なる徑線なりと
す但し骨盤下口の縦徑線は測定したるごころにては短きも
分娩に際し延長し得るを以て最大なる徑線となるなり

第三十六節 骨盤の壁

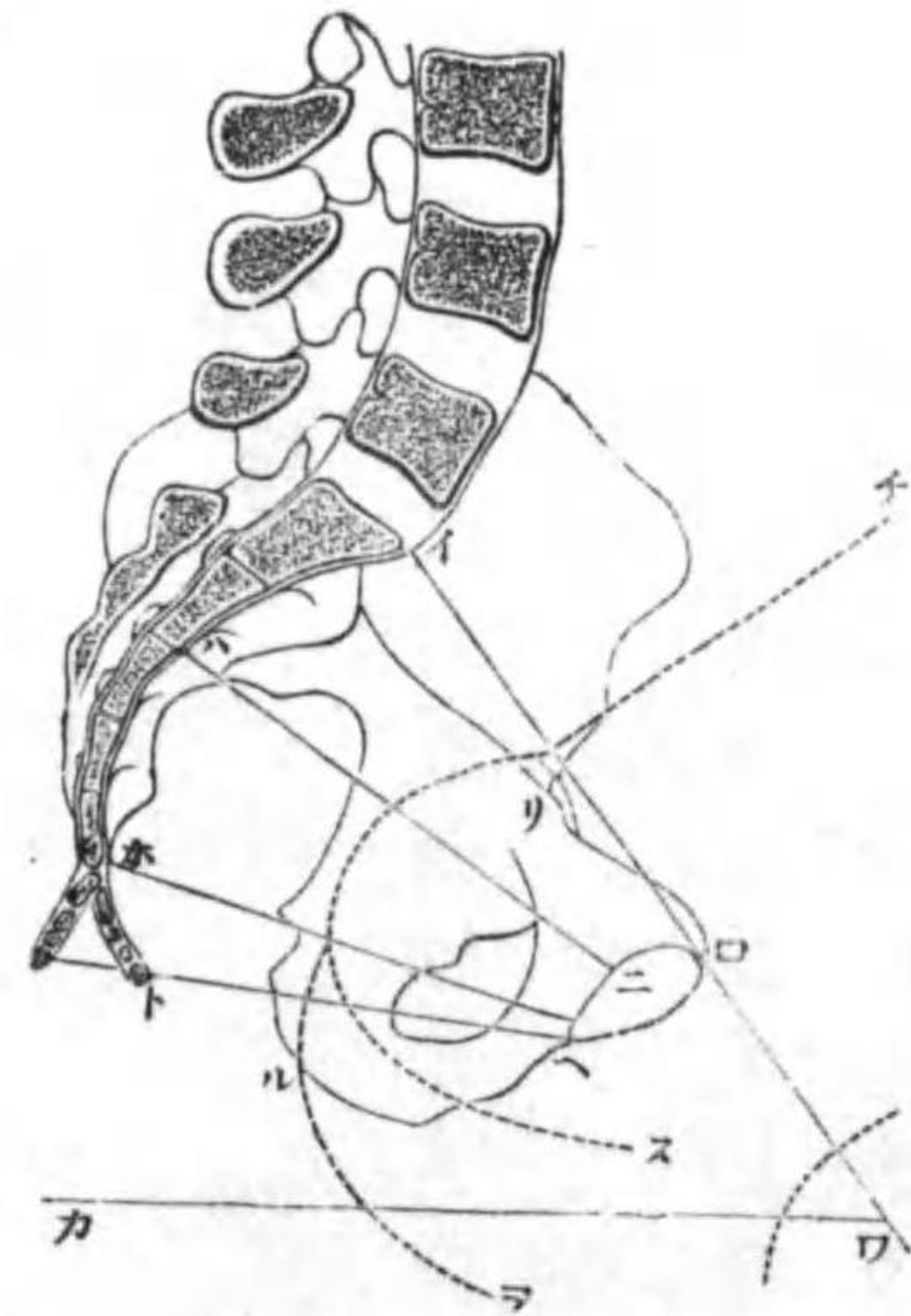
骨盤の四壁は前後左右其長さを異にす通常骨盤上口と骨
盤下口との距離を其高さと稱す即ち前壁の高さは即ち耻骨
縫合の高さにして最も短く僅かに三仙迷半(凡一寸二分)に過

ざるも兩側壁の高さは之に次ぐ即ち腸骨無名線より坐骨結
節に至るの距離にして約九仙迷半(大凡三寸二分)を有す後壁
の高さは薦骨岬より尾骶骨の尖端に至るまでを云ひ其の長
さ約十二仙迷半(大凡四寸一分)ありて四方の壁の中にて最も
長きものなり

第三十七節 骨盤の傾斜

骨盤腔の方向は身體長軸の方向と同一ならずして骨盤上口は
上方に向ふのみならずして強く前方に向ふ此傾きを骨盤傾
斜と名く而して身體直立の位置を取れる時骨盤上口と水平
面との間に生ずる角度を測り之を骨盤傾斜の角度と云ふ
此位置に於ては薦骨岬は耻骨縫合の上縁よりも高きこと約

第七十圖



- (イ) 薦骨岬
- (ロ) 耻骨縫合上縁
- (ハ) 第二第三薦骨癒着部
- (ニ) 耻骨縫合後面中央
- (ホ) 薦骨尾骶骨關節
- (ヘ) 耻骨縫合下縁
- (ト) 尾骶骨の尖端

- (イロ) 骨盤上口の縦徑
- (イワ) 其延長線
- (ハニ) 骨盤淵の縦徑
- (ホヘ) 骨盤峽の縦徑
- (チリ) 大骨盤の軸の方向
- (リヌ) 小骨盤の軸の方向を示す
- (リル) 尾骶骨の後方に壓排せられたる時の小骨盤の軸の方向を示す
- (ワカ) 水平線を示す
- (イワ) 及び(ワカ)の二線にて作られたる(イロカ)の角は骨盤上口の傾斜角度なり

九、五仙迷(大凡三寸一分)の處にあり

第三十八節 骨盤軸

骨盤上口の傾斜せると共に骨盤腔の軸も亦身體の長軸に一致

せずして彎曲す即ち骨盤上口の中央即ち眞結合線の中央より骨盤腔の中央を貫きて骨盤下口の中央を通過する處の線は骨盤の軸を示せるものにして曲線を成す之を骨盤軸又は骨盤の誘導線と云ふ此曲線は分娩に際し胎兒の通過する方向を示すものなり

第三十九節 骨盤内に在る器官

上に述べたる大小骨盤の内面は皆軟部を以て被はれ上方は腹腔に連り下方は肛門陰門及尿道口を以て外方に開くのみにて其他は皆軟部にて閉さる其主なるものは筋肉にして其孔隙をなす處は何れも筋肉及び強き筋膜を以て閉鎖す其内に生殖器と泌尿器と消化器の一部を包容す

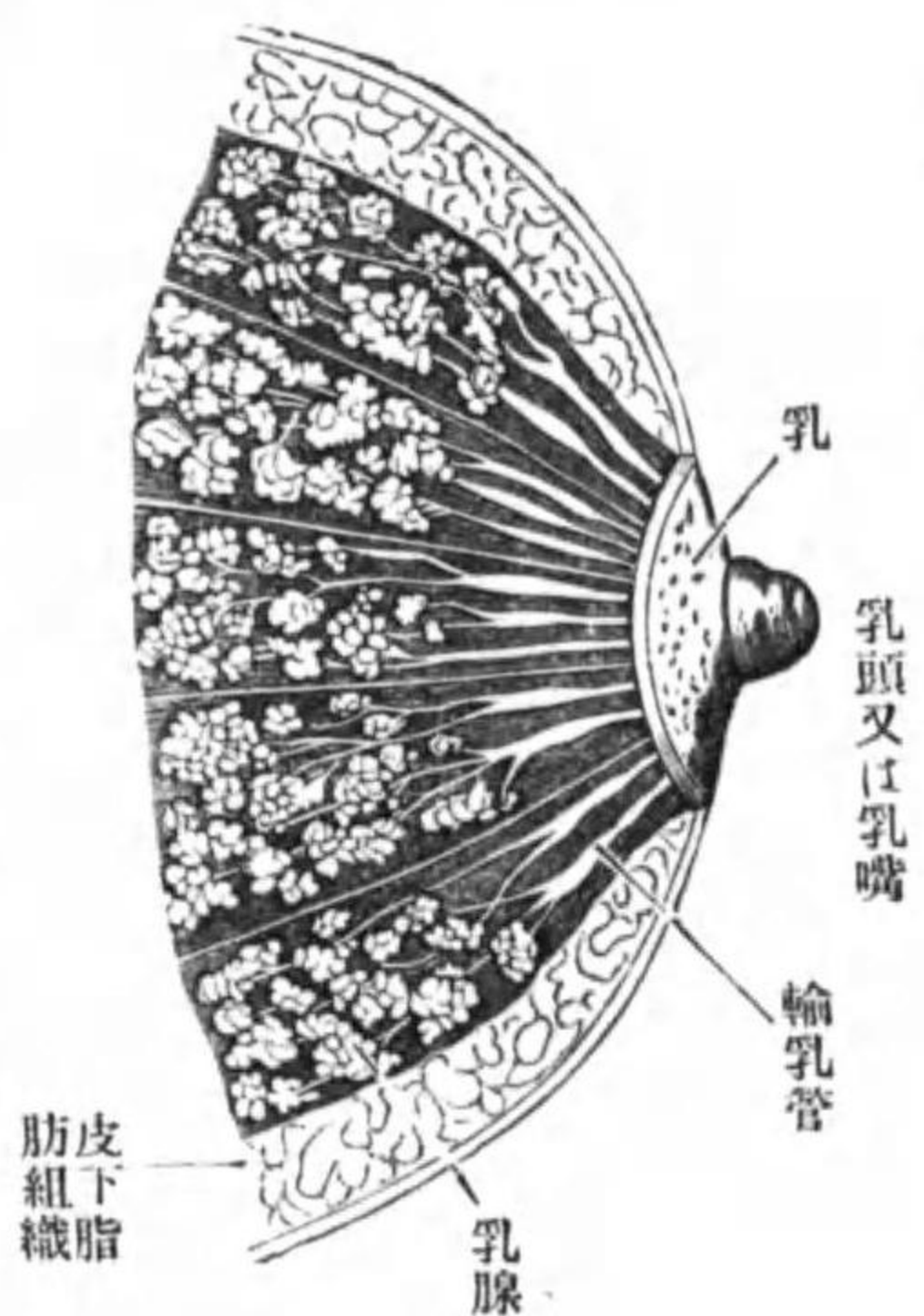
第四十節 婦人生殖器

生殖器は人類蕃殖の事を司る器宜にして婦人に於ては交接受胎妊娠分娩授乳等の作用を營むものなり其骨盤内にあるものを内生殖器と云ひ膣子宮輸卵管卵巢等之に屬する骨盤外にあるものは之を外生殖器と云ひ乳房と外陰部の二つに分つ

第四十一節 乳房

乳房は胸壁の前面にありて半球状を成し或は囊状をなして少しく懸垂せる左右一對の隆起なり小兒にありては隆起を呈するここのなきも破瓜期に近くに從ひて次第に發育し成人と

圖八十第



なりて充分發育して腕を伏せたるが如く膨隆するものなり既に數回の分娩をなして常に授乳せる婦人にありては乳房著しく懸垂するものあり兩乳房の間を乳間溝と云ひ恰も胸骨部に相當す乳房の中

中央突出せる部を乳頭又は乳嘴と云ひ其周圍は淡暗褐色又は暗褐色を呈す之を乳暈と云ふ乳頭には數多の小孔ありて乳汁を分泌す此部は神經に富み感覺銳敏にして之に觸れば勃起し感覺過敏なる妊婦に於ては甚だしき刺戟を加ふれば妊娠の中絶を來し分娩を催すここのあり

欠

乳房の内には腺質ありて乳腺と云ふ此乳腺の内にて造られたる乳汁は輸乳管に集り輸乳管は互に相合して終に乳頭に於ける小孔より分泌す

乳房は妊娠中に於て次第に能く發育し其經過中に於て既に乳汁を分泌し分娩後一層著しく其分泌を増し小兒の營養に必要なる間は之を分泌すれども十箇月乃至十五六箇月の後には分泌止み乳房の状態も殆ど平時に復す然れども乳房の弛緩甚だしき時は懸垂するに至る

第四十二節 外陰部

外陰部は骨盤下口の前側にありて陰阜、大陰脣、會陰、小陰脣、挺孔、尿道口及處女膜を有する腔腔より成る

欠

るここあり其形小にして薄く且軟かにして濕潤す其前端は内外二葉の小皺襞に分れ一は外方にありて挺孔の包皮を作り一は内方に在りて挺孔繫帯を作る

(五) 挺孔又は陰核と云ふ小陰唇の前端二葉に分れたるその皺襞の間にある圓形の小さい隆起にして多くの血管と神経とを有し之に觸れば勃起す

(六) 尿道口は挺孔の下方大凡一仙迷半(四五分)の處に在りて環状の隆起せる縁を有する裂孔となりて存す

(七) 腔孔は尿道口の後方にありて處女に在りては多くは輪状にして小孔を有する薄き粘膜の皺襞即ち處女膜を以て閉鎖するも交接によりて此膜は數個の裂片となるを通例とす然るも亦他の原因にて破るくここあり或は全く始より缺るここ

あり

第四十三節 内生殖器

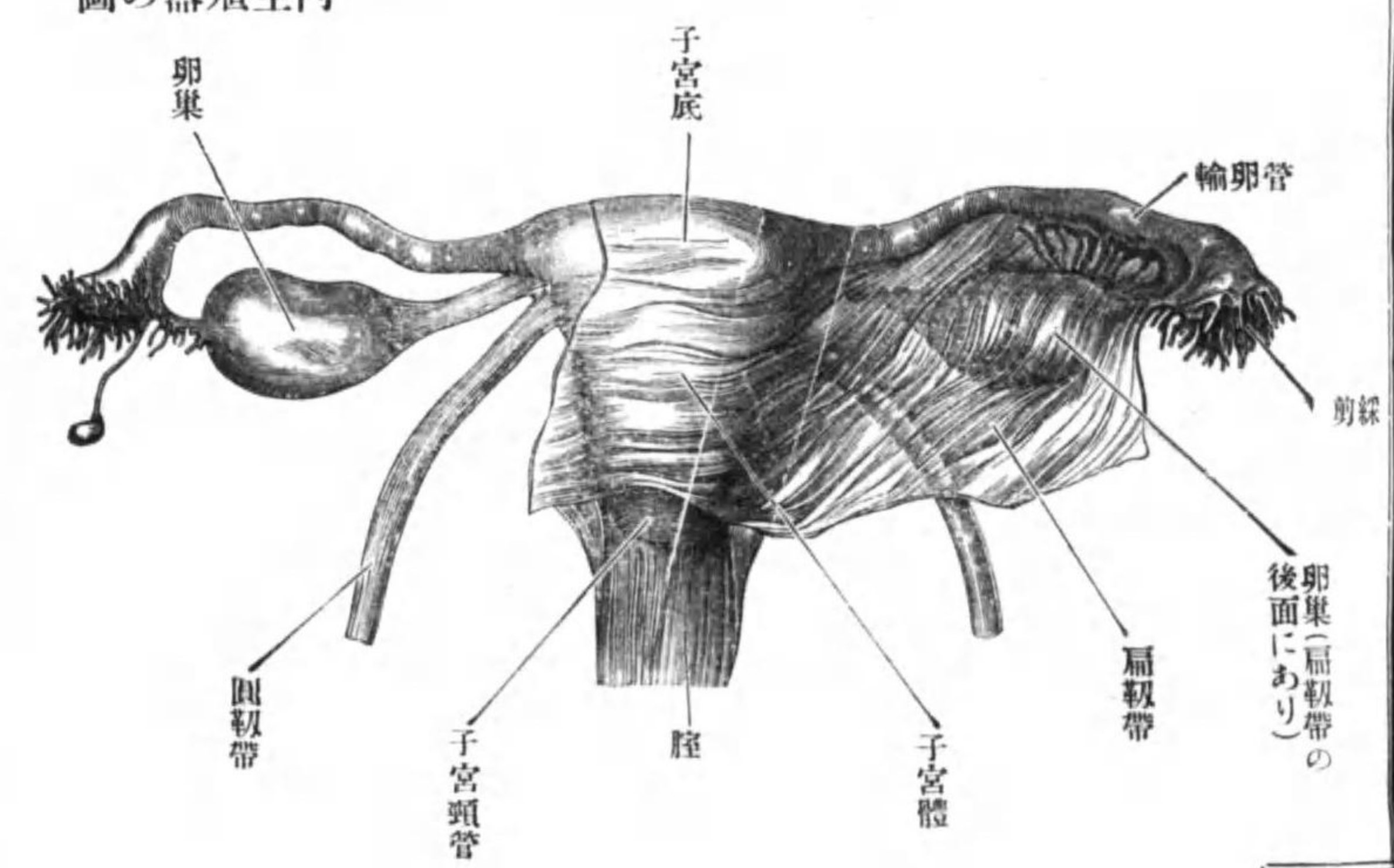
内生殖器とは前に述べたる如く骨盤内に存在する生殖器を云ふ。即ち腔、子宮、輸卵管、卵巢はなり。其他骨盤内には輸尿管の一部と膀胱尿道の如き泌尿器と直腸とを容る。

第四十四節 腔

腔(又は膈)は腔口より骨盤軸の方向に従ひて前方に彎曲し尿道と直腸との間を上行し子宮に連り管状をなし粘膜を以て被はる其長さ大凡九仙迷(大凡三寸)にして腔口に近き處は最も狭く上方に至るに従ひて廣し其最も廣き部分即ち最上方

第十二圖

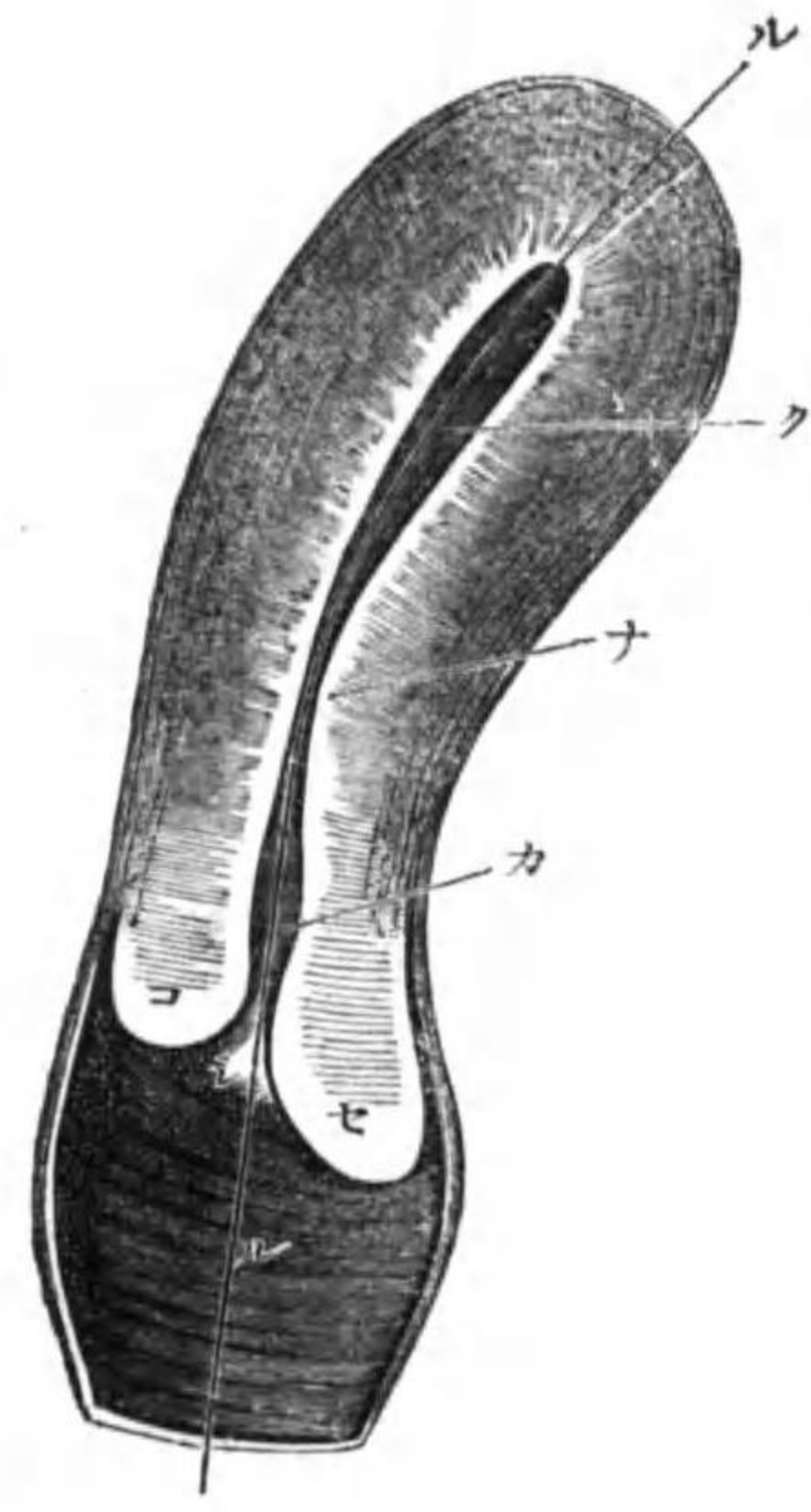
内生殖器の圖



にある部分を腔穹窿と云ひ此部分の中央に子宮の下端即ち子宮腔部と稱ふる部分突出す之によりて前後左右の腔穹窿を區別す而して腔の内面を被ふ處の粘膜は處女にありては無数の横に走る皺襞ありて甚だ擴張し易く或は收縮し易き性質を有し其前壁と後壁とは互に密接するを通常とするも經産の婦人にありては皺襞

33
264

圖二十二第



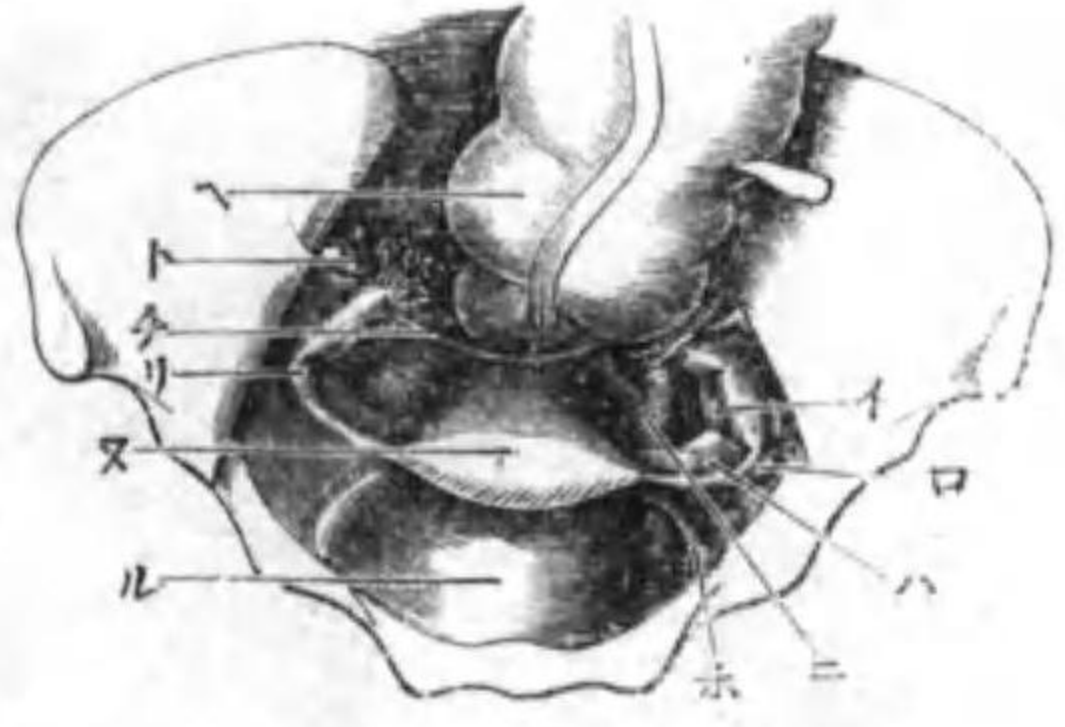
(セ)子宮口前唇
(コ)子宮口後唇
(シ)子宮外口
(カ)子宮頸管

(ナ)子宮内口
(ク)子宮體腔
(ル)子宮の軸の方向を示す

にして前後は少しく扁平なれども後面の方は少しく凸隆す
 長さは大凡八仙迷(一寸六分)幅は上部に於て廣くして大凡五
 仙迷(一寸六分)なり此部を子宮底と云ふ下部は幅狭し此部を
 子宮頸と云ふ頸と底との間は即ち子宮體なり子宮體の内
 には子宮腔あり頸の内
 には頸管ありて相連る
 子宮腔は上方に於て兩
 側は輸卵管腔に連る經
 産の婦人に於ては子宮
 は少しく大にして圓み
 を帶るを常とす而して
 子宮底と子宮體との外

圖一十二第

に共と盤骨を器殖生内
 圖るた見りよ方上

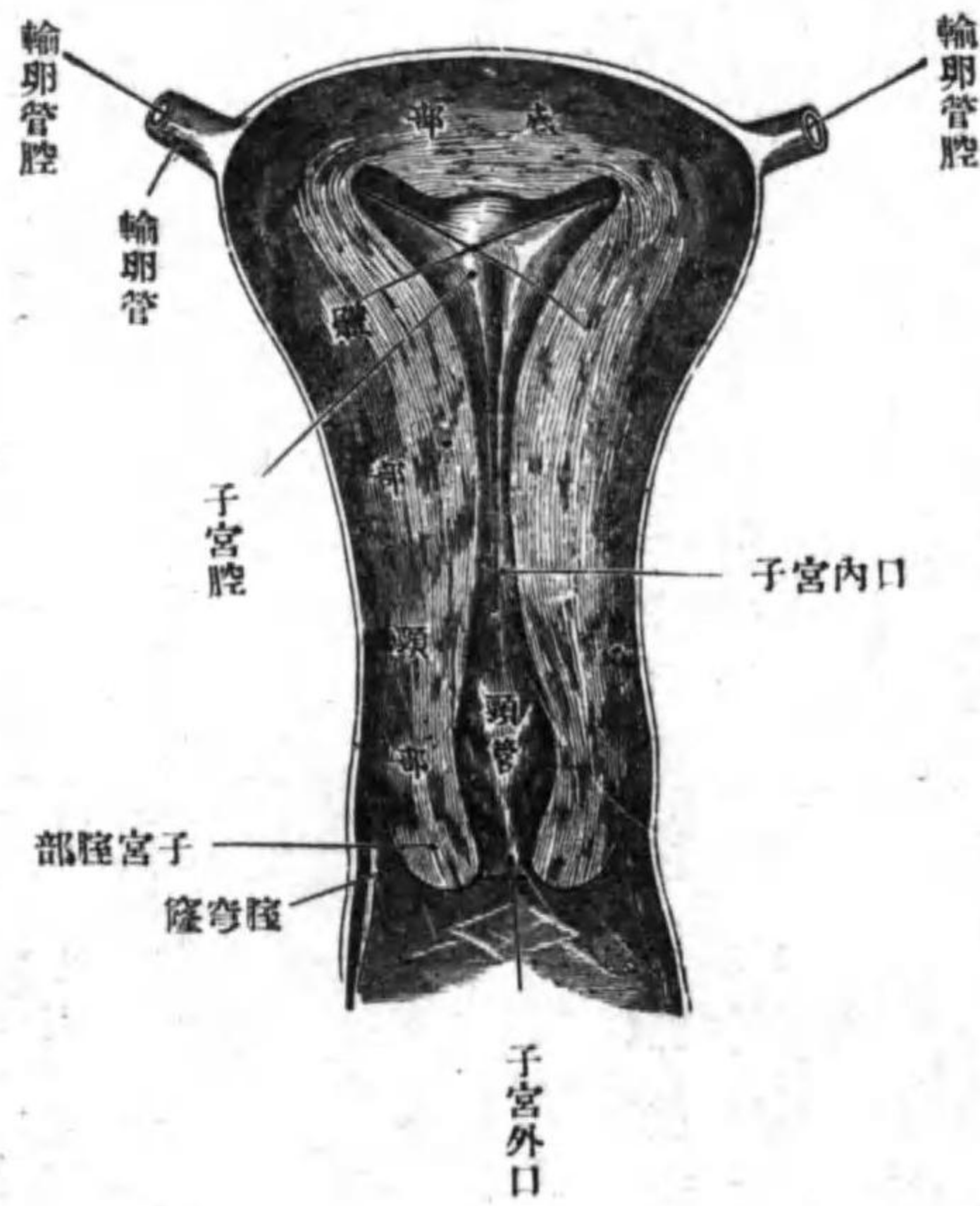


(イ)卵巢
(ロ)輸卵管
(ハ)卵巢靱帯
(ニ)扁靱帯
(ホ)圓靱帯
(ヘ)直腸
(ト)膀胱
(チ)扁靱帯の後縁
(ヌ)子宮底
(ル)膀胱

子宮は生殖器中分娩に關し最必要なる器官にして小骨盤の中
 央に位し骨盤軸の中に
 在りて前方には膀胱後
 方には直腸あり下方は
 腔穹窿に連り上部は腸
 管を載せ側方は輸卵管
 に連る
 子宮の形は茶笥の如く
 弛緩し消失して平滑となるなり
 腔の前方には膀胱の一部及尿道あり其後方には直腸あり

第四十五節 子宮

圖三十二第



子宮の断面を前方より見たる圖

小孔あり之を子宮外口又は單に子宮口と云ふ外口の前の
 方層の如き部分を前層と云ひ後方を後層と云ふ前層は通常
 後層より長く且厚し子宮外口よりして子宮頸管に連なり頸
 管よりして子宮腔に連

其頸管より子宮腔に連
 なる部分は甚だしく狭
 窄す之を子宮内口と云
 ふ經産の婦人に在りて
 は腔部は概ね凸凹不正
 にして多少の肥大あり
 前後兩層及其互に相接
 する左右の連合部に於

面は腹膜を以て被はれ恰も折れ返りて二枚となりたる
 薄き膜の間に挟まる其子宮前面を被ふものは更に膀胱
 を被ひて前腹壁に移り後面を被ふものは直腸の前面に移り
 て之を被ふ其腹膜の折れ返りたるものく兩側の部分にて子
 宮を被はざる部分は扁韌帶又は廣韌帶と稱し子宮の位置
 を保つ作用をなし各側の骨盤壁を被ひ側腹壁内面の腹膜に
 連る又圓韌帶は兩側にありて子宮と輸卵管と相接する部分
 より出でく前外方に走り腹壁を通過して陰阜に終る處の圓
 索狀體にして筋肉を有し亦子宮の位置を保つ作用あり
 子宮頸の下部は殆ど椎實の如く腔穹窿に突出す此部分を子宮
 腔部と云ひ前後に少しく扁平にして滑澤なり處女に於ては
 其游離せる端の中央に殆ど圓形又は少しく横裂をなせる一

ては分娩に基くところの大小種々の癍痕を生じ随ひて外口の形も不正となり或は時として外口の少しく哆開せることあり

子宮腔は子宮體の内在り扁平にして三角形を成し三角形の基底は子宮底に向ひ尖端は子宮内口の部に在り基底の兩角に各一の小孔ありて兩側の輸卵管腔に連なる之を輸卵管口と云ふ子宮腔の下方は子宮内口の部に於て頸管に連る

子宮腔及頸管の内面は粘膜を以て被はれ前後の壁互に相接するものなり而して月經時には子宮腔の粘膜腫脹し充血して血液を腔内に滲出し頸管及腔を経て體外に流出するものなり

子宮の前面には膀胱ありて子宮頸管部に於て互に密着すこれ

によりて子宮の位置を保持するこを助く其他子宮頸管部の後方より薦骨の方に走る索狀體ありて子宮薦骨靱帯と云ひ子宮を保持するの用をなす

第四十六節 輸卵管

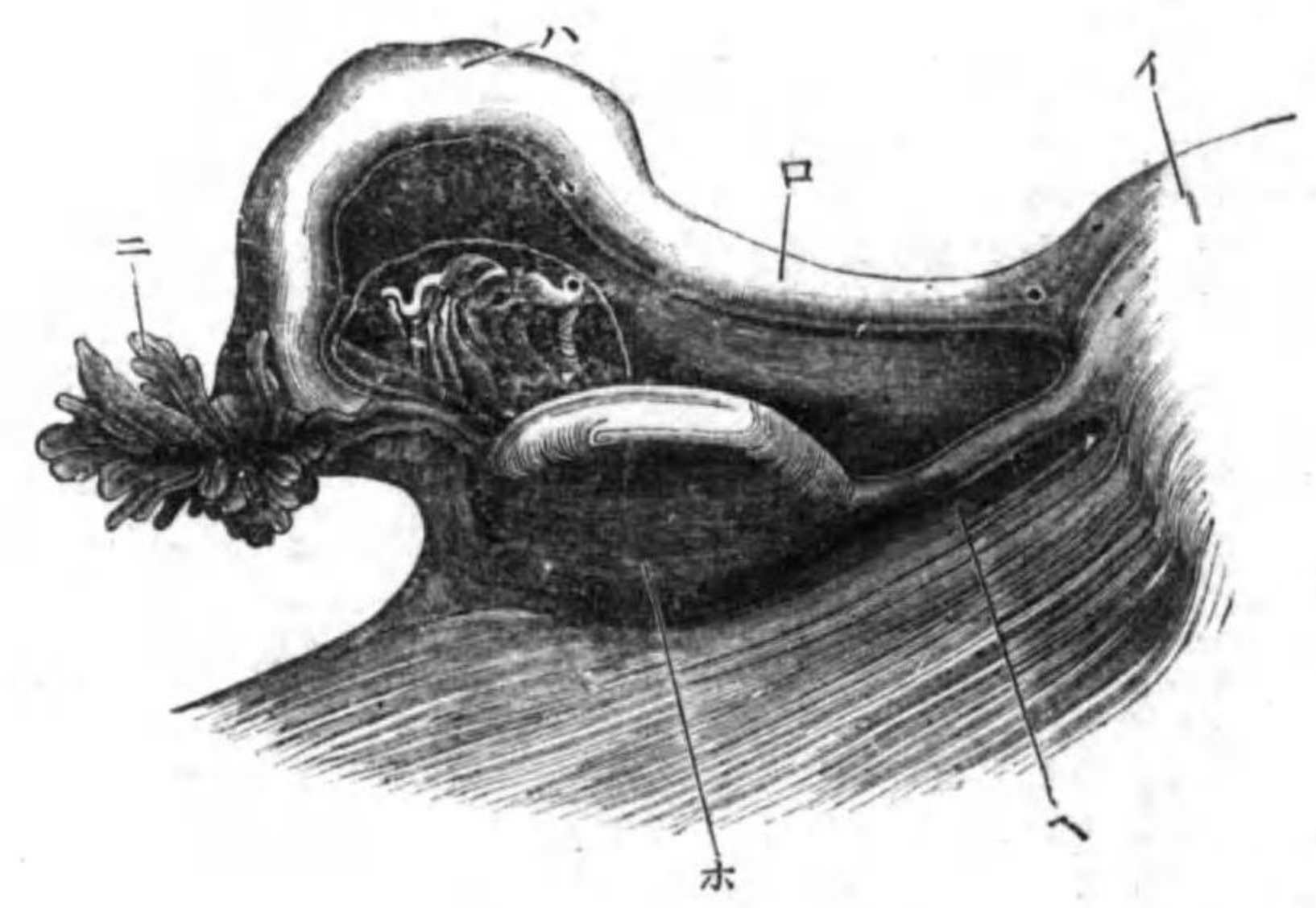
輸卵管は又喇叭管とも云ふ左右一對の細き膜狀の管にして子宮底の兩側より扁靱帶の上縁に沿ふて僅に彎曲して外方に走るものなり其長さ大凡九仙迷乃至十仙迷(三寸許)にして太さ五密迷一分六厘許なり其内端は細くして子宮腔に連る此部を峽部と云ふ外端は少しく太くして腹腔内に游離し總の如し之を剪綵と云ふ峽部と剪綵との間は最も太し此部を罐狀部と云ふ

輸卵管の内面は粘膜を以て被はれ卵巢より排出せる卵子を剪
 糸によりて捕獲して子宮腔の方に送るの作用をなす男子の
 精糸は子宮より此管に入り來りて生殖作用を営むものなり

第四十七節 卵巢

卵巢は左右各一個あり扁平長圓にして大さ殆んど桃の實の如
 く子宮の兩側輸卵管の後下方にありて扁靱帶の後葉の上に
 在り其内には多數の小胞ありて其大さ一様ならず大なるは
 豌豆大を超へ小なるは肉眼にて殆ど見るべからざるものあ
 り其胞内に各一個の卵子を容れ(極めて稀には二個の卵子
 を有するこもあり)其他尙蛋白様の液を容る此小胞は破瓜期
 より後には代る代る次第に發育して増大し増大するに従ひ

第二十四圖



左側輸卵管及び卵巢を示す圖
 (扁靱帶の後面より見る)

- (イ) 子宮底
- (ロ) 輸卵管峽部
- (ハ) 輸卵管蟻狀部
- (ニ) 卵巢
- (ホ) 卵巢靱帶

て其壁益菲薄となり遂
 に破裂して卵子は腹腔
 内に排出せらる之を排
 卵の機能と云ふ其排出
 せられたる卵は極めて
 小にして辛じて肉眼に
 て見得る位にして輸卵
 管の剪糸によりて受ら
 るる時は更に輸卵管を
 經て子宮腔に送らる卵
 子若し排卵の後子宮腔
 に送らるゝまでの間に

於て男子の精絲に會合すれば發育を遂げ人體となり得べきも然ざる時は卵子は生活を失ひて排出せらるゝものなり

第四十八節 排卵機能と月經

排卵と云へる機能は生殖器の成熟に達する時期即ち破瓜期より始まり生殖器の作用全く衰ふる時期即ち經歇期に至りて終り月經と終始を共にするを常とす其現象は卵巢の内において成熟に達したる小胞猶増大して終に其菲薄なる部分に於て破綻し卵子は腹腔内に排出せらるゝこと前に述たるが如し而して排卵は約四週毎に一回あるを通常とし其時期は概ね月經時に伴ふものなり但し妊娠中及び産褥中は排卵せざるを常とす

欠

欠

第四十九節 膀胱及尿道

膀胱は耻骨の後方に位する囊状の器官にして兩側の腎臓に
よりて造られ輸尿管に依りて送られたる尿を溜溜するの用
をなす其空虚なる時は小骨盤内にあるも充滿したる時は小
腹部に出づ其内面は粘膜を以て被はれ後面の各部に左右各
一個の小孔ありて輸尿管之に開く其輸尿管孔の中央の下
方漏斗の如く狭小となり尿道に移る此部分を膀胱頸と云
ふ
膀胱は粘膜の外に筋肉組織を有し尿を排出する作用を營む又
膀胱頸には其部を括約する筋肉ありて膀胱に尿の溜りたる
時にも漫りに流出することなからしむ

尿道は細き筆軸の如き太さを有する管にして膀胱に連り耻骨縫合の後方、腔前壁の前方を通り少しく彎曲して耻骨弓頂に至り尿道口に開口す

第五十節 直腸

直腸は腸管の末端にして子宮及腔の後方にありて骨盤後壁に沿ふて左側薦腸關節の前を通り夫より漸次薦骨穹窿の中央に移りて尾骶骨の尖端の前方に口を開く是を肛門と云ふ肛門の周囲には括約筋を司る筋肉ありて肛門括約筋と云ふ肛門の周囲は甚だ血管に富む
總て尿道及直腸は腔子宮等の如く前方に向て彎曲するが故に若し「カテーテル」或は灌腸器を挿入する時には必ず先づ器械

を後方に向け然る後之を前方に轉じ恰も骨盤軸の方向に並行せしむることを要す

第三章 消毒清潔法

第五十一節 消毒清潔法の必要

産褥熱と云へる病、分娩の後に起るごとありて、重きものは殆ど治療の望なく、爲に生命を失ふに至るもの多く、輕きものは幸に生命を失はざるも、種々の疾病を來し、爲に終生の苦痛を殘すもの亦甚だ多し。西洋諸國に於て、其調査をなせるものを見るに、百人の産婦中に、凡一人は此病に罹りて死亡する割合にして、年々流行病の主なるものに罹りて、生命を失ふ人の數よりも、産褥熱の爲に生命を失ふもの數は多しと云ふ。我邦にては、未だ充分の調査をなすことを得ざるが故に、精密なることを知り難きも、西洋諸國よりも割合に多くの婦人産褥熱の

爲に貴き生命を失ひ、居るに相違なし。假に西洋諸國の割合に同じとすれば、一箇年に一萬五六千人の産褥熱に罹りて死亡するものある割合なり。我邦にても、近頃學問日々に進み、此等の不幸を防ぐの道も追々々々、廣く行はれ、醫師、産婆、其業を執るにも、皆之に注意するの傾を有するに至れること、洵に喜ぶべきことなれども、道理を理解することも之を實行することも、困難にして、猶産褥熱に罹るものを見ること、多きは實に嘆ずべきなり。

産褥熱を起すの原因となるものは、細菌と稱ふるものにて、顕微鏡の力をからざれば、吾人の眼にては見ることを得ざる生物なり。吾人の常に見るものにて、之に等しきものを求むれば、黴にして、黴には赤色、綠色、灰色、黄色など、種々の異なる色

を呈するものあるも何れも皆無数の細菌の繁殖して生じた
る状態に外ならず即ち産褥熱は人間の身體に徴を生じたる
が如きものにしてこれによりて作られたる毒物が身體の中
に循環する爲に起るものご考ふることを得べし而して此身
體に徴を生ぜしむる細菌は如何にして人身體に侵入するか
ご云ふに身體の皮膚粘膜等何れも平常の状態にては之を防
ぐの作用を有すれども若し心附かざる程或は見得ざる
程の些細なる病氣に因れる變化或は創傷などある時
は其部分より侵入して體内にて僅かなる時間に盛に
増殖し毒物を作り爲に身體に危害を與ふるものなり
此細菌は其種類甚だ多く其性質も亦千差萬別にして其内人
身體に危害を與ふるもの亦甚だ尠からず而して此等の恐

るべき細菌は殆ど到る處に存するものなれば吾人の
手の如きは常に斯かる危険なるものに接するものな
り殊に膿、傳染病患者の衣服、身體及其分泌し又は排泄したる
もの等は多くの細菌を有するものご知るべし
吾人が切創又は挫創などを受けたる時屢其創の化膿すること
あるは或種の細菌の作用なり然れども手指其他の部分にて
も僅かなる化膿なれば生命に危険を及ぼすこと甚だ少きも
産褥に於ては膈子宮、外陰部等には新しき創面甚だ多く且細
菌の發育に甚だ都合よき關係あれば其危険の來ることも亦
甚だ大にして且速なり
之を防ぐには消毒、清潔の法、防腐法を嚴守して妊娠、分娩、
産褥等の經過を處置するの他なしとす

今産婆學を講ずるに當り妊娠、分娩、産褥等の事を述ぶるに先ちて此方法を説き斯道に従事する人に據るべき處を知らしめんこそす而して産婆に必要な消毒清潔法は

- (一) 手指の消毒清潔法
 - (二) 婦人生殖器の消毒清潔法
 - (三) 器械の消毒法
 - (四) 繻帶材料の消毒法
 - (五) 衣類寝具の消毒清潔法
- 等なりこそす

第五十二節 手指の消毒清潔法

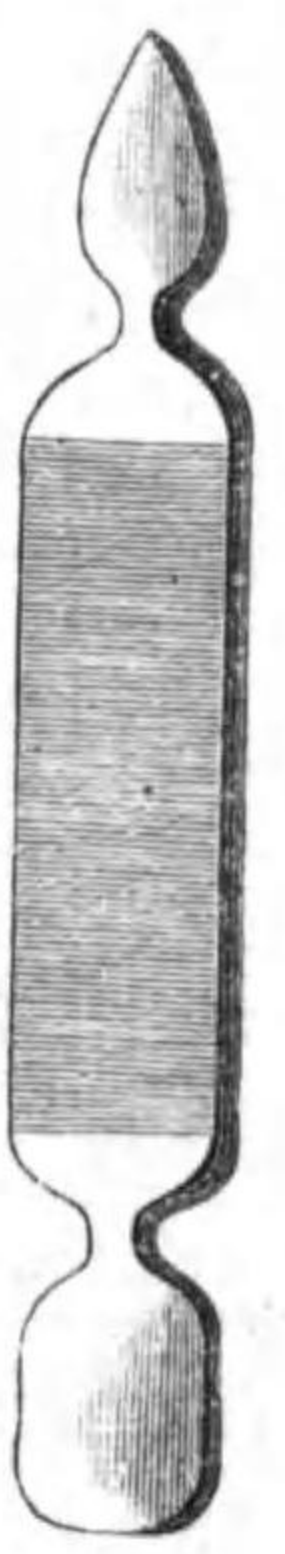
産婆に必要な消毒清潔法の内にて最も注意を要するもの

なり是れ人の手指は他の金屬又は木を以て製したる器械の如く強き消毒薬又は高き熱度を加ふること能はざれば消毒の法を行ふにも自然に不充分を免れ難し故に細心注意して過なからんことを期すべし

手指の消毒法を行ふに大切なるは常に成るべく不潔物に觸れざるることなり即ち種々の傳染病殊に實扶帝里丹毒、窒扶斯等の患者に接したる時如何なる病氣にて死したるものにては死體の時を経たるもの殊に其内臓などに觸れたる時膿を有する部分に觸れたる時腐敗したるもの如何なる品物にては暫時に觸れたる時其他何にても不潔なるものに觸れたる時は暫時分娩、産褥の介抱或は妊婦の診察をなすべからず殊に産褥熱の患者を取り扱ひたる時には一定時を経ざれば

看護又は診察に従事すべからず其時間は少なくとも四十八時間を超ゆるを宜しとす而して斯る場合には其間に全身浴をなし清潔なる衣服を着替へ且後に記す如き方法に依りて屢手指の消毒を行ひたる後にあらざれば職務に就くべからず

爪鑷の圖



手指の消毒法と稱すれども通常は前膊と手を消毒するものなれば手術衣を着し肘關節より下を露出すべし而して先づ爪を短く剪り爪床の間にある目に見ゆる垢其他不潔なるものを清潔なる小楊枝又は爪鑷を用ゐて取り去るべし之れ爪床の間には不潔物入り易きが故なり

第二十六圖

爪の掃除終らば大凡攝氏五十度の温度を有する湯にて石鹼と刷毛とを用ゐ前膊及手を丁寧に洗ふべし湯は絶えず流出するものを宜しとすれども何處にても得易からざるものなれば手洗鉢に汲みたるものにて可なり五十度の温度と云へば殆ど手を浸して漸く堪へ得る位の温度なり石鹼は軟石鹼(加里石鹼)又は綠石鹼と稱ふるものを最良とすれども通常の手洗石鹼にてもよろし刷毛は齒磨楊枝の如き細は宜しからず相當の大きさを有し毛の成るべく耗きを宜しとす毛は植物性のものを宜しとすれども豚毛の如きものを用ゐるも可なり我邦にて製したる刷毛にては竹を十分細く裂きて其少しく太き纖維條を去りたるもの又は棕櫚にて製したるものを宜しとす常に之を用ゐたる後には煮沸消毒し

て貯ふるを宜しとす或は用に臨みて煮沸消毒するも可なり
 石鹼と温湯を用ゐて洗ふには爪床指間等を注意して殊に丁寧
 に刷去すべし其時間は少くとも五分時間なるべし然る後
 猶刷毛を用ゐて石鹼を洗ひ落したる後三十倍の温き石炭
 酸水又は百倍のリゾール水の内にて少くとも三分時間新
 しき清潔なる刷毛を用ゐて丁寧に石鹼を以て洗ひたる時の
 如く洗ふべし
 猶消毒の効を十分ならしめんが爲には石鹼と刷毛とを用ゐて
 洗ひたる後四十度以上の酒精を用ゐるフラネル又は木綿の布
 片にて丁寧に手指を拭ひ然る後石炭酸水又はリゾール水を
 用ゐるべし
 斯の如く注意して丁寧に洗ひたる手は清潔にして内診を行ひ

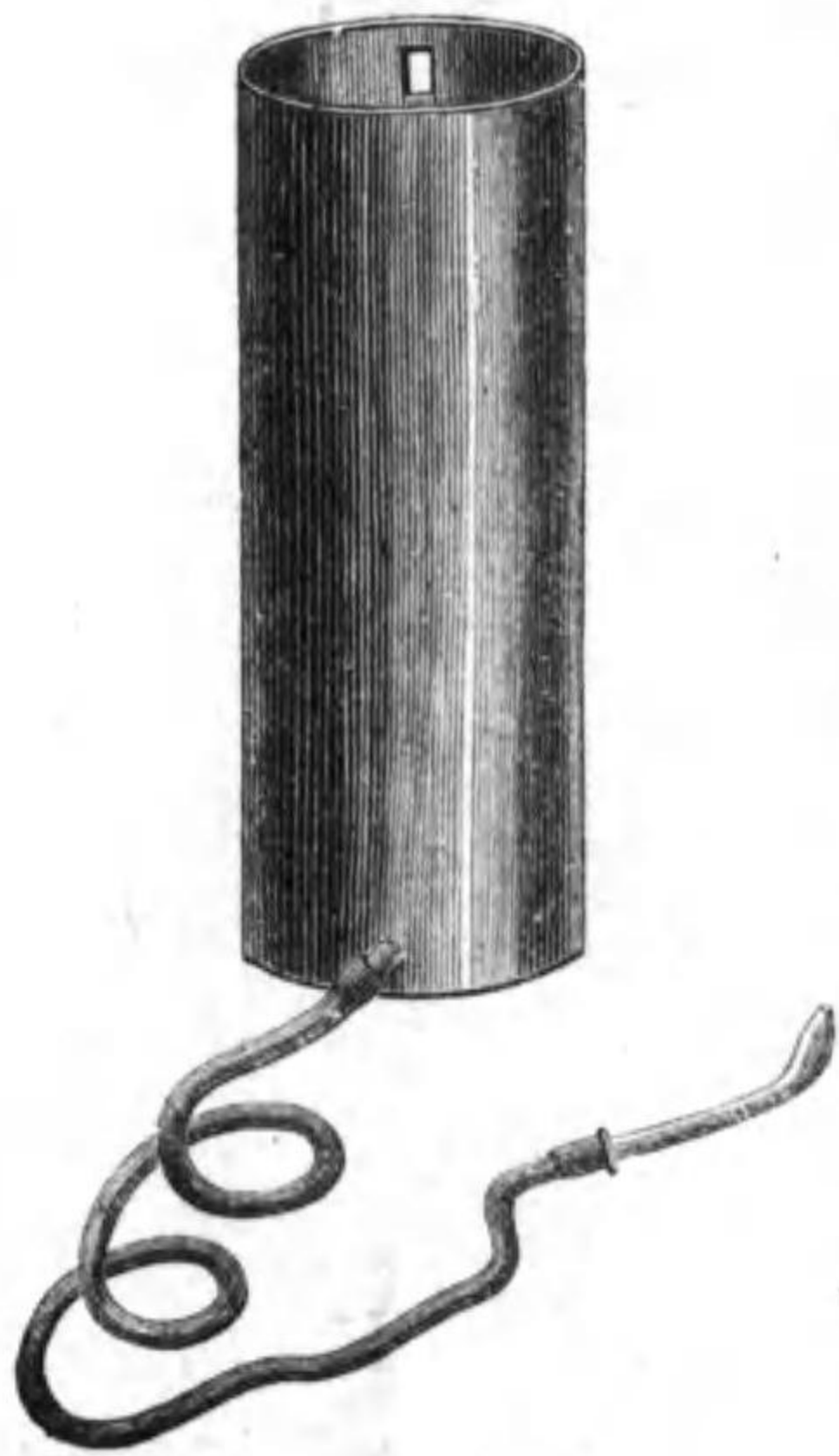
或は創面などに觸るゝも危険を來すことなきものなり然れ
 ども若し消毒の爲に費したる時間は規定の通りにて其洗
 ひ方不充なる時は効なき故に残る限なく丁寧に洗ひ決し
 て表面のみを飾るが如き所爲あるべからず又清潔にしたる
 手にて他の消毒を行はざるものに觸るゝ時は其觸れたる部
 分には不潔なるもの附着せずとは確に云ひ難き故に再び消
 毒法を行はざるべからず斯ることを屢するは面倒にして時
 を費すことも亦多き故に消毒をなしたる手指は之を用ゐる
 前に汚さぐる様に注意すべし且消毒したる儘暫く診察又は
 手當する迄に時間あらは絶えず消毒薬液を以て手を潤し
 乾かさざる様注意すべし

第五十三節 妊婦、産婦、褥婦の生殖器の

消毒清潔法

妊婦、産婦の内診を行ふ時或は分娩の時或は産褥の経過の内に生殖器を消毒する必要があることあり
通常の場合には外陰部のみなり外陰部を消毒し清潔にする

第七十二圖



洗水器即ちルートの器

る時には手指に於けるが如くにす然れども外陰部の皮膚は菲弱にして感覺鋭敏なれば刷毛を用うる事を得ず

宜しく消毒したる綿紗の如き軟き布片又は綿を用うるを宜しくす而して温湯及石炭酸水は洗水器(イリガートル)を用ゐて灌ぎ臀部には受器を置くを便なりとす又酒精も外陰部の消毒には麻酔を用ゐたる如き場合の外用ゐ難し之れ外陰部に強き灼痛を感じる故なり
分娩中などには一度消毒をなすも屢汚染する虞あれば毎一二時に一回づつ消毒法を行ふべし殊に大小便の通利ありたるときは必ず外陰部を清潔にすべし
妊娠中に生殖器に疾病ある爲に洗滌を要し殊に分娩に臨みて消毒清潔法を要するときは醫師の指圖に従ひて之を行ふべし

第五十四節 器械の消毒法

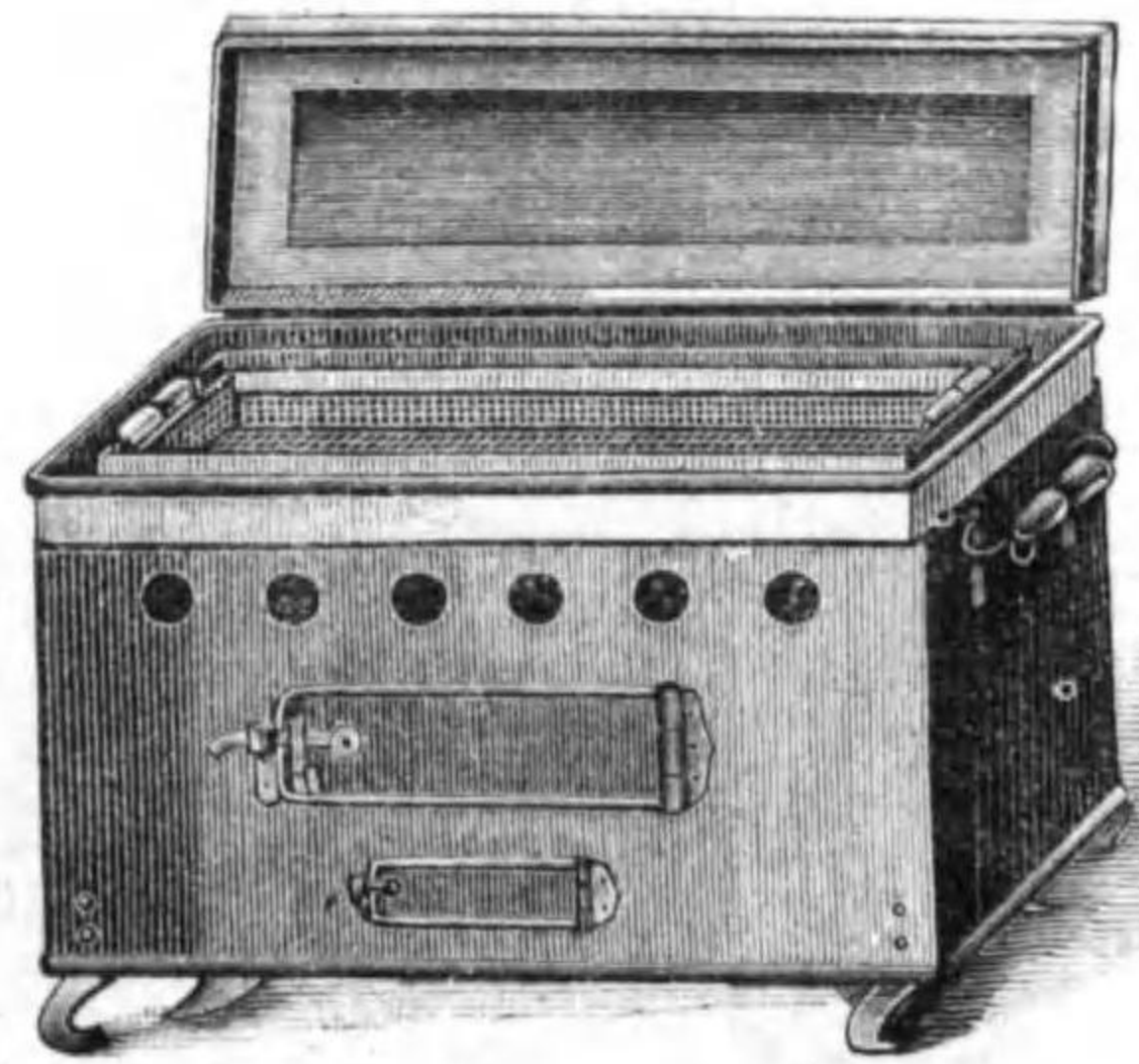
器械は硝子製又は金屬製のものを消毒するには煮沸するを最
 簡便なりとす通常煮沸するには圖に示したるが如き一定の
 器を以てするを便なりとすれども若し用意なき時は鍋釜或
 はその他湯沸等の如きもの中にて煮沸するここを得べ
 し若し金屬にて作られたるカテーターの如きものを煮沸せ
 んとするとききは鐵葉製の長方形の箱(假令ば淺草海苔の鐵葉
 製容器の如し)又は茶筒の如きものを應用するも亦可なりこ
 れは通常百倍の炭酸曹達の溶液にて煮沸するものなれども
 常水にても差支なし只炭酸曹達を用ゐるときは消毒の効の
 十分なるに鐵製の器械には鏽を生ずるの恐少きものなり又

煮沸消毒に要する時間は沸騰し始めて後五分以上を經れ
 ば安全なりとす而して其器械は直に使用するか或は使用に
 至る迄猶時を經べき時は三% 石炭酸水又は一% リゾール水
 中に浸すを宜しとす

即ち産婆其使用せんとする嘴管、カテーター、臍帶剪刀、臍
 帶結紮絲、爪刷毛、爪鑷等は煮沸消毒をなしたる後に之
 を用うべし

又子ラトン式ゴム製カテーターは能く煮沸に堪ゆ、浣水器
 (即ちイルリガートル)に用うるゴム管も煮沸するをよろし
 とす、浣水器も亦煮沸し得べきときは煮沸するを宜しとす
 然らざる時は器中に水又は熱湯を盛りて煮沸するか或は全
 く煮沸し得ざる時は三十倍石炭酸水又は百倍リゾール水を

器械煮沸消毒装置の圖



用ゐて丁寧に殊に其内部を洗ふべし

煮沸消毒し得ざる器械は先づ石鹼と刷毛を用ゐて丁寧に洗ひたる後二十倍の石炭酸水又は五十倍のリゾール水を用ゐて丁寧に拭ひ且其中に浸すを宜しとす産褥熱又は其疑ある患者に用ゐたる器械又は其他の原因にて不潔なは回復して消毒すべし若し充分に消毒をなし難きものあらば焼却するを宜しとす總て器械

第二十八圖

は用ゐるに先ちて消毒し用ゐる終りて更に消毒し之を丁寧に拭ひて格納するを宜しとす産婆若し醫師の使用する器械の煮沸消毒を託せられたる時は前述の法に従ひて之を行ふべし若し煮沸に堪へずと考ふるものある時は一應之を醫師に質したる後其差圖に従ひて消毒法を行ふべし

第五十五節 繃帶材料の消毒法

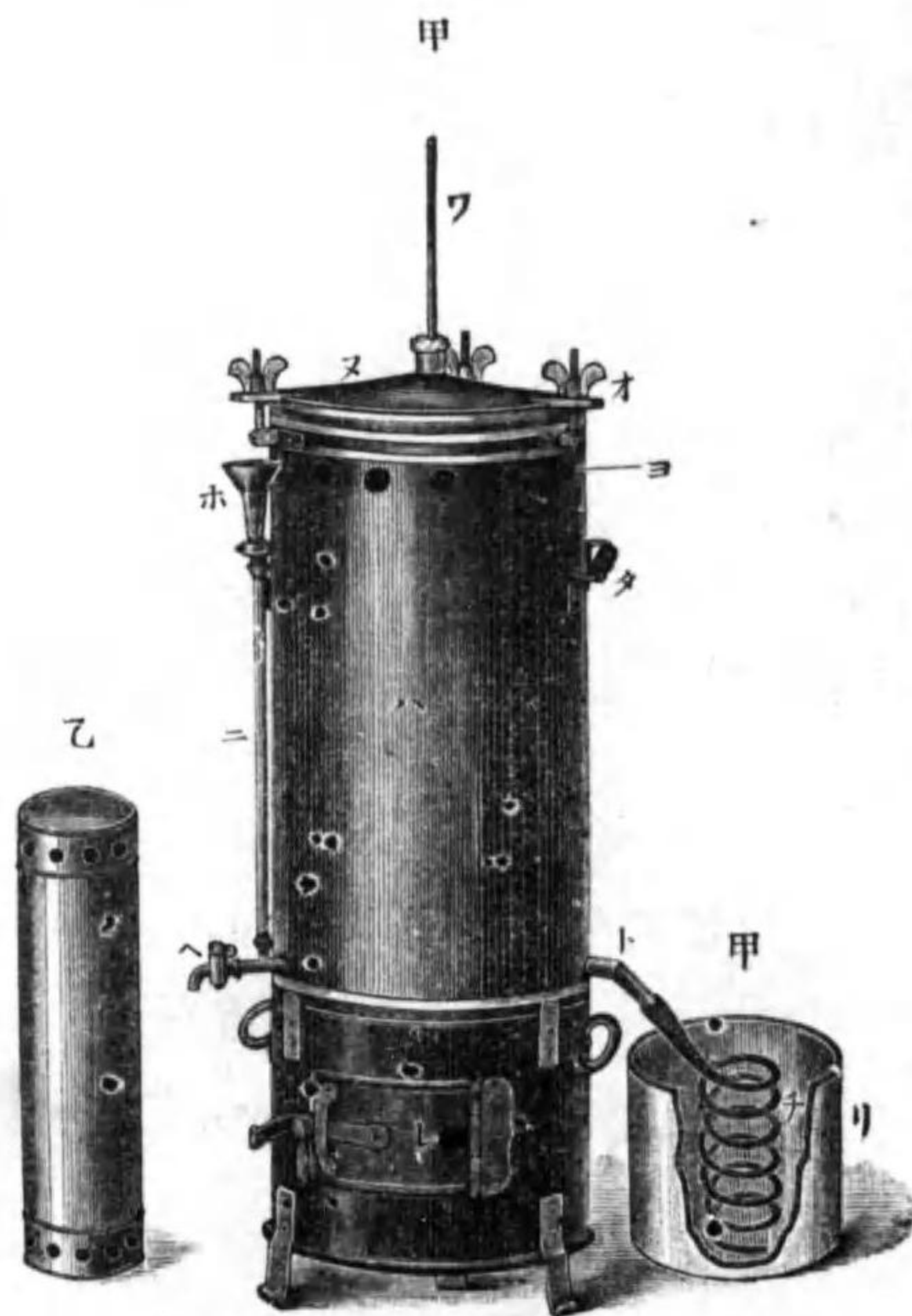
繃帶材料とは綿、綿紗、布片、結紮絲等を云ふ此等は何れも煮沸に堪ゆるものなれども綿、綿紗の如きは乾燥せるまく之を用ゐる場合あれば煮沸に依るは不便なり故に通常は蒸氣消毒法を用ゐるこれは繃帶材料を一定の罐又は箱の内に容

れて更に之を一定の装置を成せる器の内にて充分に規則に從ひ蒸氣を通じて消毒を行ひ而して後は繃帶材料を容れたる器を密閉して不潔物の觸接を防ぎ用に臨みて之を開くものなり此装置は通常複雑にして其價も亦廉ならず然れども近來廣く世に行はんが爲に成るべく簡單にして其目的を達し得るものを構造して販賣するものあり其使用法の大要次の如し

先づ圖に示すところの繃帶材料容器(丙)に綿又は綿紗、木綿等を軽く詰め込み蓋を閉ぢ容器の側面又は底面にある蒸氣の入るべき孔を開き而して消毒装置の釜に水又は湯を漏斗(ホ)に依りて注ぎ殆ど装置の高の半に達せしむ其水の高さを知る爲に釜の傍に硝子管(ニ)あり而して二重底に造られたる釜の

圖九十二第

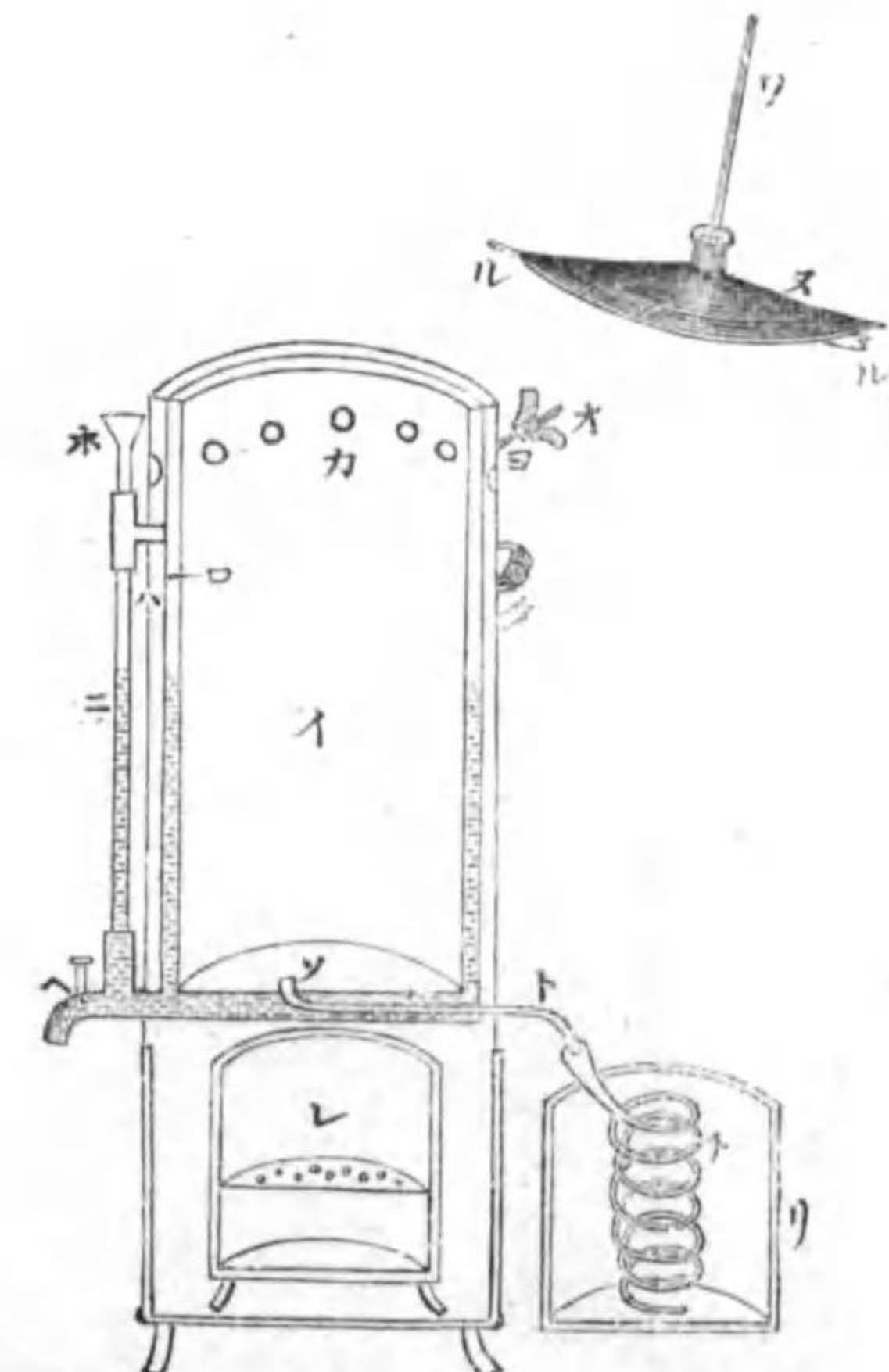
繃帶材料消毒装置の圖



- 甲 消毒装置の圖
- (ハ) 保温の壁
 - (ニ) 内罐の水の高さを知る硝子管
 - (ホ) 漏斗
 - (ヘ) 内罐の水を流出せしむる栓
 - (ト) 蒸氣を水槽に導く管
 - (チ) トに連る鉛管
 - (リ) 水槽(水を充すべし)
 - (ヌ) 蓋
 - (オ) 蓋を密閉するに用ふる螺旋
 - (ソ) 寒暖計
 - (ヨ) 火爐の氣を出す孔
 - (タ) 把柄
 - (レ) 火爐
- 乙 繃帶材料の容器

内に容器(丙)を入たる後寒暖計(ワ)を備へたる釜の蓋(ヌ)を密閉し火爐、石油燈或は瓦斯火口等(レ)を以て釜の下部より熱を加ふべし然る時は暫時にして釜の中の水は沸騰し蒸氣を發し

綑帶材料消毒装置を横断して示す圖



- (イ) 綑帶材料を容るべき内罐
- (ロ) 水を入るべき外罐
- (ハ) 最外部にある保温の壁
- (ニ) 罐内の水の高きを知るべき硝子管
- (ホ) 内罐と外罐の間に水を容る
- (ヘ) 漏斗(水を罐に入るに用ゆ)
- (ト) 蒸流を水槽に導く管
- (チ) トに連る鉛管
- (リ) 水槽(水を充たす)
- (ヌ) 蓋
- (ルオ) 蓋を罐に固定する螺旋及板
- (ワ) 罐内の温度を知るべき寒暖計
- (カ) 外罐の水蒸流となりて内罐に入るべき孔
- (ヨ) 火爐の氣を外に出す孔
- (タ) 消毒装置を移動するに用ふる把柄
- (レ) 火爐
- (ソ) 内罐にある蒸流を(ト)に導く孔

始むべく釜中の蒸流は罐の中にある容器の中を通じて其底面にある孔(ソ)より外部の水槽(リ)に入るべし斯の如くにして

第三十圖

寒暖計の示す處の温度百度に達したる後猶其火力に注意して常に百度より下らざる様にして三十分乃至四十五分時間を経たる後先づ水槽に連れる鉛管(チ)を去り次に釜下の火爐又は火燈(レ)を去り五分乃至十分の後に蓋(ヌ)を開きて容器(乙)を取出し直に其蒸流の入るべき孔を閉すべし之に依りて綑帶材料は充分に消毒せられ得るものなり然れども消毒して後使用の際迄に之を汚染せざることを謀らざれば消毒の効は確かならず若し一度容器を開きて使用せば綿或は綿紗の残れるものあるも更に消毒を行ふにあらざれば心を安んじて使用することを得ずさればかくる場合には更に材料を補足して消毒を行ふを宜しとす然れども必ずしも此器に依らざるも我邦在來の釜を用うるも

其應用の理を誤ることなくば目的を達し得べきも多少の困難と不完全とを免れざれば若し一人にて此器を用ゐる難き場合には数人の産婆連合して器を購ひ縋帶材料の消毒を行ふか薬舗器械舗等の信用するに足るものと特約して消毒を行はしむるも亦可なるべし

通常坊間用ゐらるゝ處のザリチール酸、硼酸又は昇汞等を浸して乾燥したる綿又は綿紗は消毒を行ひたるものと看做して全く信頼すべからざるもの多し勿論上述の裝置に依りて消毒を行ふも容器の構造不完全なるか消毒を行ひたる後長時間を経過するか一度容器を開きたる後は消毒の効力あること確實なりと云ひ難し
總て外陰部、内陰部に用うる綿紗、綿の類又は臍縋帶、胎兒の眼、口

等を洗ふ爲に用うるものは必ず消毒したるものを用うべし一度消毒したるものにてても其効力に疑あるが如きときは用ゐざるを宜しとす腹帶に用うる綿の如きは消毒せざる通常の綿又は脱脂綿を用うるも可なり

第五十六節 衣類の消毒清潔法

衣服の消毒は産婆の術衣、手拭、産婦の上衣、下衣、肌着、腰巻、蒲團、敷布、下敷の如きものなり此等も皆一度煮沸又は蒸氣消毒を行ひたるものなれば甚だ安全なる故成べく之を行ふを宜しとすれども通常は充分清潔に灰汁又は熱湯と石鹼とを以て洗ひたるものを用うるも可なり然れども之を以て充分消毒したるものと看做すことを得ず只割合に清潔なるものとし

て注意を加へて處置之を外陰部に觸接せしめ又は消毒したる手指器械、繃帶材料等に觸接せしめざる様注意すべし。舊來我邦にては産籃襖を稱し殊更不潔なる布片を集めて分娩に用うる習慣あり此習慣は甚だ危険なれども産家生計の度に應じて必ずしも之を用ゐるす云ふことを得ざれば若し之を使用する時は前以て清潔に洗濯したる後一度充分なる煮沸又は蒸氣消毒を行ふべし然る時は用に堪ゆべし。

第二編

正規妊娠の經過及妊婦の取扱法

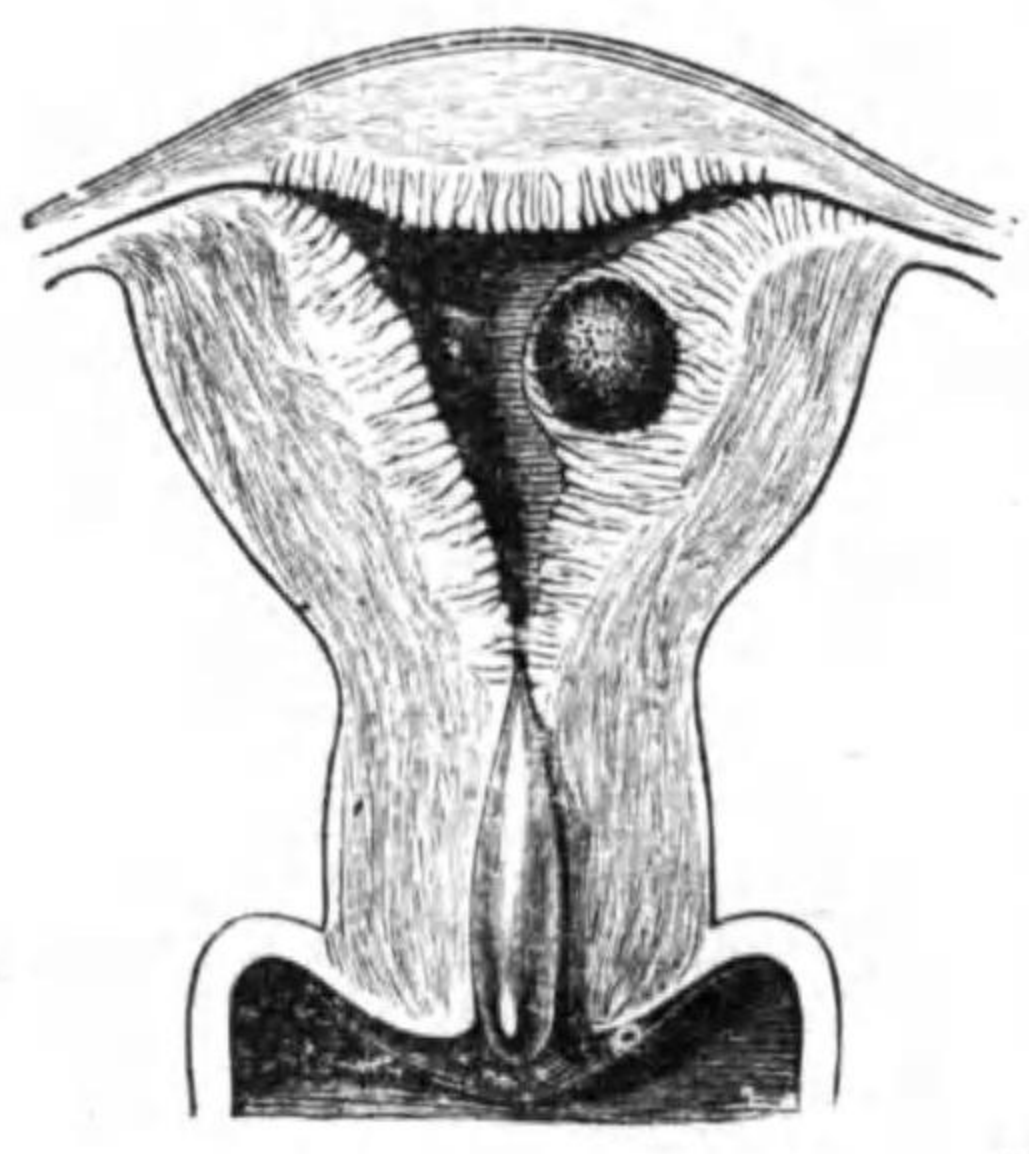
第五十七節 妊娠の意義

妊娠とは婦人が受胎したる卵子を其體內に包容せる状態を云ふ。即ち通常の場合には卵巢より出でたる卵子が男子の精絲と會合して受胎し子宮の内に止まりたる時より始まり子宮内にて生長を遂げて體外に排出せらるるまでの間を云ふ。男子の精絲は交接に由りて婦人生殖器に入るものなり而して其精絲は始め腔内に入り子宮を経て輸卵管に入り其中に於て卵巢より排出せられ剪綵に捕へられ輸卵管に送られたる卵子と會合して受胎するを通常とす然るのち受胎したる卵

子は子宮内に來りて發育を遂ぐるを以て通常とす
 妊娠は大凡二百八十日即ち四十週又は妊娠月の十箇月(妊娠
 月の一箇月は二十八日なり)の間持續し胎兒は其間に分娩の
 後獨立して生活を營むに堪ゆる迄發育を遂ぐるものなり而
 して妊娠の持續を二百八十日と定めしは最終月經の第一日
 より計算して分娩に至るまでの日數を平均せるものなれば
 多少の伸縮は免れ難きものなり然れども俗間用うる如く我
 邦の舊曆を以てし或は太陽曆を以て算するは誤れるものな
 り即太陽曆にて云へば九箇月と四乃至七日にして二百八十
 日となるなり
 子宮内に止まり同時に發育する處の胎兒は只一個なる時は之
 を單胎と云ひ二個以上なる時は之を複胎と云ふ複胎の内二

第三十三圖

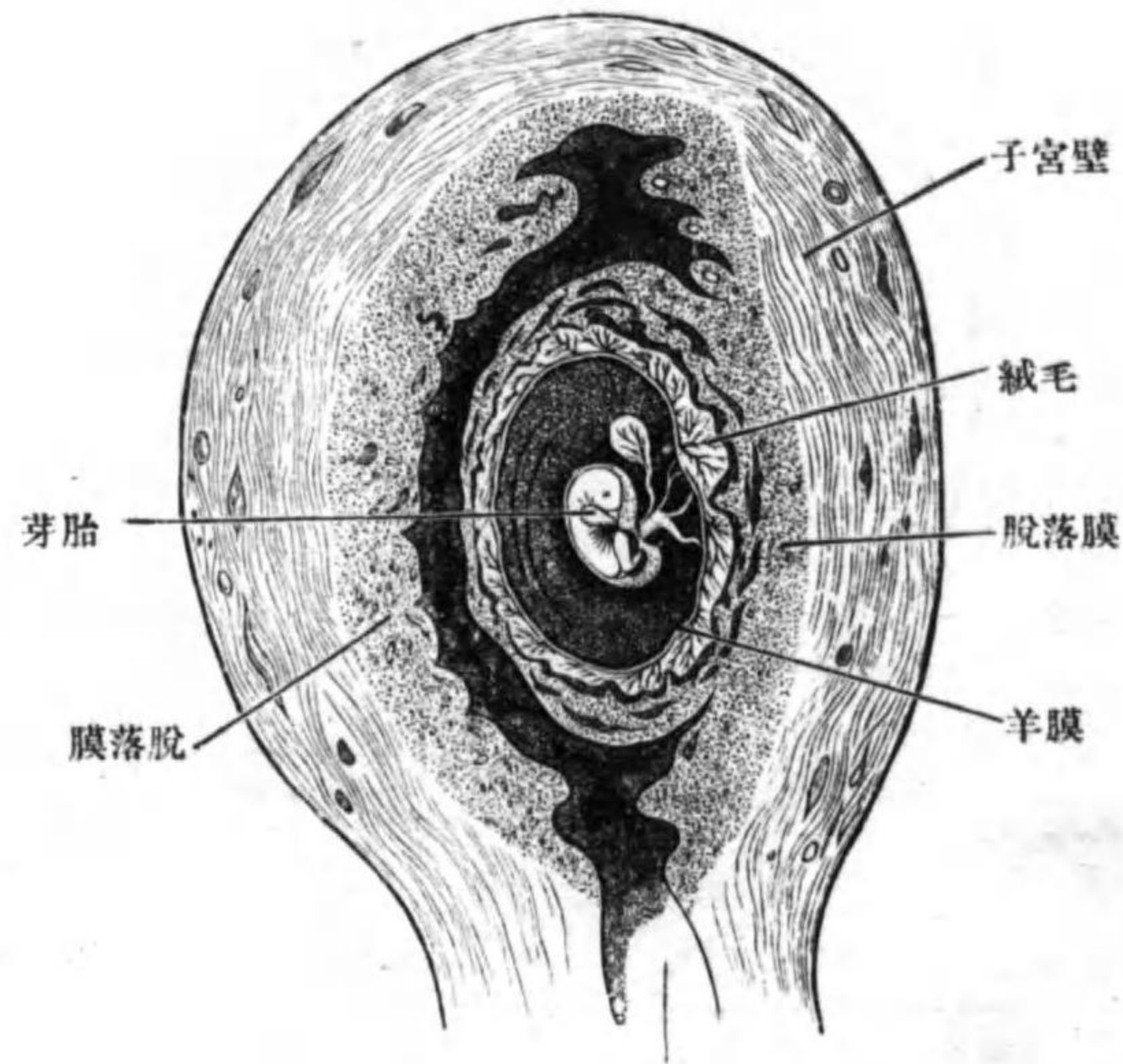
正規妊娠とは受胎したる卵が子宮腔内に宿り二百八十日間



受胎の卵が子宮腔内に宿り二百八十日間
 子宮腔に突出する圓形のもの卵の周圍に其の周圍に他の子宮壁の内面にあり脱落するもの

兒を容るるものを雙胎と云ひ大凡八十回乃至九十回の分娩
 中に一回位の割合に見るものなり三兒なるものを品胎と云
 ひ四兒なるものを要胎と云ふ而して品胎要胎共に之れを見
 ること稀なり五兒を同時に妊娠することは甚稀なり嘗て福
 島縣に於て五兒の分娩を
 遂げたるものあり又亞非
 利加に於て六兒同時に發
 育したるものを見たるも
 のあり然れどもかくる多
 數の胎兒を妊娠すること
 は甚稀なり

第三十二圖



妊娠初期に於ける子宮内の断面

終に全く卵子を包被するに至る而して子宮粘膜炎の造構も亦大に常時と趣を異にす此變化せる粘膜炎を脱落せし稱す

受胎腔内に附着し脱落膜にて包まれたるものは漸次に増大し子宮腔を充すに至る其間に内外二層の卵膜と其内に羊水と胎兒と胎兒を區別し得るに至る卵膜は胎兒と羊水を包む囊にして

にして完全なる發育を遂げ其間母體に著しき障害を來すことなきものを云ふ異常妊娠とは妊娠の經過中に障害を來すか他の疾病を伴ふか或は卵が異常なる状態にあるものを云ふ

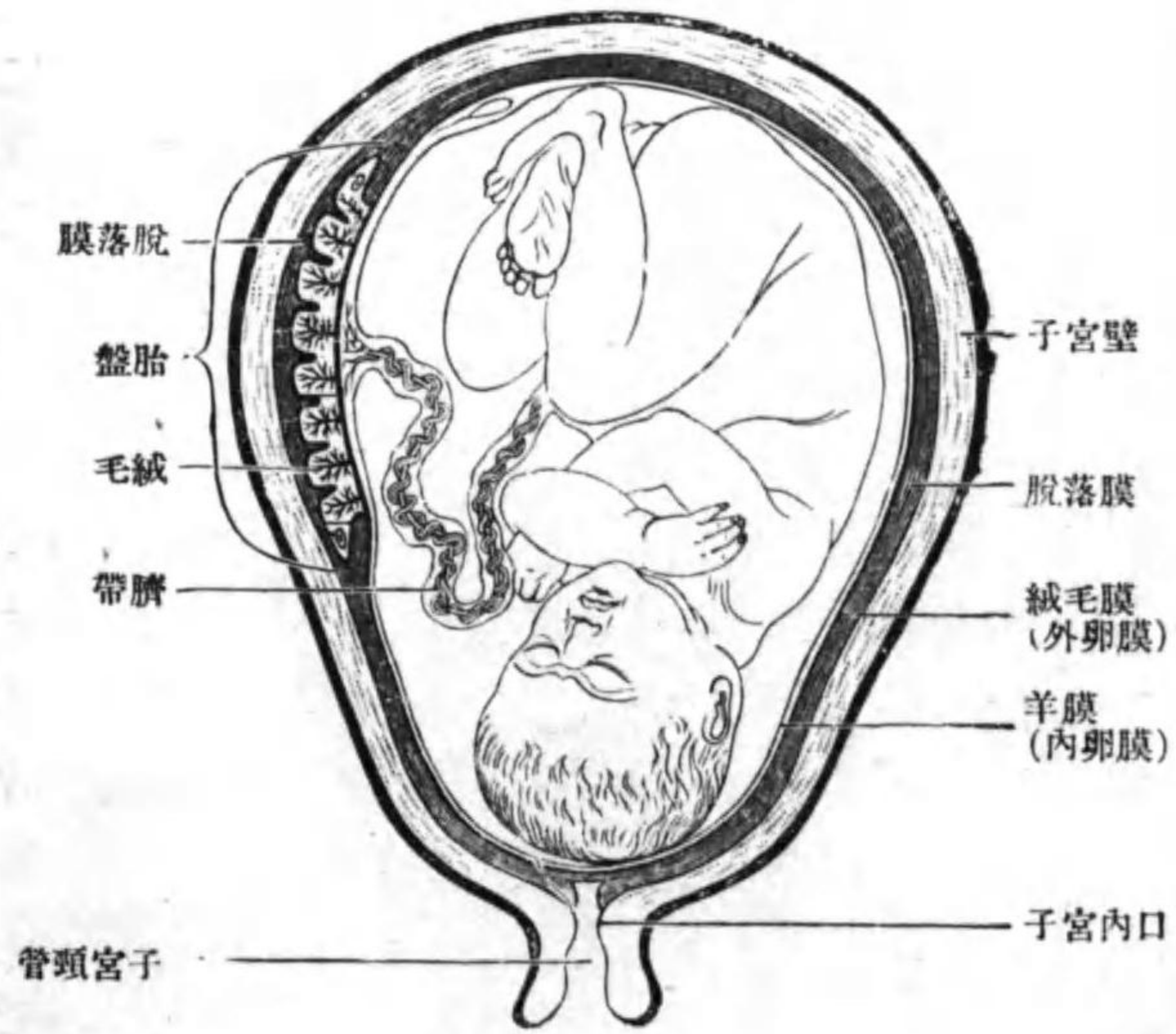
第五十八節 妊娠中に於ける卵子の變化

卵子受胎すれば一定の變化をなして胎芽となり猶發育して遂には胎兒と名けられ完全なる發育の状態に達す之れと共に妊婦の生殖器並に全身に種々の變化を來す

受胎したる卵子宮内に來るや其粘膜炎の皺襞をなせる處に止まり卵子の表面には無數の微細なる絨毛を生じ之に依りて子宮粘膜炎に固着す子宮粘膜炎は卵子の附着と共に盛に肥厚し

子宮腔を充すに至れば絨毛は漸次に消失し絨毛膜の大部分は殆ど平滑となり只其一部分の絨毛のみは盛に發育して深く脱落膜の内に入り其部分の脱落膜も亦盛に發育して肥厚し相共に胎盤を形成す而して此時期には既に胎兒の腹壁より出て胎盤に達する臍帶と稱する紐を生じ此内に大なる血管ありて胎兒に向ひて母體より營養物を送り排泄物を還すの作用をなす而して絨毛の消失せる部分の絨毛膜と羊膜とは互に密着して殆ど一層の膜の如くに見へて全卵の發育に伴ひて大なる囊となる羊水も又其量を増し胎兒は漸次發育する故に此時期より後卵は卵膜、胎盤、臍帶、羊水及胎兒より成る

圖三十三第



す示を係關のと膜卵び及盤胎と兒胎

而して妊娠第八週即ち妊娠二箇月の終りに至り卵子の大きき子

内層を内卵膜又は羊膜と云ひ外層を外卵膜又は絨毛膜と云ふ絨毛膜には前に述べたる如く微細なる絨毛を生じ一見すれば栗の毬の如し而して絨毛に由りて母體の變化せる子宮粘膜即ち脱落膜より營養分を受く

第五十九節 卵膜

卵膜は卵の外被にして二層の囊なり其質甚だ薄く殊に妊娠の末期に至れば益薄く且二層互に密着す然れども之を剝離するには困難ならず外層は外卵膜又は絨毛膜と云ひ妊娠の初期に於ては前に述べたる如く無数の絨毛を有するも成熟して分娩せる卵に於ては之を見ずして只處々に脱落膜の附着せるを認む但し胎盤の部分に於て絨毛膜の厚なくなり絨毛の盛に發育するこは既に述べたるが如し

内層は内卵膜又は羊膜と云ふ甚菲薄にして其内面は極めて平滑なりとす

第六十節 胎盤

胎盤は前に述べたる如く卵子の絨毛膜の一部分と母體の脱落膜の一部分との肥厚せるもの相合して成るものにして其附着せる位置は受胎せる卵が子宮内に入りて初めて附着せる

第三十四圖



胎盤の胎兒面即ち内面を示す

青色なるは臍帶動脈管赤色なるは臍靜脈管の胎盤に入りて分岐したるものを示す

六寸の徑を有し厚さは最も厚き處にて二乃至三仙迷大凡七八分より一寸なり然れども邊緣に至るに従ひて薄し重さも

一部分にして子宮底又は子宮體に在り其質は海綿の如く鬆粗なり形狀は扁平にして圓形或は橢圓形をなす其大きは一様ならざるも平均十五乃至二十仙迷大凡五

亦一定せざるも平均大凡五百四十瓦(大凡百四十五瓦)あり
 子宮に附着せる外面即ち子宮面又は母體面は粗糙にして不
 正に走る溝狀の陷凹ありて大小不定の小部分に分る之を胎
 盤葉と云ふ胎兒と相向へる内面即ち胎兒面は羊膜にて被は
 るくを以て平滑なり而して臍帶は此面に於て附着し其附着
 點より邊緣に向ひて多數の血管蜿蜒として放線狀
 に分岐す
 胎盤は胎兒の發育に關して
 甚大切なるものなり其作
 用は初生兒に比すれば呼
 吸器と消化器とを兼ね即

圖五十三第



胎盤の子宮即ち外面を示す圖

ち臍帶動脈の中を通りて胎盤に來りたる暗赤色の靜脈血は
 胎盤に於て毛細管に分れて其内を流るゝ間は母體の血液と
 は僅かに薄き膜壁を以て界さるゝのみにして其壁を透過し
 て母體の血液より酸素其他種々の營養分を取り不
 成分を母體の血液に與へたる後鮮紅色なる動脈血となりて
 臍帶靜脈の中に集まりて胎兒に入り其營養をなし發育を完
 全ならしむ即ち母體と胎兒との間には直接に血液の循環あ
 るものにあらざるも胎盤の内にて必要なる成分と不要な
 る成分とを交換するなり

第六十一節 臍帶

臍帶は胎兒の臍輪より出でく胎盤の胎兒面に附着するものな

り其長さは甚だ一樣ならざれども通常は略胎兒の身長に等し故に成熟せる胎兒に在りては大凡五十仙迷大凡一尺六寸五分にして太さも亦一定せざるも概小指大なり其内に一個の臍帶動脈管と一個の臍帶靜脈管と合せて三個の血管を有し其血管の周圍には膠の如き酸肉組織又は膠樣組織を有し其血管の周圍には包まれ其最も外面は羊膜に由りて被はるご云へるものにて包まれ其最も外面は羊膜に由りて被はる臍帶は全部多少捻振して恰も糾へる繩の如し其捻振甚だしくして酸肉組織太くなり血管蜿蜒して結節の如き狀をなすものを假結節と云ひ臍帶全く結節を作るものを眞結節と云ふ眞結節は之を見ること稀なれども假結節は屢之を見ることあり

臍帶動脈管は胎兒の體內を循環して靜脈血の性質となりた

る血液を胎盤の方に輸送するものにして胎盤に入りて後に分岐して終に毛細管となり前に述たるが如く其部分に於て血液は新鮮にせられ動脈血の性質を有するに至り更に相湊りて臍帶靜脈管を通りて臍輪より胎兒の體內に入りて循環を営むものなり故に臍帶に於て此血液の循環を阻げ止むること五分時間以上に及ぶ時は胎兒死亡することあるものなれば臍帶の眞結節の固結せる時又は臍帶の壓迫を受くること長さきき等には胎兒の死亡を來すことあり

卵膜胎盤臍帶は共に胎兒娩出の後に娩出するを以て之を總稱して後産又は娩隨と稱す

第六十二節 羊 水

羊水は卵膜の内に満ち初め透明にして水の如き液なれども後には胎児の排泄物に由りて混濁するに至り一種の臭氣を有す妊娠末期には胎児の皮膚に生ずる胎脂を混じて白く粘り絮片を混ず其量一樣ならざれども妊娠末期には大凡二リ一テル大凡五合半を平均の量となす又分娩時には綠色に着色するこごあり是胎糞を混じたるものにして始に常に胎児に危険の迫れるこごを知るの徴候となすに足るものなり

羊水の効用は胎児及び胎盤の受る壓迫を防ぎ又臍帶の受る壓迫をも防ぎて血液循環の妨げなからしむるものなり其外胎児の運動を自由ならしめ且胎児の運動を母體に柔かに感ぜしめ胎児皮膚の密着せる處又は胎児と卵膜と密着せる處に於ける癒着を防ぐ作用あり分娩に際して最大切なるは其

粘滑の性によりて胎児の産道を通過するを容易ならしむるの作用なり羊水の外に假羊水といへるものあり内外二卵膜の間又は外卵膜と脱落膜との間に水様液の溜溜するものを云ふ此假羊水は妊娠中にも時々流出するこごあれども時ごして分娩に際して流出するこごありて羊水と誤るこごあり

第六十三節 胎兒

胎兒は其發育の初は白き絲屑の如くに見ゆ而して漸次に發育して身體の各部を具へ人體の形を成すに至るものなり而して發育の順序は正しくして其發育の状態と大きさに依りて其發育に要したる時日を定め得るものなり

妊娠第一箇月の終には胎兒の長き僅かに二三分を出ずして

全卵の大きさは鳩卵に近し

妊娠第一箇月の終には胎児の長さ大凡三仙迷(大凡一寸)全卵の大きき鶏卵大なり

妊娠第三箇月の終には胎児の長さ大凡八仙迷(大凡二寸六分)ありて頭、軀幹、四肢等を分つことを得全卵の大きき驚鳥の卵の如し此時期に至るまでの胎児は通常胎芽と稱し此時期より後は胎児と稱す

妊娠第四箇月の終には生殖器發育して男女の區別をなし得べく長さ十五仙迷(大凡五寸)となり胎盤の形成殆ど成る

妊娠第五箇月の終には胎児は二十四仙迷(大凡八寸)の長さを有し妊婦は体内に於て胎児の運動することを感じるに至る

妊娠第六箇月の終には全身に極めて細き白色の毳毛を生じ皮下に脂肪を生じ始むるものにして身長は二十九仙迷(大凡九寸六分)なり

妊娠第七箇月の終には身長三十三仙迷(大凡一尺一寸)體重大凡千五(二百四五十)ありて身體の諸器官發育し母體を離る

くごも辛ふじて獨立の生活を營み得るに至る即ち皮膚は赤色にして毳毛あり胎脂を附着し眼瞼は既に開く此時期以後に分娩せし胎児は充分なる保護に由りて生存することを得る故に此時期以前の胎児を不熟胎児(未熟胎児)又は未成嬰兒(未成嬰兒)と云ひ此時期以後妊娠第三十八週の間に於ける胎児を

早熟胎児(早熟胎児)又は可成嬰兒(可成嬰兒)と云ふ
妊娠第八箇月の終には身長四十仙迷(大凡一尺三寸)體重大凡

千五百瓦(三百八十九匁)にして皮膚は赤くして猶瘦せたり顔貌は恰も老人の如し

妊娠第九箇月の終には胎児の身長四十五仙迷(大凡一尺四寸五分)體重大凡二千五百瓦(六百五六十匁)にして全身少しく肥

満す 妊娠第十箇月の終には胎児の身長大凡五十仙迷(大凡一尺六寸五分)體重大凡三千五百瓦(八百匁)に達し全身充分に肥満し成

熟胎兒又は成熟嬰兒の徴證を具ふるこゝ次節に述ぶるが如し

全妊娠各月に於ける胎兒身長の概數を記憶するには次の表に依るを便なりとす

第一箇月の終には 一に一を乗じ 一仙迷

第二箇月の終には	二に二を乗じ	四仙迷	即ち妊娠
第三箇月の終には	三に三を乗じ	九仙迷	娠月數
第四箇月の終には	四に四を乗じ	十六仙迷	を自乗
第五箇月の終には	五に五を乗じ	二十五仙迷	す
第六箇月の終には	六に五を乗じ	三十仙迷	即ち妊娠
第七箇月の終には	七に五を乗じ	三十五仙迷	娠月數
第八箇月の終には	八に五を乗じ	四十仙迷	に五を
第九箇月の終には	九に五を乗じ	四十五仙迷	乗ず
第十箇月の終には	十に五を乗じ	五十仙迷	

第六十四節 成熟胎兒

成熟胎兒は身長四十六仙迷乃至五十仙迷なり我邦に於ては著

者の調査によれば平均四十八、八仙迷大凡一尺六寸一分、柳醫
 學博士の調査にては平均四十八、三仙迷大凡一尺五寸九分な
 り故に大凡一尺六寸と記憶すれば大差なかるべし體重は大
 凡三千五即ち三基大凡八百匁なり而して皮膚は淡赤色を呈
 し手足の爪は何れも硬くして指頭よりも長く突出し軀幹四
 肢共に肥満す頭部と軀幹とは適當なる割合を保ち頭蓋骨も
 硬くして其骨の結合も固く頭髪は殆ど三乃至五仙迷大凡一
 寸五分内外の長さありて密生し鼻耳も稍堅く軀幹の皮膚に
 は毳毛殆ど消失し僅に項部及び背部に存し胎脂は腋窩股關
 節部、肩胛部等に極めて僅に附着し或は全く之を認ず而して
 男子なれば陰囊の内に睪丸あり女子なれば大陰唇は豊隆し
 て小陰唇を被ふ臍輪は殆んど腹部の中央にして少しく下方

に位す肩の廣さは大凡十一仙迷三寸六分腰部の廣さは大凡
 九仙迷三寸ありて臍帶は腹部の中央にある臍輪に附着し其
 太さ大凡小指大あり
 成熟胎兒は健康に分娩するや直に高聲を發して啼泣し眼を開
 き活潑に四肢を動かし大便と小便とを排出す大便は帶黒綠
 色にて粥泥状をなし粘稠なり之を胎糞と云ふ而して口中に
 乳嘴又は指頭を入るゝ時は直に哺乳運動をなす
 以上述ぶるところの状態は其一二に於て缺くるところあり
 も大體に於て成熟せるや否やを定むるの標準となるものな
 り其他猶
 胎兒の頭蓋は胎兒身體の中最も大なる部分にして分娩に際
 し母體の骨盤内を通過するに他の部分よりも困難なるもの

なり且胎兒成熟の度を知らるの標準の一となるものなれば今より詳に之を説くべし

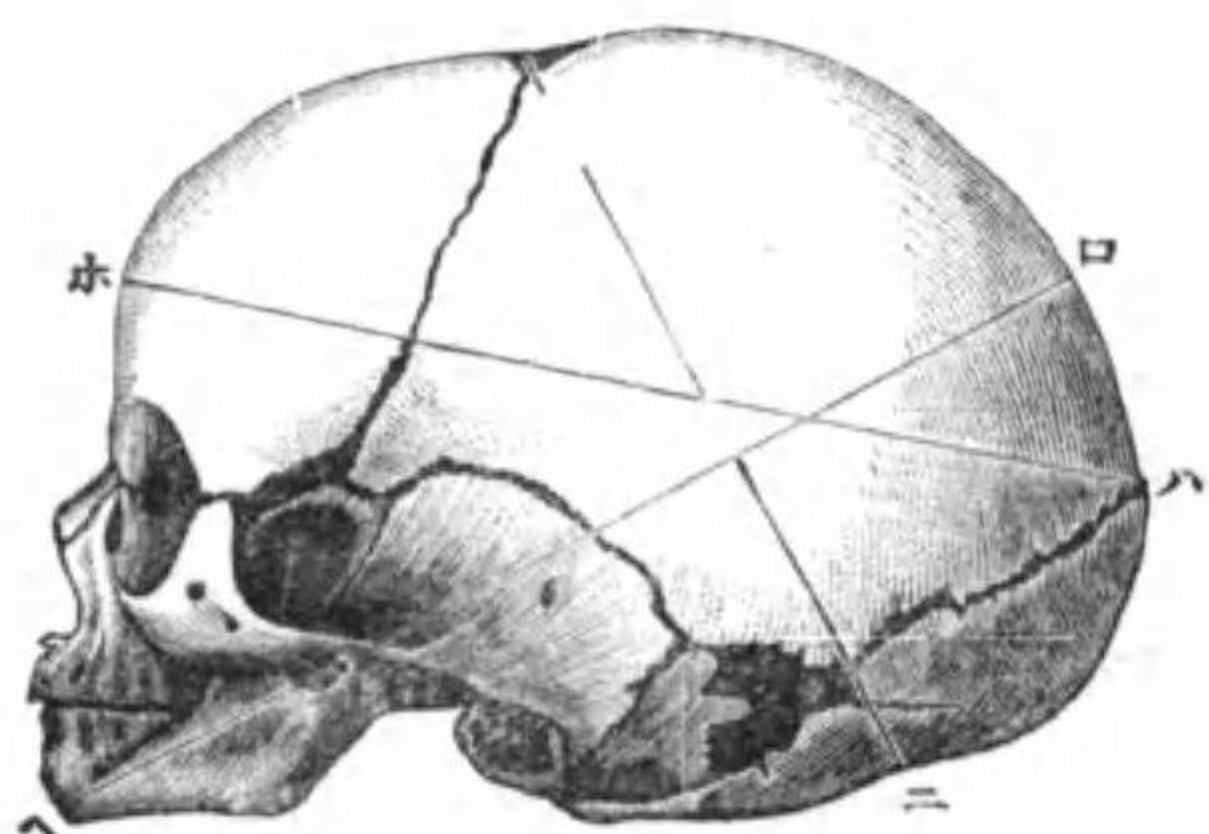
初生兒の頭蓋は前に述べたる如く二個の前額骨と二個の顱頂骨と二個の顱顱骨と一個の後頭骨との七個より成り其縫合は成人に於けるが如く鋸齒状に相接することなく只膜状を成せる靱帯によりて弛く結合し二骨の邊緣は殆ど平滑なり而して此縫合も大人に於けるが如く縫合或は銜縫と名く其名稱次の如し

- (一) 前額縫合(又は前頭縫合)とは左右前額骨の間を云ふ
- (二) 冠狀縫合(又は冠處縫合)とは顱頂骨と前額骨との間を云ふ
- (三) 矢狀縫合とは左右顱頂骨の間を云ふ

(四) 後頭縫合(又は三角縫合)とは顱頂骨と後頭骨との間を云ふ

而して頭蓋に於て此等の縫合の二個以上相合する處に多少骨を以て被ふことなき部分あり之を顱門と云ふ其前額縫合と冠狀縫合と矢狀縫合と相會する處にある四角形を成せるもの大顱門又は前顱門と云ひ矢狀縫合と左右の後頭縫合との相會する處を小顱門又は後顱門と云ふ又冠狀縫合の兩端と後頭縫合の兩端に前後各一對の側顱門あり胎兒の頭蓋は既に述べたる如く其身體中の最大なる部分にして頭蓋若し骨盤内を通過すれば軀幹四肢等の通過は左までの困難ならず而して頭蓋の骨盤内を通過するには縫合と顱門の部分に於て相接する兩骨の邊緣相重りて頭蓋の周圍を減

圖六十三第



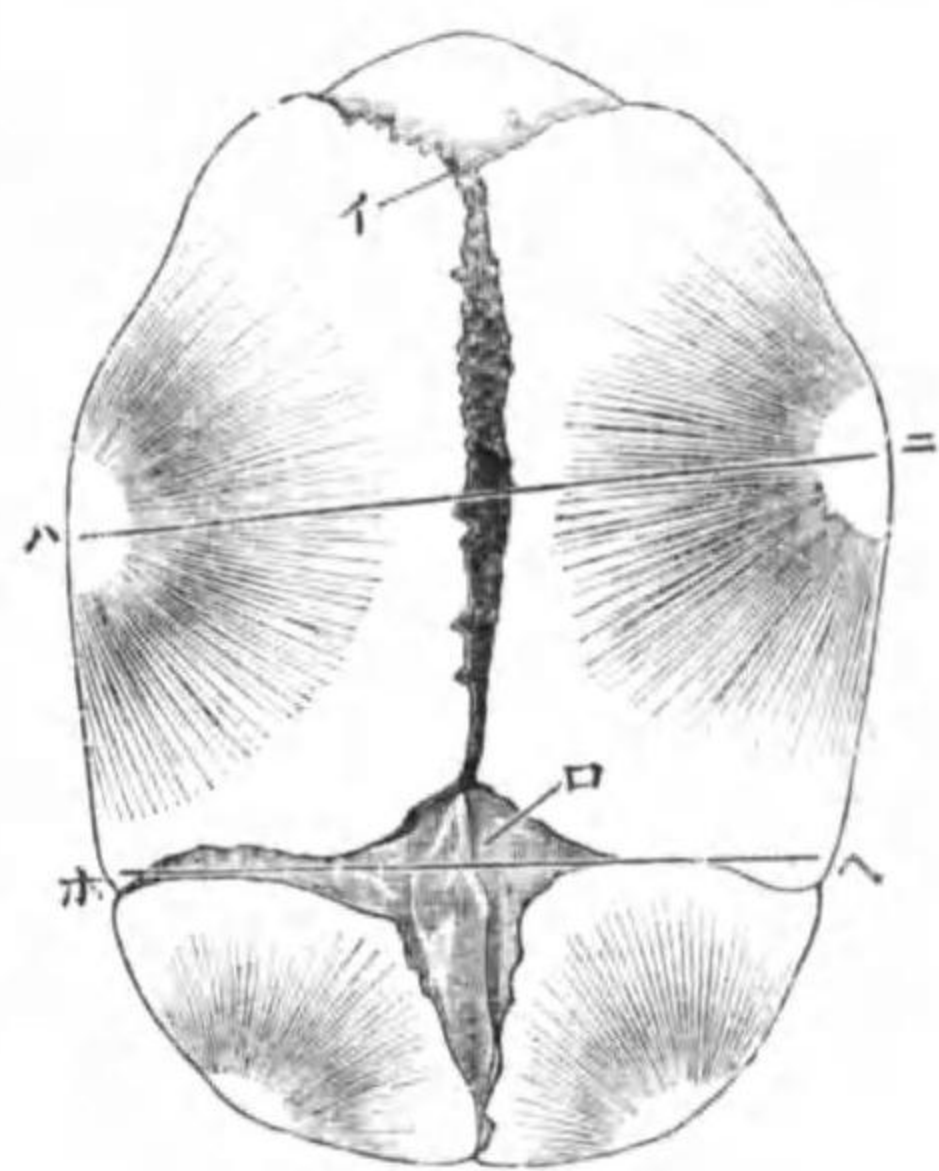
圖るた見りよ方側を蓋頭の兒生初

(イ) 小斜徑
(ロ) 大斜徑
(ホ) 縱徑

(一) 縱徑線は前額の中央より後頭結節に至るものにして第三十
六圖に示せる(ホハ)にして其長さ十仙迷半(大凡三寸五分)あり
(二) 小横徑線又は前横徑線は冠狀縫合の最大距離なり通常は
前側顳門の距離に相當す第三十七圖の(ホハ)にして其長さ七

ず即ち顳門大にして縫合の
間隔大なれば頭蓋の周圍減
少するこ著しく顳門小に
して縫合の間隔小なれば頭
蓋の周圍減少するこ少し
こなす而して胎兒頭蓋の大
小を定むる爲に一定の徑線
を設けて之を測定す

圖七十三第



圖たり方を頭兒初
る見よ上蓋の生

(イ) 小顳門
(ロ) 大顳門
(ハ) 大横徑
(ホ) 小横徑

仙迷半(二寸五分)な
り
(三) 大横徑線又は後
横徑線は兩顳頂結
節の距離なり第三
十七圖の(ハニ)に

て其の長さ大凡九仙迷(三寸)なり
(四) 小斜徑線は大顳門の中央より項窩に至る距離なり第三十
六圖の(イニ)にて其長さ大凡九仙迷(三寸)なり
(五) 大斜徑線は頤より小顳門迄の距離なり第三十六圖の(ロハ)
にして其長さ大凡十二仙迷(四寸一分)なり
通常頭蓋の周圍を稱するは前額の中央より兩側の顳頂骨と

顛顛骨との間を過ぎ後頭結節に至るものにして恰も縦徑線に一致する部分の周圍なり其長さ大凡三十三仙迷(一尺一寸)あり

第六十五節 早熟胎兒

成熟せざる胎兒は薄弱にして矮小なり身長四十八仙迷に達せり體重は三千瓦に達せず皮膚は暗赤色にして皺襞多く老人の如き顔貌を呈す毳毛は猶著しく全身に生じ多くの胎脂全身に附着し啼泣するにも低聲にして只僅かに眼瞼を開閉するることあるのみ哺乳は不充分にして弱く或は全く哺乳し得ざることあり
鼻耳は猶甚だ軟かにして爪は指頭を超えず臍輪は腹部の中央

より著しく下部に在りて臍帶の酸肉組織は未だ發育充分ならず男兒に於ては睪丸猶陰囊内に入らず女兒に於ては小陰脣は大陰脣の間より顯はる四肢の運動は活潑ならずして僅かに之を動かすのみ
頭蓋は小にして諸徑線の計測數小なり而して顛門並に縫合共に割合に大にして頭蓋骨は成熟胎兒よりも軟かなりにして時として指壓に應じて陷凹することあり

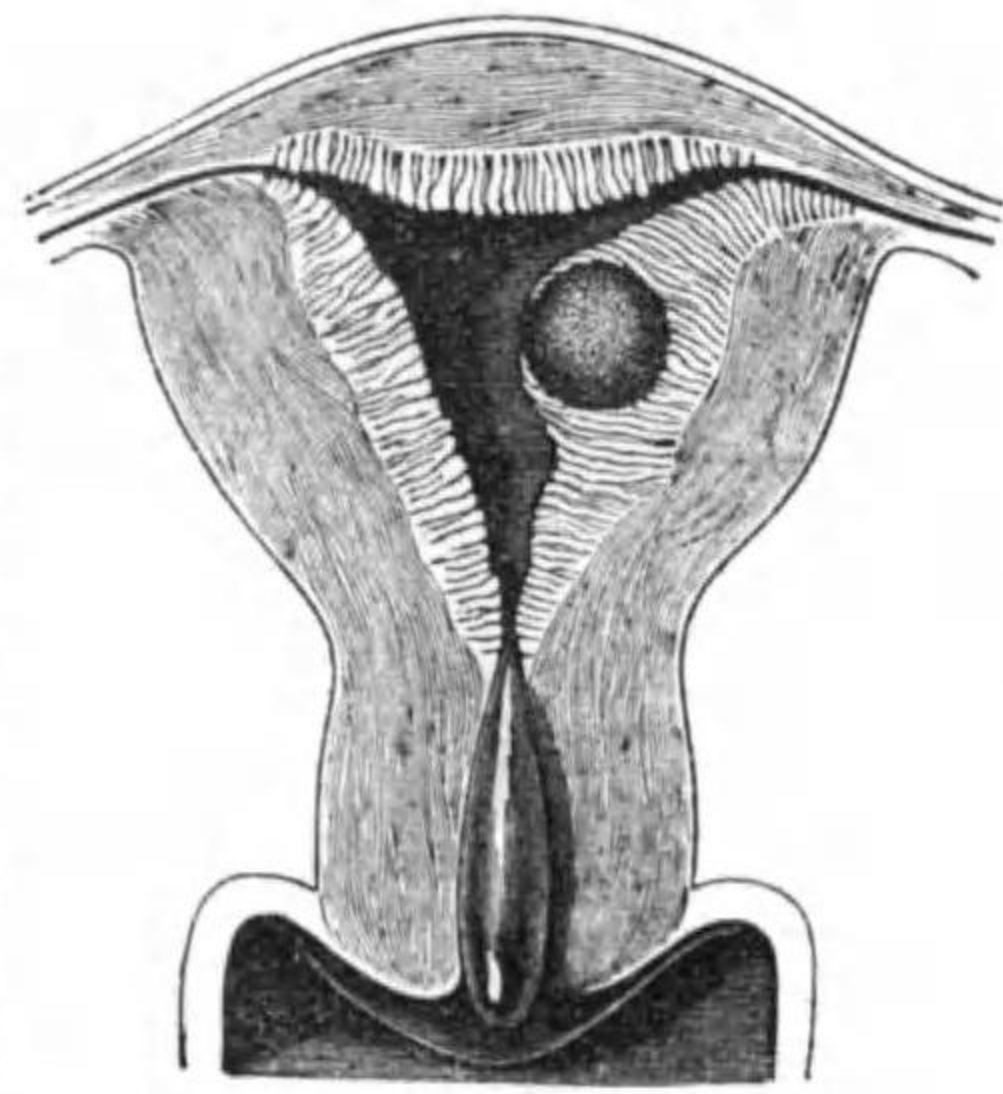
第六十六節 胎兒の位置

胎兒の長徑とは胎兒の頭より胎兒の臀部に引きたる線を云ひ子宮の長徑とは子宮口より子宮底の中央に引きたる線を云ふ而して胎兒の長徑と子宮の長徑と同一方向を取る

か或は交叉するかに由りて胎児の體位或は(胎位)を定む其胎児の長徑と子宮の長徑と一致するものを縦位と云ひ其交叉するものを斜位又は横位と云ふ
 縦位は之を大別して頭位及び骨盤端位と云ひ胎児の頭部が母體の骨盤上口に向ふものを頭位と云ひ胎児の骨盤端が母體の骨盤上口に向ふものを骨盤端位と云ひ而して此骨盤上口に向ひたる部を下向部或は前置部と云ひ下向部の内最も深く骨盤内に入りたる部分を先進部と云ふ妊娠の初期に於ては胎児の小なる割合に羊水多きが故に自由に運動し從ひて胎児の位置に變化を來し易きも妊娠の末期に近くに従ひて一定の體位を取るに至るものなり然れども尙時として變化することあり稀には分娩中に變化するを見ることがあり

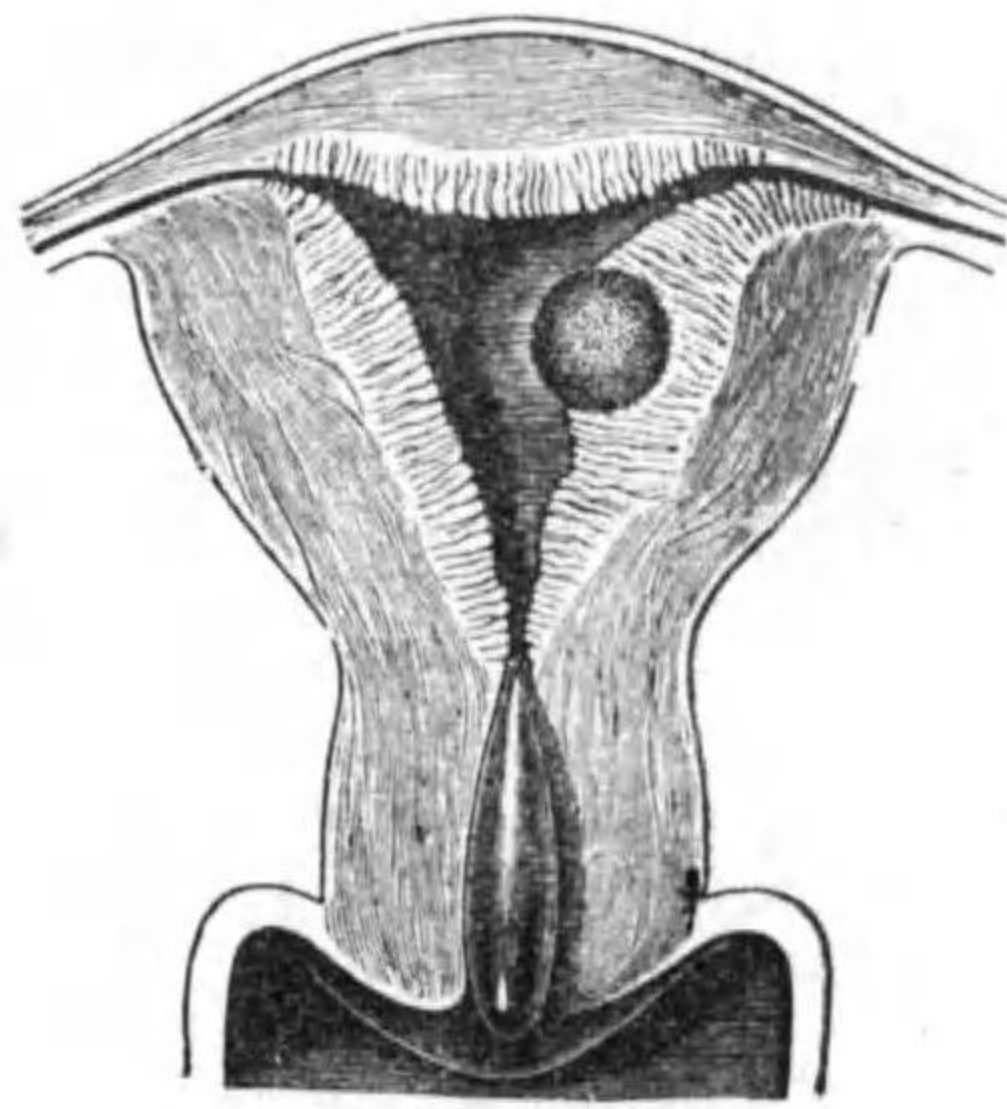
胎児の體勢或は體狀或は胎勢又は胎狀とも云ふとは胎児の身體に於ける各部分の狀態を云ふ普通の體勢は背部を少しく屈め頭は頤を以て胸に近づけ上肢を胸の前に下肢を前腹壁に向て屈め上腿は下腿に足背は下腿に接し跟部は尾骶部に近く即ち其全形は殆ど卵圓形をなし頭は卵圓の尖りたる方にして腰部と足とは其廣き方を占む以て妊娠せる子宮の卵圓形をなせるに適合するなり
 妊娠の初期には前に述べたる如く羊水割合に多きも胎児の體勢は上に述べたる狀態に同じと雖も各部分の屈曲は妊娠末期に於けるが如く甚しからず而して妊娠末期に近くに従ひて羊水の量は次第に増加するも全卵の増大する割合には少くなり且胎児の成長盛にして子宮内を満すに至るを以て胎

圖十四第



第三圖の十
八の進よ
りたも進
みたるに
し膜は脱
落すに包
終を既落
すら包み

圖九十三第



卵宮内の子
附着的に
る脱させ
態の脱落
態

子宮に於ては先づ卵を包容
 し之を養ひて成熟せしめた
 る後終に之を排出するの機
 能を營むなり即ち子宮腔を
 被ふ粘膜は血管に富みて肥
 厚し脱落膜を形成し受胎せ
 る卵之に附着す其部分是多
 くは子宮の前壁或は後壁の
 上部なり卵の附着せる後
 脱落膜の一部は増肥厚して
 終に之を包被するに至る第
 四十一圖を見よ之を包被脱

圖八十三第



普通の體
の胎れを
取勢の兒
圖

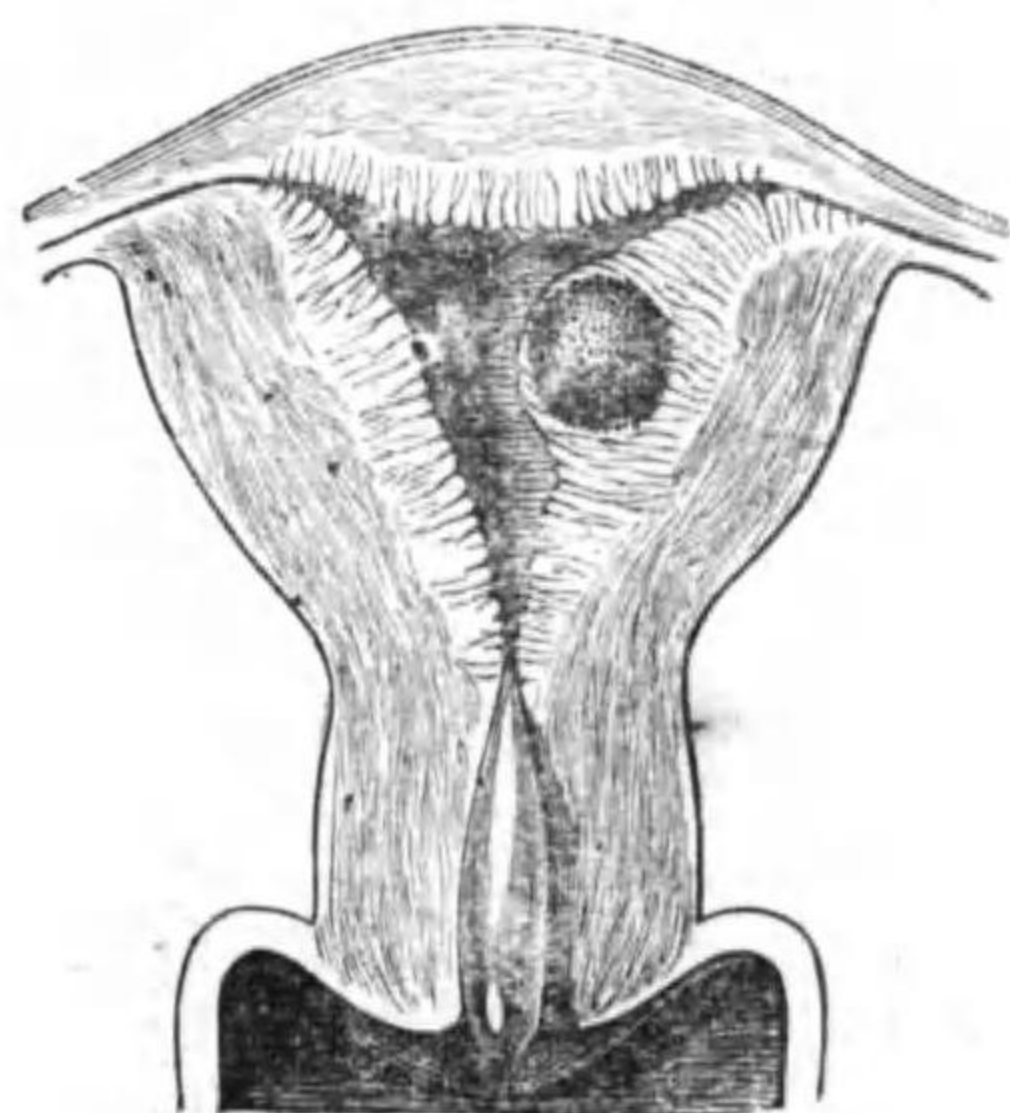
こも云ふは胎兒の背が母體の何れの側に向へるか
 定むるものなり兒背若し母體の左の方に向へるときは第
 一胎向と云ひ兒背右に向へるときは第二胎向と云ふ

第六十七節 妊娠の爲に起る婦人生殖器の變化

受胎したる卵子宮粘膜に附着するや婦人生殖器に變化を來す

胎兒の體向(或は胎向
 兒の體は次第に強く
 屈みて上に述べたる
 如き體勢をなすに至
 るものなり

圖一十四第

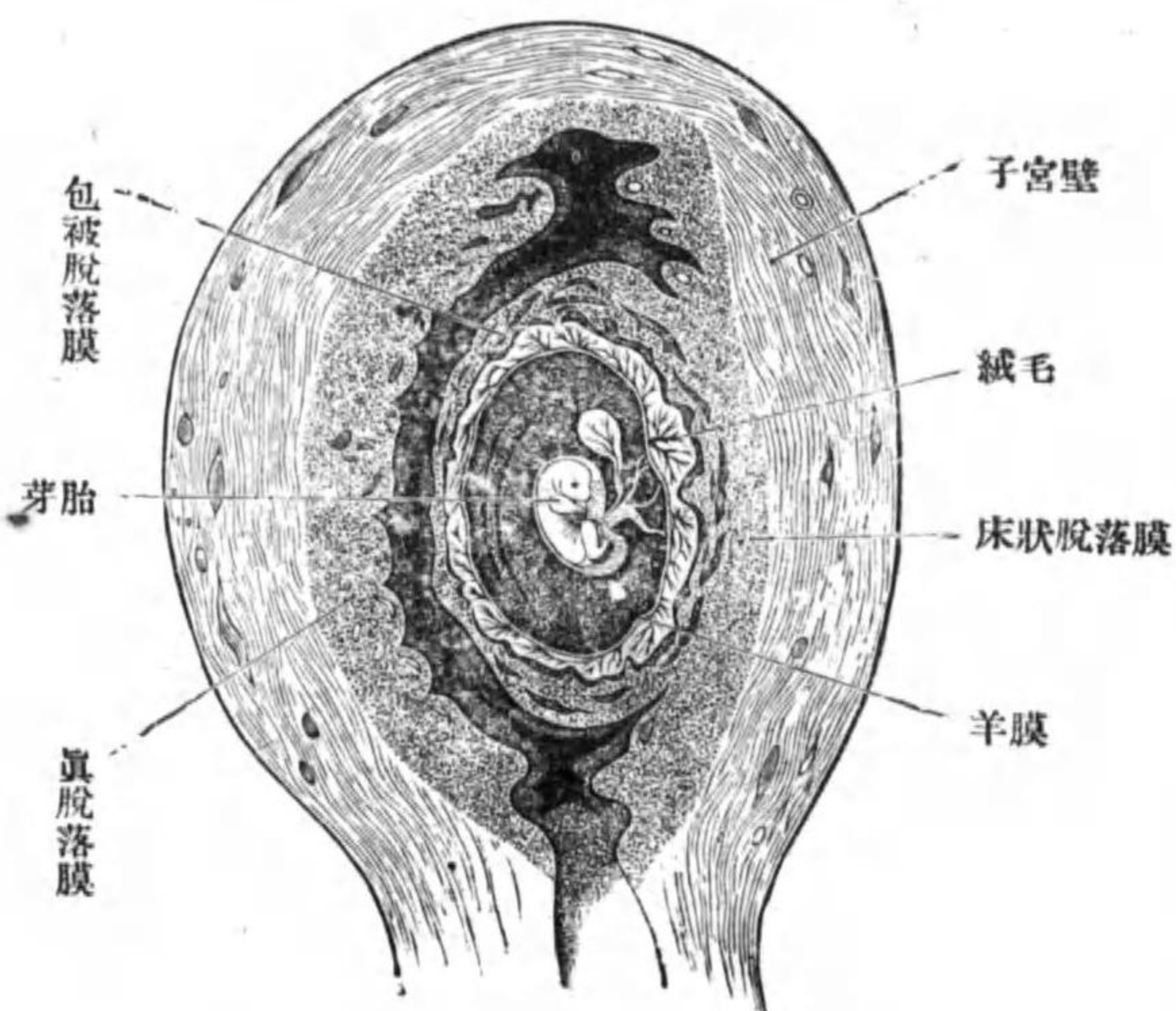


包被脱
落膜の
全く包
み終り
たる状
を示す

包被脱落膜は妊娠の後半期に至れば卵の成長と共に薄くなり遂に眞脱落膜と共に癒着し分娩の時には外卵膜の外面に附

落膜又は翻轉脱落膜と云ひ卵の附着せる部分にして殊に肥厚せる脱落膜の部分に床状脱落膜と云ひ其他の子宮腔を被ふものを眞脱落膜と云ふ即ち床状脱

圖二十四第



三種の脱落膜の關係を示す

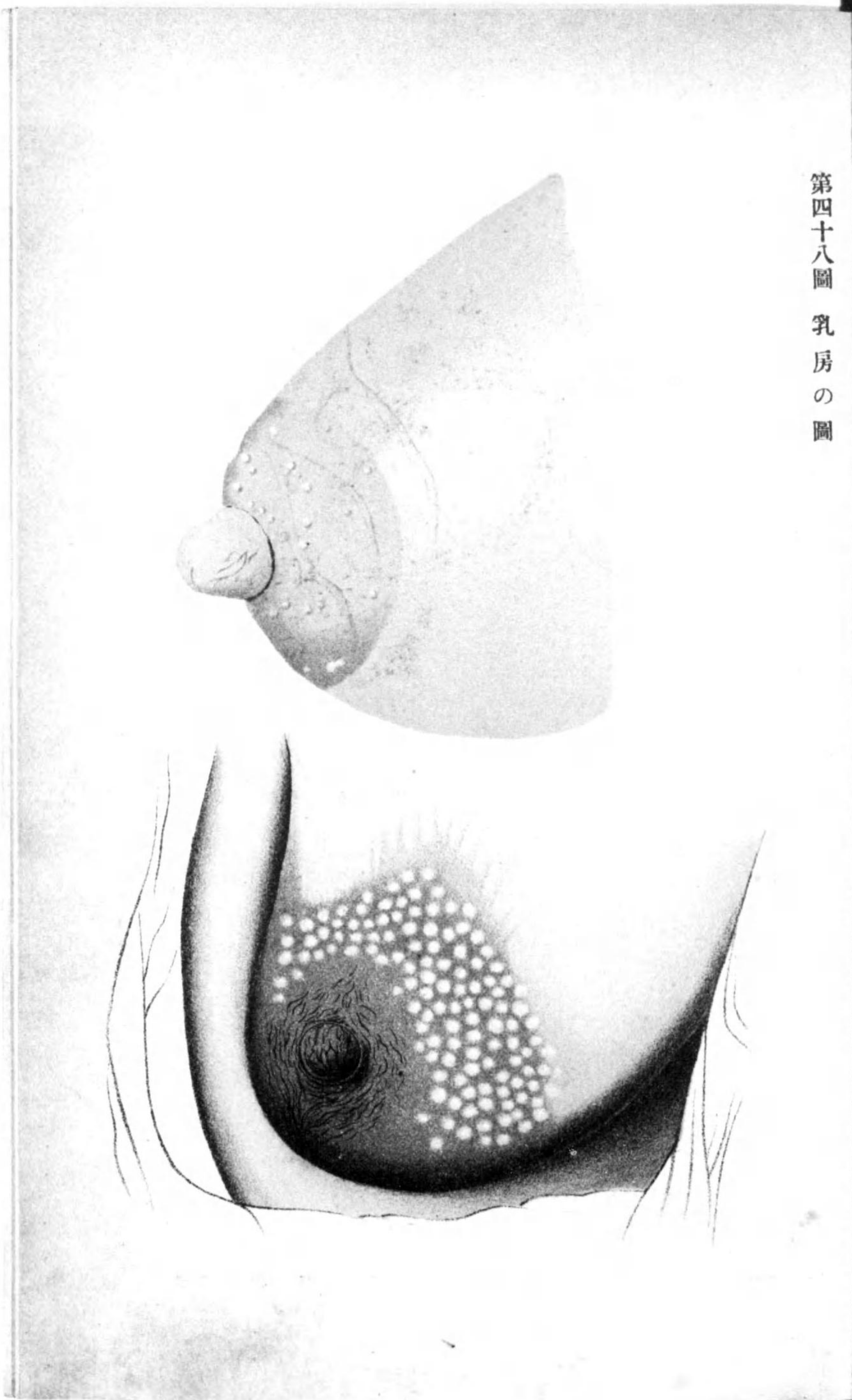
於て然りさす而して血液に富むが故に其温度も少しく増し

着して剝離す
肥厚せる床状脱落膜には卵の絨毛の肥厚したるもの入り來りて胎盤を形成するに既に前に述べたるが如し妊娠によりて子宮壁は血液に富み血管及び筋肉組織を新に生じ甚だ厚くなり殊に胎盤の附着部に

藍赤色らんせきしよくとなり其組織一般そのそしきいぱんに軟かやわらとなり腫脹しゅちやうせるが如ごとくに見み
 子し宮きやう體たいは妊にん娠しんすれば肥大ひだいし且胎兒かつたいじの發育はついくする爲ために其大そのおほひさを
 増ますものなり即すまち妊にん娠しんの各月かくげつに於おける子し宮きやう體たいの大おほひさは次つぎの
 如ごとし
 妊にん娠しん第一だいいち箇月かげつの終おしまに於おては著いちじるしき腫大しゅだいを認みめず
 第二だいに箇月かげつの終おしまには子し宮きやうは鷺鳥がさぎの卵たまごの大おほひさに近ちかく其形そのかたち少すくしく
 球狀きゆうじやうなる
 第三だいに箇月かげつの終おしまには子し宮きやうは手拳しゆけんの大おほひさとなり少すくしく前下ぜんか方に
 下垂かすたるするが如ごとく下腹かふくは少すくしく膨隆ぼうりゆうす子し宮きやう腔部きやうきやうぶは後方ごうほうに向むかひ
 爲ために膀胱ぼうくわう及び直腸ちくちやう等に壓迫あつぱくを及およぼすが故ゆゑに尿意頻數ねいひんすう及び便
 秘ひを來きたすことあり子し宮きやう腔部きやうきやうぶより子し宮きやう體たいに移うつる部分ぶぶん即すまち子し宮きやう

欠

第四十八圖 乳房の圖



欠

を参照せよ)

腔並に外陰部も亦變化を來す腔は軟かにして且鬆粗となり
恰も軟かくして滑かなる護謨に觸るゝが如し而して多量の
粘液を分泌す外陰部も亦鬆粗となり且軟かとなる子宮腔部
腔腔並に腔口の粘膜は何れも藍赤色の著色を呈し外陰部
の皮膚には多少色素の沈着を増す此等の著色及色素の沈着
は妊娠末期に近くに從ひて著明となる

輸卵管、卵巢及び子宮扁韌帶、子宮圓韌帶等も子宮の膨大に
伴ひて肥厚し且其位置を變ず

乳房にありては乳腺大きく且軟かとなり乳頭を壓すれば透明
なる液體を分泌し乳暈は大となり且暗褐色に着色し乳房並
に其近傍に在る皮下の血管は青色に現はるゝことあり

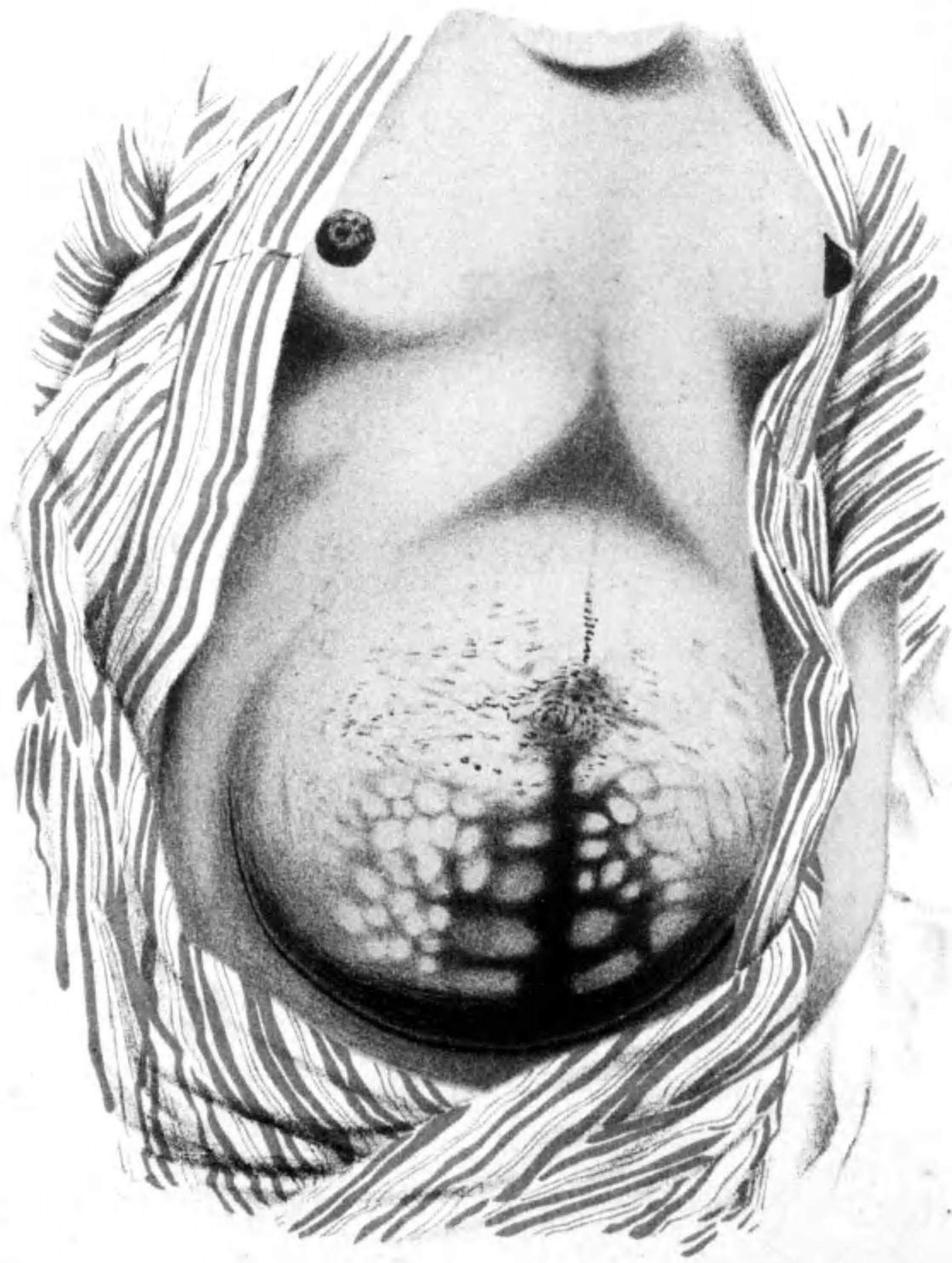
月經は妊娠中には全く閉止するを常とする然れども稀には妊娠中にも血を漏らすことありて時としては定期性にして月經の如くなることあるも多くは不正にして月經と同一なるものにあらず

第六十八節 子宮の膨大に因りて起る妊婦身體の變化

子宮の膨大に因りて近傍の器官即ち直腸及び膀胱に壓迫を來す健康なる妊婦に於ても妊娠三四箇月の頃には膨大せる子宮が小骨盤を充すを以て壓迫を受け尿利頻數を起すことあるも子宮の漸次膨大して腹腔に昇る時に至れば尿通は殆ど通常となり更に妊娠末期に至り前置せる兒頭の爲に壓迫

を受くるごきは再び頻數となる又骨盤内に於ける血管を子宮又は其内容に依りて壓迫せられ血液の循環に異常を來す爲に又は直接に直腸を壓迫せらるゝ爲に時としては頑固なる便秘を起すことあり

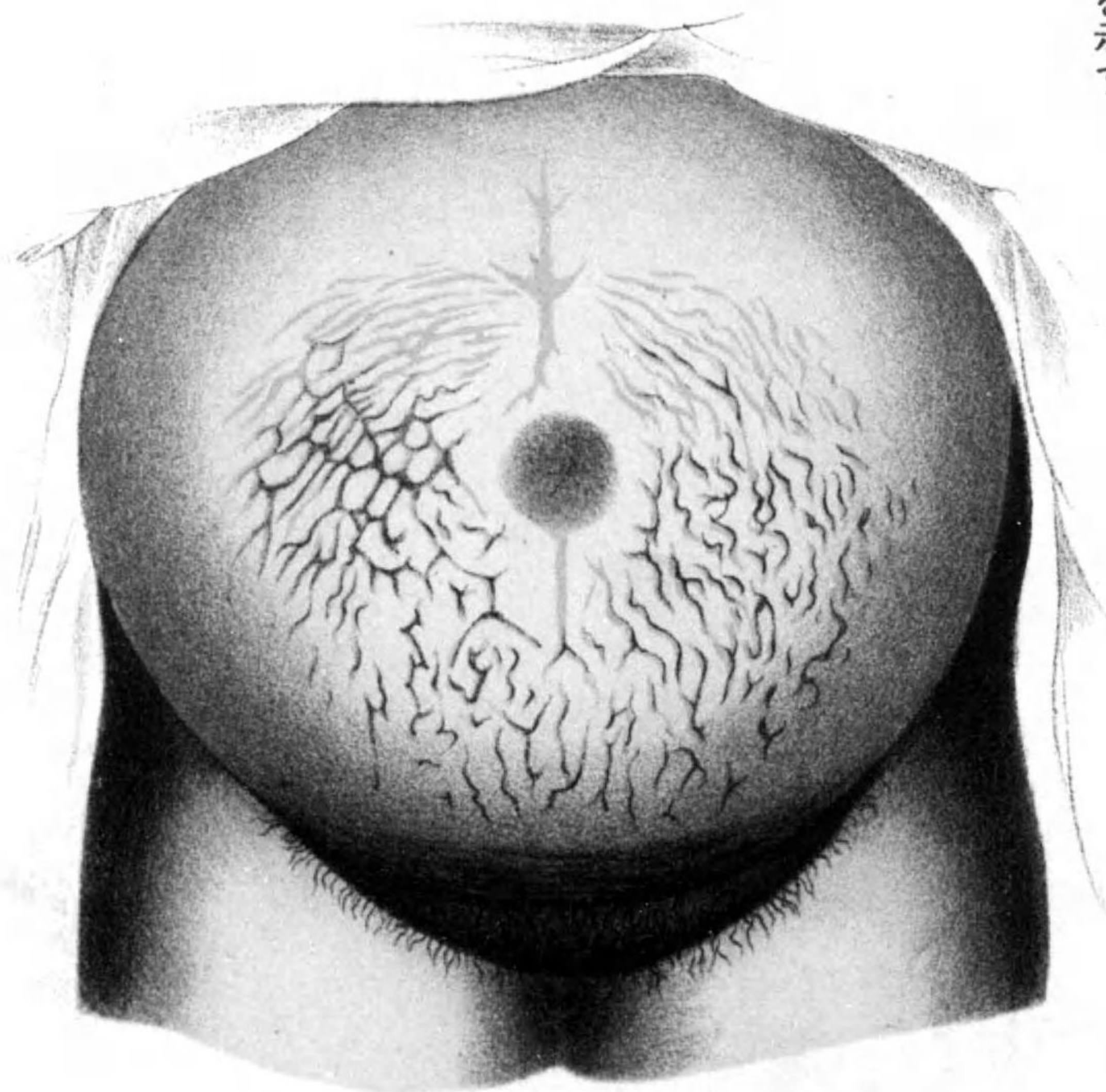
骨盤内に於ける血管が子宮又は其内容によりて壓迫せらるゝ時に靜脈管は動脈管よりも壓迫を受くること強きが故に下肢の血液循環をも妨げ下肢の靜脈管は太くなり皮下に在るものゝ如きは青色にして隆起して蛇行せるを見る之を靜脈の怒脹と云ひ怒脹甚しくして小き腫瘤の如くなるものを靜脈瘤と云ふ而して還流を妨げられたる血液の水分は周圍の組織内に滲出し其内に瀦溜して下肢の浮腫又は水腫を來す此の浮腫は殊に脛骨の前面内側の部分等に於て著しく認め



第四十九圖 腹壁の著色及妊娠線を示す

むるここを得又陰唇なごにも浮腫を來すここあり然れども
 静脈瘤と浮腫とは必ず相伴ひて來るものにあらず
 子宮の膨大に伴ひて腹腔膨大し腹腔大くなれば腹壁も亦伸張
 せらるべきも腹壁は伸縮し得るものなれば漸次に腹腔の膨
 大に應じ妊娠末期に至りては其伸張の極に達し遂に皮膚の
 深層に於て斷裂を生じ紫赤色にして光澤ある線條となりて
 現はる之を新しき妊娠線と云ふ而して此線條は分娩を終り
 たる後は褪せするも常に白色の横に走る細かき皺襞を具ふ
 る線條となりて殘存す之を舊き妊娠線又は妊娠痕と云
 ふ之に因りて經妊と初妊とを區別するの助となすことあり
 然れどもこの妊娠痕は妊娠に限らず他の疾病等にて腹腔
 の過度に膨大せられたる場合假令は下腹の腫瘤又は腹水等

第五十圖 妊娠線を示す



の時にも之を見ることがあり耻骨縫合の直上部の如きは破瓜
 期に於て全身の脂肪の増加する時に之を生ずることがあり其
 他腹壁に多少の着色を見ることありて暗色又は褐色となる
 殊に中央線に於て著しきを常とす腹腔の膨大は只に腹壁に
 關係あるのみならず横膈膜を舉上し呼吸作用を妨げ爲めに
 多少呼吸の短促を來し僅かに勞働すれば著しき呼吸促進を
 來すことあり又妊娠末期殊に妊娠九箇月の頃に至れば子宮
 の膨大其極に達する爲に強く心窩部を壓迫し充分に多量な
 る食物を取り難きことあるも妊娠第十箇月に入れば漸次に
 普通に食事をなし得るに至るを常とす
 其他の變化にして子宮體の膨大のみに基くものご考へ難きも
 のあり今より之を述べし

第六十九節 妊婦の全身に起る變化

全身に發する症狀の中最も著しく多く現るものは惡心吐逆なり殊に早朝空腹時に於て水の如きものを吐くこと多きも時として毎食時に吐逆するものあり之を惡阻と云ふ其他平日嗜好せる飲食物を嫌ひ却て常に好まざるものを喜び通常食料とせざる灰土白米の如きものを食することあり此等の症狀は概ね妊娠の初期殊に第二箇月の中に顯はれ長くとも三四箇月にして自ら減退するものなり然れども時として妊娠の後半期に及ぶものあり又甚だしきときは少しも食餌を取ることを能はずして甚だしき衰弱に陥り終に死に至るものありかくる場合の事は猶後篇に至り妊娠異常の章に詳に

述ぶへし其外流涎を起し又は妊娠の末期に至りて吐逆を發するところあり多くは子宮の膨大して心窩部を壓迫するが爲に起るものなり便通は時として秘結し或は下痢を來すところあるも便秘を來すもの多し又時として口腔に潰瘍を生じ或は齒齦炎等を起すところあり皮膚に發する變化は一般に僅に浮腫せるが如くに見へ顔面は少しく瘦せ其色蒼白にして黄色を帯び眼窩の周圍には暗色の輪を生じ顔面及胸部には雀斑の如き褐色の小斑を生ずるところあり或は少しも平日と異なることなきことあり或は顔貌却て少しく肥へ且活潑なることあり腹壁腰部臀部上腿等の脂肪組織は通常盛に發育し殊に上腿臀部等には妊娠線を見ることあり其他下肢に於ける靜脈管の怒脹腹壁中央

線の着色腹壁の妊娠線等を見ること既に上に述べたるが如し
妊娠中は血液の循環及び其分佈の有様平時と異なり且血液の
性質も亦多少變化するが故に眩暈嘔血心悸亢進等を來すこ
ごあり

精神の状態に至りては平時活潑なりし婦人妊娠して後甚憂
鬱となり或は常に沈着なりし婦人妊娠となりて後甚快活と
なることあり或は全く變化なきことあり多くは著しき原因
なきも分娩に對する危懼の念よりするか或は將來の家庭の
快樂又は苦痛を豫想するかに因るもの多しとす其他氣分變
り易くして容易に怒り又は泣くことあり又身體諸部分の疼
痛假令は頭痛齒痛筋痛腰痛膀胱部の痛等を訴ふることあり

第七十節 妊娠の診断

妊娠の診断をなすには

- 一 現に妊娠せるや否や
 - 二 初妊なりや經妊なりや
 - 三 妊娠第何月又は第何週なりや
 - 四 胎兒の位置は如何
 - 五 胎兒は生活せるや否や
 - 六 胎兒の大きさ殊に兒頭の大きさは如何
 - 七 骨盤の状態は如何なるや
- を調査すべし此諸點を決定する爲には尋問及び診査に依
らざるべからず

尋問には年齢、職業、幼時の健否、疾病の経過、小兒病の有無及経過、初經の年月及其後の経過、初經以後の疾病及経過、以前に分娩あらば其妊娠、分娩、産褥の経過、今回の妊娠の経過等を問ふべし

診査は今より後各節に述ぶるところに従ひて充分精密に之を行ひ猶尋問に依りて知りたることを参照して上述の諸點を決定すべし

妊娠の診断をなすには時として偽言をなすものあることを考へて尋問にのみ重きを置かず自己が診査して得たるところの所見に重きを置くべし從て診査は充分周到にして綿密ならざるべからず然れども妄りに尋問を輕ずるときは却て錯誤に陥るこそ少しせざる故に注意すべし

第七十一節

妊娠の徴候

鑑定 三月

妊娠に因りて身體に種々の變化を來すこと上に述たるが如きも其變化の中妊娠の時に於てのみ起るにあらずして他の場合にも顯はるくもの多し故に種々の變化を認め之に依りて婦人の妊娠せるや否やを確定すること必しも容易なりと云ひ難し時として婦人自ら妊娠せりと信ずるも輕々しく之に従ふことを得ず

今妊娠せる婦人に起る變化即ち妊娠の徴候を其診定の助となすべき價值により三種に分ち不確徵、半確徵、及確徵となす不確徵とは妊娠時に全身に起る變化を云ふ即ち悪心、吐逆の如き消化器に於ける變狀、尿意頻數、皮膚に於ける變化、疼痛の如

病にても起るこゝとあり且男子にても起るこゝとあるものなり
 半確徴或は疑徴は妊娠の爲に婦人生殖器に起る變化を云ふ
 即ち

- (一) 月經の閉止
 - (二) 子宮の軟かとなり且増大すること
 - (三) 膣並に膣口の粘膜の藍色に着色すること
 - (四) 子宮血管の雑音を聴取し得ること
 - (五) 乳房の變化
 - (六) 腹壁其他の皮膚に於ける着色
- 等なり而して此等の變化は妊娠にあらざる婦人にも來ることあり假令ば妊娠にあらざるして他の疾病にても月經の閉止

を來すこゝとあり子宮の疾病又は腫瘤の爲に子宮の増大する
 こゝとあるが如く之を以て必ず妊娠なりと定め難きものなり
 確徴は胎兒存在するにあらざれば起ることなき變化にして
 即ち

- (一) 胎兒の身體諸部を明に觸知すること
 - (二) 胎兒の運動を觸れ、聽き或は視知ること
 - (三) 胎兒の心音を聽き知ること
 - (四) 臍帶雑音を聽き知ること
- 等なり此徴候の一つ以上を知れば確に妊娠なることを定め
 得べし而して此等の徴候は何れも妊娠第五箇月の頃より後
 に至りて知り得べきものなり
 確徴の内にて胎兒の運動又は胎兒諸部分を觸知するには産

婆自ら之を認るにあらざれば確なりと云ひ難し假令は妊婦
 自ら胎兒の運動を覺えたりと云ふも必ずしも胎兒の運動に
 あらずして腹腔内に於ける腸管又は腫物等の少しく動きた
 るを誤りて感ずることなきにあらざれば注意すること要
 す
 上に述べたるところに依れば確徴を認めざれば妊娠を確定す
 ることを得ざるが如しと雖も妊娠の前半期に於ても不確徴
 と半確徴との多數のもの又は何れも皆明に認めべきとき
 は殆んど確かに診断をなし得べし故に妊娠の時に起る種々
 の徴候を注意して觀察し且其徴候が妊娠の決定に對して如
 何程の價値を有するものなるかを注意すべし若し一度の診
 察にて決定し難きときは再三の診察を経て決定するも亦可

なり
 甚だ稀に見る處なれども想像妊娠と稱するものありて月經
 閉止し妊娠時に來る種々の變化假令は惡阻の如き症状を訴
 へて腹部も時としては少しく膨大し胎兒の運動を自覺する
 ことあり時としては妊娠末期に至りて陣痛様の疼痛をさへ
 感じたるものありて醫師又は産婆の診断に由り始めて妊娠
 にあらざることを確定することあり斯る場合は妊娠を望む
 こと甚だしく且脂肪の非常に多く生じて甚だしく肥滿せる
 婦人又は精神の異常なごある婦人等に於て見ることあり故
 に産婆は常に細心注意して診査を行ひ之に由りて判断を誤
 らざることを務むべし
 雙胎妊娠に於ては二個の頭部又は二個の臀部又は單胎にあ

り得べからざる多數の手足に觸るゝこと又は二個の不同なる搏動ある心音を二個所に於て聽取り且其二個所の間に心音の全く聞えざるか甚弱くして殆んど聞えざるが如き部分ある等の事實に由りて之を確定するを得べし品胎以上の妊娠に於ても此理を推して診斷するを得べきも通常甚だ容易にあらず

第七十二節

妊娠並に分娩の時期を

算する方法

妊婦又は其家族より目下妊娠第何月なりやとの問を受け或は何時の頃分娩すべきやと問はるゝことあり斯る場合には次の條々に基き精密なる診査をなしたる後に答を與ふべし

第一には最終に通じたる月經の月日を問ひ其第一日より起算し二百八十日に相當する日を分娩の豫定期日となすなり而して曆月の九箇月と七日は曆月の大小に依りて多少の差を生ずるも大凡二百八十日に相當するを以て推算に便利なる爲に通常最終の通經の第一日に九箇月を加ふるか或は三箇月を減じ之に七日を加へて分娩の期日と看做すなり次には妊婦始めて胎兒の運動を感じたる日より起算し大凡二十週即ち四箇月と二十日の後を以て分娩時期と推定す其他妊婦自ら受胎の時を告げ得る時假令は一回の交接によりて妊娠せる時の如きは其月日に九箇月を加ふるか或は三箇月を減じたるものを以て分娩の時と推定することを得るなり